



\* 0019329000 \*

0019329-000

330.4-M178t

調查彙報

滿洲中央銀行調查課

第9輯

1939

ADA

昭和六年十二月

調查彙報

第九輯

滿洲中央銀行調查課

康德六年十二月

調查彙報

第九輯

滿洲中央銀行調查課

330.4  
M178A



# 調查彙報第九輯目次

## 調查及研究

- 一、滿洲貿易と輸出農産物の特殊性……………一
- 二、滿洲大豆輸出の動向と歐洲市場……………一〇
- 三、最近の麻袋市場を繞る諸問題……………一五
- 四、事變下康德五年の滿洲物價の動向と今後の展望……………二〇
- 五、滿洲主要都市と新京との日本人生計費比較並に東京と新京との生計費比較に就て……………二五
- 六、戰時下日本農業生産力と滿洲豆粕……………三一

38935

目次

調查彙報

滿洲中央銀行調查部

昭和六年十二月

38935

資料

一、康徳五年度全滿會社異動……………二四

二、康徳五年下半年中に於ける哈爾濱を中心とする北滿經濟界の動向……………二五

三、奉天市内當舖現狀及康徳五年度の業績に就て……………二九

四、大豆、豆粕の中國向輸出禁止の哈市特産界に及ぼせる影響……………三〇

五、一九三八年度上海支那側財界動靜……………三〇

六、事變下の中國、中央兩銀行營業報告……………三三

七、國民政府の公債の現狀と關稅擔保内外債元利支拂の停止……………三三

八、一九三八年に於ける支那貿易の概要……………三三

九、獨紙に現れた圓ブロック結成の進展……………三六

一〇、各國に於ける爲替平衡基金制度と金再評價差益……………三六

一一、獨逸財政の驚異と新計畫……………三四

一二、シヤハト博士の退場……………三九

一三、銀行法改正直前の獨逸經濟界……………三九

一四、フランス新聞に現れた獨逸の財政政策批判……………三九

一五、獨逸の經濟的弱味は輸入超過にあり……………三七

一六、獨逸統制經濟の研究……………三五

一七、チエツコ併合の經濟的意義……………三六

一八、スチス金融市場と金利に就て……………三九

一九、英蘭銀行の金賣却に就て……………四六

二〇、米國にインフレーションは必ず來るか……………四二



### 一、滿洲輸出農産物の時局的二性格

我々が現下の貿易、就中その輸出部門についての検討をなすに當つては次の二點に立脚せねばならない。即ち現下に於ける我國輸出振興の目的は、一つは外貨調達、二には圓ブロック、換言すれば我々がその中に生存してゐる、東亞協同體内の不足物資の補給といふ點にあらねばならない。

此の第一項については一般世論の一致する所であるが、第二項については甲論乙駁の状態である。

然しながら、吾人の觀點を以てすれば、兩者は互に同一目的遂行上の一便法に過ぎず、その終局の回歸點は、共に、東亞六億民衆の齊しく熱望して已まざる「興亞」の大業達成になければならない。換言すれば東亞協同體の繁榮をより大ならしむべく企圖するものでなければならぬ。

然しながらこれに對して、たまたま日本の圓ブロック内輸出制限を引用し、對日輸出の制限乃至阻止を力説するの論がある。然しながらそれは本末轉倒も甚しい。日本に於ては對滿輸出を制限して居るとは云へ、なほ且三、四億の支拂勘定となつてゐるではないか。然もその日本の對滿輸出品たるや、その原料は多く第三國からの補給に俟つて居るのである。即ち外貨の支拂によつて獲得した棉花を紡織し、バルブを人絹織物として之を我國に供給して居るのではないか。

翻つて一方我國輸出品について見ると、その殆んど凡ては原始生産物たる農産物であり、その間前記日本に見

られるが如き困難な事情は見當らないのである。それにも増して緊要なことは、日本に於ける當國品の需要増大は偏へに、第三國期待物資の節減による結果であることである。従つて當國よりの物資供給が圓滑を缺き、期待量獲得困難な事態を惹起した場合はどうであらうか。

時代は既に各個々の國家を考慮に置くと同時に、東亞全體のそれを念頭に置かねばならぬが如き時代に入つたのである。意識すると否とに拘らず、我々の環境は、吾々の住む世界は一大展開を來たして居るのである。

かゝる東亞の新事態の推移を考へる時、そこには幾多の再検討を加ふべき分野が存在して居るのである。貿易、別して、持てる滿洲國の資源供給に於ておやである。

更に滿洲事變を追憶するに於ては、圓ブロック内、就中、對日輸出貨資の制限等が企圖される合理性は見出せないのである。

滿洲事變の發端は何處にあるか。勿論幾多の原因はあらう。だが「滿洲は日本の生命線なり」と絶叫し、その外延的ファイナルとして演ぜられた、かの松岡全權の國際聯盟退の光景を回想する時、我々の胸によみがへるのは、當時に於ける日本人としての生々しい興奮であり、感激である。

「日本の生命線なり」といふ言葉それ自體には自ら軍事的國防的意義の包含されてゐるのは勿論であるが、經濟的相互依存關係の内包されてゐる事も亦争ふことは出来ない。

遠くは日露の戦に、近くは滿洲事變につぐ今次事變に於て、身命を賭した幾多の日・滿・支人の尊き犠牲は、

纏て「東亞協同體」といふ成果を結實せしめる礎石となされねばならない。かゝる見地より見ても滿支は夫々その一環として相協力し、盟主日本が戦ふ興亞聖戦をして、より華々しく意義づけしむることが、これら犠牲者の靈に對する、唯一最大の手むけではなからうか。

この意味に於て戦時下日本の對滿要請物資たる飼料、肥料は勿論、支那に於て缺乏しつゝある雜穀類の供給北支農民の宣撫工作、治安の安定が期待し得よう筈がない。

茲に於て滿洲農産物の東亞協同體內に於ける重要性の一端を窺知し得るであらう。

然らば圓ブロック内の對滿期待必需農産物資は何であるか。

日本向肥料、飼料としての豆粕及び飼料としての包米、高粱であり、支那民衆、就中北支民衆の主食物たる高粱、包米、粟等である。

然しながら一面圓ブロック内輸出の問題は供給餘力の問題に歸納し得る内包的因子を有つて居るのである。それ故供給國の一方的意示によつて決定され得るものである。従つてそこには外貨調達を意圖する第三國向輸出に見られる様な、需要國の國內諸事情並に國際的政治經濟情勢に障害される様なことはあり得ないのである。

従つて輸出振興對策の検討をなす場合に於ては、その兩者の絶對的重要度は一先づおいて、諸障害の散在する第三國向輸出を以て論議の中心となすのである。が上述せる所によつても明なる如く、ブロック内輸出振興と雖

も第三國向と同等乃至はそれ以上の重要性を持つてゐることは常に我々の腦裡に銘記して置かねばならぬ。

以下上述の如き觀念的基礎の上に立つて、我國貿易の現状並に輸出農産物の總論的概觀を試みよう。

## 二、産業開發五ヶ年計畫の進捗と滿洲貿易

### 1. 五ヶ年計畫の進捗と貿易尻の惡化

建國以來逐年目覺しき足跡を残しつゝ、一路開發へと驀進し來つた我滿洲國は、建國後既に數年を開し、國礎愈々堅きを加へると同時に、更に飛躍的成果を收むべく、産業開發五ヶ年計畫の樹立を見たのである。

本計畫が從來の實績に鑑み、主として鑛工業部門にその主力を注入したのは自然の勢である。

蓋し我國は由來典型的農業國であり、世界屈指の農産國である。廣袤七萬七千餘方里、既墾耕地一千五百五十萬町歩、現に四千萬住民の約八割五分迄は農業者であり、それ故農業方面はその生産段階に於て、他の先進農業國に比し多大の遜色ありとは云へ、他の鑛工業部面のそれに比すれば、尙一息し得るの現状にあつたからである。

然しながら、鑛工業の開發、それには多大の建設資材を要するは言を俟たぬ。一方建國前に於ける貿易状態について見ると、建國前五ヶ年平均に於ては輸出の六億三千九百餘萬圓に對し、輸入は僅に四億千三百餘萬圓に過ぎなかつた。それ故出超額は、實に二億二千餘萬圓に及んだが、その後は事變によつて破壊された鐵道、道路の修



理乃至國都建設等を始めとして、新興國家建設の理想具現工作の進捗に伴れ、建設資材の輸入は逐年多きを加へる一方、輸出は内外の諸障害に挾撃され、輸入と逆に、年々激減した爲、輸出超過現象は形勢一變入超に轉じ、昭和八年以後は再び出超を見ることなく、逆調の中に推移したのである。

然しながら、事變後の諸事情及歐洲方面の諸妨害も除々に取除かれ、昭和十一年頃より、輸出も漸次恢復歩調に轉じて來た。折しも前記の如き産業五ヶ年計畫の樹立である。工業と云ひ、鑛業と云ふも、その開發に多大の建設資材を要するは再言するまでもない。後進産業國たる滿洲國が、國內にてその建設資材を獲得し得ぬのは自明の理である。従つて建國後、その建設資材輸入によつて入超に轉じた我國貿易は、この劃期的大計畫遂行のため、更に一層多額の輸入を餘儀なくせしめられるに至つたのである。それ故前記輸出の恢復も、この雪崩の如き膨脹を示す輸入の前には一たまりもなく、年一年と入超額は増大の傾向にある。勿論これらの建設資材の大部分は、當國建國の親、育ての國たる盟邦日本に期待しての立案であることは考へられる。

然しながら、これらの計畫に齟齬を來さしめる重大な外部的因子が出現した。それは云ふまでもなく支那事變の勃發である。即ち昭和十二年七月突如として勃發した北支蘆溝橋事件に端を發する日支間の紛争は、勃發當時に於ける日本軍の不擴大方針も、相次ぐ支那軍の暴戾に、急角度の方向轉換を餘儀なくせられ、終に斷乎膺懲の師を大陸に進めざるを得ざるの最悪事態に押進められ、欲すると欲せざるに拘らず、事態は擴大に擴大を告げた。それ故計畫當初に期待した、對日依存資材の中の一部は必然的に供給不可能に陥つた。茲に於て當國五ヶ年

計畫は停頓のまゝに放任するか、積極的に日本以外の第三國よりの補給によつて所期の計畫通りに邁進するか、岐路に逢着したのである。だが日滿經濟一體の見地から見て事變が擴大すればする丈、對日期待資材の供給が不可能になる如き事態が惹起され、ばされる程、我國産業開發の度は一層促進せられねばならぬことは明である。そこには大いなる矛盾、大いなる困難が豫想される。即ち建設資材原料資材の供給が不圓滑を告げつゝあるにも拘らず、内外の情勢は、從來以上の開發促進を要請するに至るのである。従つて残された道は、第三國よりの補給により、盟邦日本の戦ふ興亞聖戰の銃後の一翼として、否東亞百年の平和をモットーとする協同體實現のために、敢然眠れる資源の覺醒を促がす事である。起つて持てる國の資源活用により、この東亞新建設に錦上更に一華を添へねばならぬ。

斯る事情を考慮の上五ヶ年計畫は幾多の障害と衝突しつゝ、漸次所期の目的に向つて邁進しつゝある。従つて前記の如く、これが建設資材の輸入も、この線に沿つて増進したのである。

今この間の事情を最近三ヶ年間の実績について検討して見ると、昭和十一年の輸出六億二百萬圓、輸入六億九千百萬圓、差引八千九百萬圓の入超なるに對し、同十二年には、輸出六億四千五百萬圓、輸入八億八千七百萬圓となり、輸出部面に於て、前年比四千三百萬圓の促進が實現されたに對し、輸入はその間一億九千六百萬圓と驚異的激増を示し、二億四千二百萬圓の入超を示したのである。

滿洲國對外貿易推移表

(單位千圓)

年次	輸出			輸入			差引入出超
	總輸出	再輸出	純輸出	總輸入	再輸入	純輸入	
	金額	指數	金額	金額	指數	金額	
昭和二年	六六,〇〇三	九五	二六,〇〇〇	二九,〇〇〇	九四	三三,三三五	二六,七五七
昭和三年	六六,八七八	一〇一	三三,四五四	四四,九四六	一〇六	四三,七四九	二〇八,七三三
昭和四年	六九,六八三	一〇〇	三三,五九六	五〇,三九八	一〇〇	四八,〇三三	一五六,七三四
昭和五年	六八,三四四	九三	一九,五〇〇	五八,八八四	九二	四六,三七三	一四九,六一二
昭和六年	七九,二七三	一一二	二八,八二三	七〇,四六〇	一一三	四一,五〇〇	一四九,六一二
以上五ヶ 平均	六〇,〇〇〇	100	三二,八七六	四〇,〇〇〇	100	四三,一〇八	三九七,七三三
昭和七年	六八,一五七	九四	二八,三九六	五九,九六一	一〇九	三七,六七三	二八〇,四八四
昭和八年	四四八,四七六	六六	二四,六八八	一三	四三,三七三	一八,三九六	六七,三五四
昭和九年	四四八,四七六	六六	二四,六八八	一三	四三,三七三	一八,三九六	六七,三五四
昭和十年	四三二,〇七八	六四	二九,五三三	一三	四九,九五六	二八,四七一	一四九,一三五
昭和十一年	六〇二,七五九	九二	七四,一四三	三三〇	五八,六六六	一三六	一八三,〇七一
昭和十二年	六四三,二九八	九六	八二,六四五	三七八	五八,六六六	一三六	一八三,〇七一
昭和十三年	七四,三七五	一〇八	八二,六四五	三七八	五八,六六六	一三六	一八三,〇七一

而して昭和十三年に入るや、その滞る所を知らざるが如き滔々たる輸入の激流は、益々その勢を強め、終に輸入總額は十二億七千百萬圓に達し、輸出の恢復もものは、入超額は五億五千六百萬圓を突破し、未曾有の激増を示したる前年に對し更に二・三倍増と雪崩の如き膨脹を顯現したのである。これは偏に輸出増進歩調を遙に上廻る輸入の激増によつて齎らされたものであることは疑ふ餘地はない。

茲に於て吾人の最も關心をひかれるのは、然らばかくの如き輸入の激増が如何なる國々に依存して居るのかと云ふことであらう。この意味に於て圓ブロック内たる日本向及び支那向並に外貨決済を要する第三國向に振分けて検討して見やう。

先づ煩雜を避ける意味に於て、又、この輸入激増現象が昭和十一年を境として顯著となつて來たといふ意味に於て、昭和十一年より昨十三年に至る最近三ヶ年間の実績について見ると輸出部面に於ても、將又輸入部面に於ても、圓圈内たる日支向、就中對日貿易が壓倒的地位を占めてゐることは周知の事實であるが、然らばそれは如何なる比重となつてゐるか。

先づ日本向について見れば、輸出は昭和十一年の四十七%より年々増大し、十三年には全體の半數たる五十%に對し、更に十三年には五十八%を占めるに至つて、これに對し輸入の占める比重はその絶對額の増大を他所に依然浮動して居るとは云へ全輸入額の七十五%乃至七十七%を占めて居り、依然日滿經濟不可分關係は嚴としてその成立の意義たる相互依存の實を昂揚して居るのである。

即ち滿洲貿易の六、七割は日本を對象として成立し居るのであり、別してその輸入に於ける比重は極めて大である。

それ故昭和十一年の入超額は二億四千八百萬圓を底として年々その額は遞増し、昭和十三年には三億四千四百萬圓となり、十三年には終に五億六千七百萬圓と、昭和八、九年度の全輸入額を遙に上廻る入超額を示したのである。

かゝる對日期待資材の膨脹は偏へに盟邦日本の絶大なる援助を要するものにして、新東亞體制の胎動を安からしむるの大乘的方策に基くものに外ならない。

この邊の事情を知悉する限り對日本向輸出の制限などが叫ばれる筈がない。謂はゞ日滿は文字通り經濟一體である。然らずしてかゝる貿易の趨向がどうして理解し得られるであらうか。

更に支那のそれを加算するに於ては、昭和十一年には輸出六十八%、輸入八十四%、十二年度には輸出は同じく六十八%ながら輸入は七十九%と稍停滞氣配を示したが、十三年には輸出は支那向減に拘らず、七十四%に達し、輸入亦八十三%を占めて居るのである。

次に第三國向について見ると、輸出は昭和十一年の四十一%より、同十二年には三十三%と漸次減退し、昨三年に於ては更に減退歩調はそのテンポを速め、二十六%を占むるに過ぎなくなつて終つた。

然しながらその絶對的數量について見ると昭和十一年に比し些したる減退は見られない。従つてこの輸出上に

占める歐洲の地位が年々減退しつゝあるのは一は日本向輸出の激増による相對的な現象である。尙最近に於ける世界農業國が等しく遭遇せる苦惱たる農産物それ自體に胚胎せる要因も見逃すことは出来ない。それは云ふまでもなく、近年の世界的農産物豐作による、農産品市價の低落であり、第三國向輸出價格がブロック内輸出價格より遙に下廻つた爲にその輸出價額の低下を見たことも争はれぬ事實である。この處世界の農本國は等しく所謂豐作飢饉に見舞はれてゐるのであり、ブロック内輸出に依存して居る我國の如きは特殊事情下にある爲その現象が餘りに微溫的であり、他の農業國に比し遙かに好條件の下に置かれて居るのである。

これと逆に輸入は年々そのパーセンテージを大にし、昭和十一年の十六%から、十二年には急増して二十一%に達したが、昨年は爲替管理の強化により終に十七%にと低下したのである。がこれは絶對數の減退に起因するものではなく、日本品輸入激増に對する相對的減退にして、むしろ實數は昨年度より相當の増加を示して居るのである。

然しなから茲に吾人の留意を要することは、これまで年々出題を維持し來つた對純第三國貿易に於て始めて入超を示したことである。

茲に輸出振興、就中その大部分を占める、農産物の時局的重要性が窺知されるのである。

地域別滿洲國貿易

(單位百萬圓)

年次	類別	日本		支那		第三國		合計	
		數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
昭和十一年	輸出	二八五・九	四七	二八・六	二	一八・三	四二	六三・八	一〇
	輸入	五三四・六	七	四七	七	一九・五	一六	六二・八	一〇
	差額	(一) 二四八・七		(一) 八〇・九		(一) 七六・八		(一) 八九・一	
昭和二十一年	輸出	三二・五	五	二二・七	一	二一〇・一	三	六四五・三	一〇
	輸入	六六・三	七	三九・三	四	一八二・八	三	八七・四	一〇
	差額	(一) 三四・八		(一) 七四・四		(一) 三六・三		(一) 三四三・一	
昭和三十一年	輸出	四二・四	六	二八・〇	六	一八四・九	六	七四・四	一〇
	輸入	九九・二	七	七五・七	六	二六・三	七	一二一・二	一〇
	差額	(一) 五七・七		(一) 四三・三		(一) 三二・四		(一) 五六・八	

更にこの第三國期待輸入金額を主要五大關係國に分別し、昭和十五年を基準として検討してみると、獨・英・米の三國共十一年には夫々五%乃至二十二%方の減退を示して居るが、十二年には五ヶ年計畫の進捗と支拂事變による對日期待資材の不圓滑により、各國共一齊に激増し、米國の如きは十年度の二・三倍の多きに達し、印度・

蘭印の九十一%乃至七十七%増、英獨と雖も共に十八%の激増を記録したのである。

然しながら茲に吾人の注目を要するのは、昨十三年に入つてからの推移についてである。

即ち米國及び獨逸期待資材の依然たる激増に對し、英國とその屬領たる印度、並に蘭印からの輸入は、これと逆行してゐることである。

これは如何なる原因に依存するのであらうか。

對獨輸入の躍増は、兩國關係が年と共に政治的緊密度を増すと共に經濟提携も漸次強化されつゝある證左であるとすれば、何等の疑點を挿む餘地はないが、茲に問題となるのは對米輸入の累増である。

對英輸入の減退は英國の對日感情悪化による、日本乃至その勢力圏内の物資排斥による結果であらうことは想像されるが、對米期待資材の斯る雪崩的激増には多大の検討がへらるべきである。滿獨貿易協定増進の見地よりも、この滿獨兩國間の經濟的政治的折衝によつて、この邊の矛盾を清算し、日滿支、圓ブロック内の足らざるは獨伊に補給を仰いでこそ、現下の政治經濟體制下に於ける眞のブロック乃至協定國間の福祉が齎られる所以ではなからうか。この間の事情は明に次表に物語られて居るのである。

斯る問題は輸出促進對策と並行して究明さるべきものであるが、茲には研究テーマの一として提起するに止める。

主要第三國向輸入高國別構成表

(單位千圓)

年次	獨逸		英國		米國		印度		蘭領印度	
	價額	指數	價額	指數	價額	指數	價額	指數	價額	指數
昭和十年	一四、六七三	100	九、四八八	100	二四、九六六	100	三三、八六六	100	三、〇六三	100
昭和十一年	一三、〇三五	八九	七、四二九	七六	二三、七三三	九五	二八、三三四	二八	六、八五九	二二
昭和十二年	一七、三二九	二二八	二、二二八	二八	三七、五三三	一五二	四三、六四四	一六〇	八、九四八	二八
昭和十二年 上半年	八、三三七	100	四、八七四	100	二〇、五九六	100	二〇、四九九	100	四、六〇〇	100
昭和十三年 上半年	一五、一六五	一八三	三、八三七	九	五、四二六	二八	一六、〇〇元	七	五、五三	一〇〇

では次に吾國の對外期待資材の内容についての概観を試みよう。

2. 滿洲輸入貿易の構成

先づ我國輸入貿易の構成について一瞥しよう。

凡ゆる方面に躍進的進展の跡を残しつつある、當滿洲國は、世界の新興國の歴史が如實に、而も例外なしに物語つて居る如く、年々多額の建設資材の輸入を必要とすることは前述の通りである。

試みに最近三ヶ年間の輸入統計について見ると次表の如く、その主要部分を組成して居るのは、全製品であり、大體全輸入額の半數を占めて居り、亞いで原料用製品と食料品及嗜好品である。

然しながら右主要類別中、食料品及嗜好品は年々漸減してゐるに反し、他の原料品、原料用製品及全製品等は一齊に年々増加し、原料品の如きは、昭和十年の二千五百餘萬圓から、十二年には終に六千三百餘萬圓と、實に僅々兩三年間に二・五倍近くの躍増を示してゐるのである。次に主要構成要素たる全製品は如何と見るに、これ亦同期間中に二億八千餘萬圓から、四億六千七百餘萬圓に激増し、終に全輸入額の五十三%を占むるに至り、本品が輸出部門に於ける大豆同様、當國輸入の動向を左右してゐるのである。

最近三ヶ年間に於ける輸入額構成類別表

(單位千圓)

年次	昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		同上		
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	十年	十一年	十二年
食料及嗜好品	二九、九三三	三〇	二八、四八八	二七	一〇五、二五四	一三	100	九九	八八
原料品	二五、七九九	四	四一、七五五	六	六三、七三八	七	100	一六三	二四七
原料用製品	八二、〇一一	四	八〇、六〇〇	二二	二七、九二六	一三	100	九八	一四四
全製品	二八〇、五五八	四六	三三三、四〇九	五二	四六七、六二五	五三	100	二二六	二六七
其他	九五、八七六	一六	九七、五三七	一四	一三、八七九	一五	100	一〇三	一三九
合計	六四〇、一四九	100	六九一、八三〇	100	八八七、四三三	100	100	二二五	二七〇

その意味に於て、全製品の内容を更に詳細に分類して見れば、次の如く、機械・工具及び車輛・船舶は全體の

二十五%を占め、特に機械・工具の増加は目覺しいものがあり、就中一昨昭和十二年に至つての加速度的増加は、一面國際收支悪化の要因となつてゐるのである。然し同時に新興帝國滿洲の華々しい建設の進捗、産業の發達を如實に物語つて居るものである。

(一) 全製品構成表

(單位圓)

品 種	昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		同上三ヶ年指數	
	價 額	割 合	價 額	割 合	價 額	割 合		
機械及工具	三三、五〇〇、二四	二二	三八、九二七、六四九	二二	六五、九〇〇、六一	二四	一〇〇	二六
車輛及船舶	三九、八四四、四七二	二四	三九、五五〇、三三二	二二	四六、四〇六、二六三	二〇	一〇〇	九九
漂白及染色綿布	二五、六四九、二七一	九	四〇、七六九、三二	二二	四四、四三三、五八	二〇	一〇〇	二五九
生綿布	二四、三二七、八二四	九	三三、〇四八、二〇〇	九	四三、七七一、〇五三	九	一〇〇	一三三
絹織物	一九、七〇九、五二	七	三五、六八二、九二七	一〇	三〇、六四五、九二	七	一〇〇	一八二
電氣用品	一五、二八〇、九七七	五	一六、三三七、三〇〇	四	二六、五〇二、三五九	五	一〇〇	一〇七
紙	二二、九五九、二九四	五	一六、七九三、九六三	五	二四、八六四、六五六	五	一〇〇	二二九
其の他	一〇九、三七三、二四八	三九	一三三、二九一、四〇〇	三八	一八六、〇八八、四四五	四〇	一〇〇	一三三
合 計	二八〇、五五八、一五〇	一〇〇	三三三、四〇九、四七〇	一〇〇	四六七、六二四、八二五	一〇〇	一〇〇	一三六

### 三、滿洲輸出貿易の特徴

#### 1. 五ヶ年計畫の推進力としての輸出振興

以上の如く逐年増大しつゝある輸入、就中産業五ヶ年計畫の本格的進行の開始された一昨昭和十二年度よりそのテンポを速めた輸入の激増—貿易尻の悪化—就中對第三國向逆調を泰然として眺め産業の勃々たる躍進を夢想するためにはこれに對する適當の善後策が必要なるは言を俟たぬ。その爲には勿論ゴールドの獲得が決定的要素であることも周知の事實である。従つて當國の現状に於てはゴールドの獲得對策こそ最緊急、最重大事であると云ひうる譯である。然しながら現在の經濟社會に於ては單に眞のゴールドのみが經濟的ゴールドではない。

日本に於ける生糸・綿糸布等これ皆横濱なり神戸港出帆のドラの音と共にゴールドと化するのである。滿洲大豆亦然り。即ち國內に在荷として散在してゐる間は大豆必しもゴールドではないが一度大連を首めとして北鮮三港たる雄基・清津・羅津及安東・營口等の海港に搬出され、歐洲航路船に船積されることによつて大豆は變じて金色燦然たるゴールドに化するのである。勿論山を掘つて黄金を求むるのも、川に砂金探求するのもその歸する目的は一である。然しながら切迫せる建設資材の購入に充當すべくそのみに頼るは餘りに迂遠的で手段たるの慥なしとしない。従つて刻下の急務たる貿易尻改善といふ目前の懸案を解決するには先づ輸出の増進による外貨の獲得を期し、然して後第二、第三の手段に移行せねばならぬ。

即ち當國の現状より見て輸出促進こそ喫緊の對策であり、この對策の成否如何は、當國産業開發遂行に多大の影響を與へるものである。換言すれば輸出増進による外貨の獲得こそ前記産業開發を期待せる方向に誘導し得る最大の推進力である。斯る觀點よりして當國の刻下に於ける最大關心事は正に輸出振興對策であらねばならぬ。

2. 滿洲輸出貿易と農産物

では躍進滿洲の行衛を決定するとも見られる我國輸出貿易は如何なる状態に置かれて居るか。

由來我國は後進産業國である。従つてその輸出貿易の過去及び現在の實績に照して見ても、そこにこの國の特性たる農産物を首とする林産・畜産・水産及び鑛産物等原始生産物の重要性が見られるのである。而してそれらの原始生産物の輸出上に占める地位は決定的であり全體の九十三%乃至九十五%を占めてゐる。今この邊の事情を根據づけるために建國前の趨勢及びその後の輸出構成目について検討して見よう。

即ち全輸出額の中農産物は建國前五ヶ年平均の七十九%を最高とし昭和十年の七十四%を最低とする七十數%の間を浮動し、それに亞いで鑛産物の十一%乃至十四%であり、この兩者にて既に全體の九十一%乃至八十八%を占めて、大勢を支配して居り、以下工産物の二%乃至四%、畜産物の一%乃至三%、林産物、水産物の一%乃至二%である。

斯る輸出品目の構成は、近代資本主義國家の貿易統計上には見られぬ奇現象である。謂はゞこの國の産業的後

進性を如實に物語るものであり、農業國滿洲の特異性を赤裸々に露呈してゐるのである。この間の事情は次表に明かである。

建國前より最近に至る滿洲輸出額構成の推移總輸出額の構成

(單位千圓)

年次	總輸出額		農産物		畜産物		林産物		水産物		鑛産物		工産物		其他	
	金額	割合	金額	割合	金額	割合	金額	割合	金額	割合	金額	割合	金額	割合	金額	割合
建國前五ヶ年平均	六八、五三七	100	五四、四九七	七九	一三、九五四	二	八、五〇六	二	六、二二三	一	七、〇〇五	二	一三、三六三	二	一、九四九〇	三
昭和七年	五九、七一	100	四二、一八七	八〇	六、三三八	一	五、四〇一	一	九、五二四	二	六、四八五	二	一五、三三二	三	一三、三九四	三
昭和八年	四三、七九	100	三三、四三三	七七	八、五九七	二	三、八五六	一	四、一六三	一	六〇、八七七	二	一一、八九七	三	六、九六六	二
昭和九年	四九、九五六	100	三三、一〇九	六七	七、三六	二	四、一八五	一	五、八四四	一	五五、二八二	二	一一、八八七	三	七、三三三	二
昭和十年	三九、五四五	100	二九、〇四三	七四	一〇、一五〇	三	四、四九二	一	五、一三八	一	五五、五六四	二	一六、一八九	四	八、九五〇	三
昭和十一年	五八、六七	100	四〇、七八	六九	一四、四三三	三	三、〇八三	一	五、四二九	一	五七、二〇〇	二	二二、六〇六	四	一四、〇六九	三
昭和十二年	五二、六七三	100	四三、二七四	八三	一七、五六一	三	三、一七一	一	七、六五八	一	六〇、三八九	二	一九、〇三三	三	三三、五六六	四
建國後六ヶ年平均	四八、七三三	100	三六、六二	七五	一〇、七六一	二	四、〇〇八	一	六、二九一	一	五九、六四〇	二	一六、三七七	三	一三、〇六	三

3. 滿洲輸出貿易と大豆

では輸入に於ける例に倣ひ輸出貿易の支配的地位にある農産物の内容を更に細分すれば幾多の油料子實及びそ

の製品乃至は雜穀等によつて構成されてゐるが一見して吾人の注目をひくのは實に大豆三品の超抜的地位である。前表に於ける農産物の地位は本表に於ては大豆に置き換へられたかの觀がある。即ち茲に於て滿洲の輸出はその七、八割までが農産物であり、その農産物の七、八割までは大豆及びその製品たる豆粕豆油によつて占められてゐることが知りうるのである。換言すれば滿洲の輸出は大豆及びその製品の輸出であるとさへ云ひ得るのである。

輸出農産物の構成表

(單位千圓)

年次	建國前五ヶ年平均		大同元年		大同二年		康德元年		康德二年		康德三年		康德四年		建國後六ヶ年平均	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
大豆三品	三七五、五七〇	七三、三六	七九八、七九八	六二、四四	七五三、二〇〇	六九、二〇	六九三、〇九	六九、二〇	六九三、〇九	六九、二〇	七三三、七五五	七三、三六	七三三、七五五	七三、三六	二七四、四〇一	七三、三六
蘇子三品	二、三三三	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七	一、四一七
落花生	八、九八四	二、八四三	八、八二六	三、四二九	二、九三三	四、一四一	一、五、一四一	四、一四一	一、五、一四一	四、一四一	一、五、一四一	四、一四一	一、五、一四一	四、一四一	一、五、一四一	四、一四一
其他實油	六、四三三	一、五、一一	九、九二五	三、二、九三	二、九三三	四、一三、〇九二	八、四〇三	二、七、三〇〇	七、三〇〇	二、七、三〇〇	九、四四四	二、七、三〇〇	九、四四四	二、七、三〇〇	九、四四四	二、七、三〇〇
粟	三三、五九二	七、三、五五六	一、四、七四六	五、一九、四四〇	一九、四四〇	六、一、〇五〇	一、八、三三九	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七	一、四、一九七
高粱	二一、五一一	四、二、八、四〇二	七、二、二五	二、七、三二一	二、七、三二一	三、三、九三三	二、一、七、六六	三、三、九三三	二、一、七、六六	三、三、九三三	二、一、七、六六	三、三、九三三	二、一、七、六六	三、三、九三三	二、一、七、六六	三、三、九三三
榨蠶糸	一五、三三〇	三、一〇、五五五	二、一〇、〇三二	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇	三、八、二四〇
合計	五〇四、九九七	一〇〇、四、二、一八七	一〇〇、三、七、四三三	一〇〇、三、八、一〇九	一〇〇、二、九、〇四二	一〇〇、四、〇、七七八	一〇〇、四、三、二七四	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二

年次	建國前五ヶ年平均		大同元年		大同二年		康德元年		康德二年		康德三年		康德四年		建國後六ヶ年平均	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
玉蜀黍	五、六八八	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三	一、一、四三三
小麥三品	九、〇三四	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八	三、四、四六八
豆類	一五、〇三九	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三	三、一、一、五三三
其他穀類	五、八九七	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五	一、九、九九五
其他	六、〇二七	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九	一、四、〇、六九九
合計	五〇四、九九七	一〇〇、四、二、一八七	一〇〇、三、七、四三三	一〇〇、三、八、一〇九	一〇〇、二、九、〇四二	一〇〇、四、〇、七七八	一〇〇、四、三、二七四	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二	一〇〇、三、七、六二二

而して更にこの特産の大宗たる大豆三品の地位を價值付けるもう一つの要素がある。

それは大豆以外の油料子實及雜穀等の需要が多く日本及支那等東洋就中圓ブロッツク内に局限されて居るに反し、大豆の消費市場は東洋圓ブロッツク内諸地方は勿論、全世界に需要されて居り、就中歐諸國の需要が大であるからである。謂はゞ滿洲大豆は世界的商品性を有してゐるが他品は世界市場に於ける輸贏條件に缺けて居るからである。

即ち大豆はその製品—否むしろ極めて單純にその内容を物理的に含油分とその他に振分けたに過ぎぬ—たる豆粕・豆油との合計需要高に於ては後述する如く、全く洋の東、西によつて明かに二分されて居るのである。假に大豆三品輸出高が三百萬噸を算したとすると、その半數たる百五十萬噸は歐洲に於て需要されたと見て間違ないのである。



一方、これまで出超を持続して来た、中國を除く所謂純第三國向貿易も、終に昨年度に至り形勢一變入超に轉ずるの餘儀なきに立到つたのである。茲に於て第三國向輸出促進問題が従前以上の重要性を以て前面に押出され、異常の熱意と緊迫性を以て再検討され始めたのである。

従つてその量的見地より見ても、將又その需要分布より見ても從來の實績から推して、大宗大豆がこの對策の中樞的存在として依然獨占的重要性を以て迎へられるのは當然である。

だが最近大豆輸出の前途に悲感的論調が見られるに至つた。それは後述する如く當國經濟が刻下の特殊的政治情勢下にあるが故に稍もすると世界經濟の大勢と乖離するが如き諸現象を現出しつゝあり、國內生産物たる大豆亦必然にこの餘波を感受せざるを得ないからである。直言すれば大豆は國內に於て生産される農産物の一である。従つてその價格が國內の經濟情勢の動向に従つて浮動するのは當然である。國內物價が今日の如く飛躍的に昂騰して居る現在、生産農民の生活必需品の昂騰は免れぬ。然りとすればそれに相應する程度の生産物の昂騰は農民に國家經濟の基礎を置く當國の現状より見て、當然是認されねばならぬであらう。前記の如く輸出振興の絶叫されてゐる今日その對策の根本的要素は常に生産の増加による豊富なる供給餘力の涵養にあるは多言を要しない。農民にとつて生産物の價格昂騰は何よりの増産獎勵策である。無策の策である。これに反する現象が惹起された場合は如何であるか。

要は彼等農民の購入物資價格と販賣物資價格との關聯に於いてのみ解決し得るのであり、この間の事情を考慮

することなしに、徒らに輸出農産物なるの故を以て本品のみを世界市場の動向とその歩を一にせしめるが如きことは現下の情勢より見て、大局的、大乗的對策とは稱し得られぬのである。

眼を世界經濟の流に注ぐ時、そこに我國のそれと極めて方向を異にせる諸種の現象が見られるであらう。

現在の我國内諸物價は全く世界經濟の主流と合流し得ぬ、独自の波動を畫きつゝ、獨自コースをとつて流れてゐるのである。

即ち米國の不況、歐洲經濟の鈍重による諸物價、就中農産物價格の低落は、茲兩三年の世界的大豐作と相俟つてその極に達してゐる。従つて大豆の競争品たる亞麻仁・落花生・棉實・棕櫚核・及椰子實(コブラ)等の市價は軒並に低落してゐる。大豆とてもこれらの大勢に逆行しこれを反對の方向に押やるには餘りに薄弱である。それ故國內諸物價昂騰の今日と雖も克く平靜低調に推移し昨特産年度に於ける平均價格は一昨年度に比し實に一方の下値に置かれてゐるのである。とは云へ前記の如く世界の主流に桿さすまでに低落するには國內物價の騰貴が餘りに顯著である。茲に弱氣的前途悲觀論者の論據があるのである。これらの事に關しては大豆の項に於て詳述することゝし、茲には省略するが尙ほ一つ挙げられるのは大豆の販路が既に決定的であり、極めて局限され、輸出伸力に乏しいことである。

然してこれら悲觀論者の多くは大豆に代ふるに、他油料子實たる、落花生・蘇子及び高粱・粟・包米・蕎麥等の雜穀輸出の促進を以てすべき事を強調するのである。

勿論理論的には大豆一本の單純農業から脱し、多角的商品作物の栽培へと轉換し、輸出額の安定度を増さんとするものである以上何人と雖もこれに異論のあらう筈がない。  
農産物十萬噸の輸出増進はとりも直さず一千萬圓の産金量に値するのであつて見ればなほさらである。

#### 四、輸出農産物の使命分析

##### 1. 概 説

だが一度我國の現状に想をやる時果して前記の如き、大豆以外の油料子實並に雜穀の輸出促進が期待しうるであらうか。

先づ前掲輸出農産物の構成表より、建國前より、昨今に至るこれら油料子實及雜穀輸出の消長表を作成して見よう。

本表に於て先づ吾人の瞳に映ずるのは蘇子の著増である。即ち蘇子は建國前五ヶ年平均輸出高に比し、年一年躍進し昭和九年には終に二倍、翌十年には四・六倍、更に十一年には九・二倍と僅々數年間に斯る驚異的激増を示したのである。而して十二年には幾多の障害が横はれるにも拘らず、なほ且八・三倍を維持し得たのである。

これについて堅實の増勢を辿つて居るのが落花生である。落花生はこれ亦一年として停滯せず着々その地歩を礎いて來て居るのであり、昭和十二年度の實績は、建國前五年平均に比し一・八倍を示して居るのである。

この外増加したのはその他油料子實たる蓖麻子及小麻子・胡麻その他豆類たる赤小豆・吉豆並に包米等である。

従つて最近輸出増進傾向を辿つて居る前記蘇子・落花生其他油料子實・其他豆類及包米等の輸出が當面の課題たる輸出振興對策の一環として注目され始めたのである。

然しながら包括的輸出高を以て、今日の課題たる輸出促進、輸出振興策を論ずるのは餘りに當を得ない。勿論、新東亞建設のための日・支向必需資材の輸出促進對策が等閑に附し得ざることは續々するまでもない。我々は輸出のための輸出振興を企圖するものではない。端言すれば日本を盟主とする新東亞再建設のための輸出振興でなければならぬ。それ故吾人は動もすると輕視され勝なブロック内輸出についても、外貨獲得を目的とする第三國向輸出と同等否より以上の努力を以て日・支對滿期待物資の圓滑、潤澤なる供給餘力を確保すべきことを痛感するのであるが、これは又稿を改めて論述する心算である。

主要農産物輸出消長表

品 種	建國前五ヶ年平均	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	建國後六ヶ年平均
大豆三品	100	196	155	162	154	171	183	173
蘇子三品	100	212	212	228	244	293	330	344

花生	其他油料	菓子	高粱	榨蠶糸	包米	小麥三品	豆類	其他穀類	其他	合計
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
6	9	7	13	6	6	7	7	6	6	6
9	14	4	4	5	8	1	6	18	6	5
27	20	9	3	4	8	3	6	37	5	5
16	20	7	9	5	6	3	6	13	6	6
9	10	4	6	4	3	5	9	6	4	2
13	23	3	6	5	10	9	8	24	2	6
27	26	9	4	8	9	9	9	22	7	7

それ故前述せる大豆以外の油料子實及雜穀の輸出振興が大豆と同様の意味に於て取扱はれるのならば、そこには勢ひ今一つの検討が加へられねばならないのである。

それは云ふまでもなくその仕向地別の検討である。前掲二表を中心に當國輸出農産各品の輸出額及全輸出額中に占めるウエイト、並に各品それ自體の輸出消長については計數に立脚して觀察を終へたのであるが、これらが大豆と同様の使命を帯びるためにはこれら各品の輸出額の構成を更に仕向地別に再検討せねばならない。

細部の觀察は各品目別の項に譲り、茲には國內生産のいかなる部分が輸出され得るか。又その輸出總額を、日滿・支プロツク内及第三國向とに振分は吾人は如何なる品目に留意すべきであるかの概要を把握しようと思ふのである。換言すれば第三國向輸出促進期待産物は如何なるものであるか。而してその數量は如何。といふ問題に對する大體の見透しをつけ然る後に個々の検討に移らうと思ふのである。

## 2. 大豆

大豆については縷々説明するまでもなく、國內生産高の七・八十%は輸出に振向けられるのである。即ち建國前五ヶ年平均について見ても、その大豆及製品豆粕・豆油の合計輸出高は實に四百萬噸を突破し、全生産額の八割三分に達して居たのであるが。最近建國のモットーたる安居樂業、王道樂土の實が着々顯現され、一般民衆の生活程度の向上と、人口の急激な増殖により、國內消費高が年々その數を加へるに至り、總生産高に對する輸出高のパーセンテージは大體七割見當となり、茲三年間は全く七割を堅持して居るのである。それは國內消費の漸増に對するに増産の實が着々進捗して居るからであり、萬一生産の減退を來す様な事態が現れたらどうであらうか。

人間の生活が一旦染まつた環境から直ちに脱出し得るの困難なるは言を俟たぬ。人口の増殖と文化の向上により、大豆の消費は年一年と加はりつつある。然してその數量は概ね、百二、三十萬噸に達し、今後共年々選増して行くことは自然の勢である。

従つてこの七對三の割合も右の様な順調の増産が爲されてこそ始めて、斯る割合が示されたのであつて、これと反對の場合には勢ひ、國內消費高對輸出高の割合は茲兩三年來維持し來れる均衡を保持し得ざるに至ることは想像に難くない。

大豆生産高對輸出高、國內消費高推移表

(單位 輸出高は三品合計)

年次	生産高		輸出高		差引消費高		同上指數	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	生産輸出	消費
建國前五ヶ年平均	四、九三〇、四三三	100	四、一〇一、四九九	八三	八三八、九四三	一七	100	100
昭和 七—八年	四、三六七、八九〇	100	三、四〇〇、〇九九	八〇	八七〇、七九一	二〇	八七	100
昭和 八—九年	四、〇六一、〇〇〇	100	三、三三七、六九九	七四	一、二三三、三〇一	二六	八三	100
昭和 九—十年	三、三九八、三三五	100	二、九六六、一三八	八九	四三三、一六七	二二	九三	100
昭和 十一—十二年	三、八六三、六八八	100	二、七七七、六八九	七〇	一、四四三、〇九九	三〇	九六	100
昭和 十一—十二年	四、四七三、三六六	100	二、八七〇、九一二	六九	一、二六六、四七五	三三	七〇	100
昭和 十二—十三年	四、三三三、四七五	100	三、〇六三、三九八	七〇	一、二八九、〇七七	三〇	七五	100

従つて吾人が生産高を知つてその年の輸出可能數量を豫想するには、全生産高より推定國內消費高たる百二、三十萬噸を控除すればその殘餘數量は特別の事情なき限り直ちに輸出可能量と見做すことが出来るのである。そこ

で問題になるのは次年度特越量であるが、これは年により多少の増減はあるが概ね一定せるものであり、この點は大勢を知る上に於ては何等考慮の要なきものと思はれる。

之を要するに生産高の増減が終局に於ける大豆輸出高の消長を代辨するものであることは永年に亘る実績によつて雄辯に物語られて居るのである。

従つて大豆の輸出の消長は過去の実績の代辨する如く、殆んどその生産の増減に支配されて居るのである、勿論需要と供給との間に介在する相關的經濟原則が嚴として作用する限り、その供給地に於ける生産數量が需要市場の動向によつて影響されることも見逃すことは出来ぬが。

次に輸出高を日本・支那・歐洲及其他と大きい需要地別に分解すれば、以上四地方の中最も需要の多いのは歐洲向であり、亞いで日本、支那の順序である。即ち歐洲は大體百三、四十萬噸を需要し、全體の四、五十%を占めて居り、日本も略歐洲と同額を輸入して居るのであり、支那は、滿洲建國以來逐年減退し、今支那事變勃發以來は全く逼塞の状態に陥つてゐるのである。

以上は數量についての各地向需要の比重であるから、これを價額について見る時はその間に相當の懸隔が存在するのである。即ち歐洲向數量の殆んど全量は大豆そのものであるに對し、日本向數量の過半数は、原料大豆價格より遙かに下値に置かれてゐる豆粕によつて構成されてゐるからである。それ故貿易の最終目的遂行の見地から見る限り、本表日本向大豆數量は相當減額されて然るべく、かくてこそ第三國たる歐洲及其他地方對圓ブツ

ク内日・支向五分と五分と云ふ法則ならざる法則もより一層嚴存する譯である。

大豆三品合計輸出高仕向地別構成表

(單位 噸)

年次	日本		支那		歐洲		其他		合計	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
建國前五ヶ年平均	一、六七、六四〇	四〇	六六、八六五	一九	一、五四九、一六三	三六	二七、六四八	三	四、一〇、四九九	一〇〇
昭和 七― 八年	一、七二、〇三三	三四	四〇五、九九六	二二	一、七〇、三三三	三二	八三、七二五	三	三、四、〇〇九	一〇〇
昭和 八― 九年	一、四三、三六八	四二	二七三、六八八	八	一、六三、一三〇	四六	六、五二二	五	三、七、六九九	一〇〇
昭和 九― 十年	一、三六、二四九	四六	三五八、〇二二	二二	一、一五七、三三四	三九	八四、六五〇	三	二、九、六一六	一〇〇
昭和 十一― 十二年	一、三九、七〇八	三二	二八、一三八	八	一、〇八三、五九三	四〇	二六、四三〇	一	二、七、七、六九九	一〇〇
昭和 十二― 十三年	一、三三、七三三	四六	三三、一六六	八	一、三四、四一六	四三	九、六六六	三	二、八、七〇、九九	一〇〇
昭和 十一― 十二年	一、五三、六三五	三〇	九、九三二	三	一、四四、九七七	四七	一五、八九五	一	三、〇、三、三九八	一〇〇
昭和 十二― 十三年	一、三三、七三三	四六	三三、一六六	八	一、三四、四一六	四三	九、六六六	三	二、八、七〇、九九	一〇〇
以上六ヶ年平均	一、三六、七六〇	四四	二六三、六八八	九	一、三六〇、四三三	四三	六二、一四三	三	三、〇、六、九、三〇三	一〇〇

尙これら地方向輸出の消長について一言しよう。

大豆の輸出減退が高唱される現在、その減退事情を究明することは最も緊急事であるがこの問題に対する検討は次項にゆづり、その推移の大勢だけを概観しよう。

前掲輸出數量表についてその消長表を作成すること次の如く主要需要地たる、歐洲・日本向はその生産高の恢

復に伴れ漸次舊に復し、昨昭和十二―十三年度に於ては早くも建國前五ヶ年平均実績に迫りつゝあるに反し、支那向及び其の他向は依然減退の一途を辿り、別して支那向の如きは、終に同期間に九十二%減となり、杜絶と云ふ形容を以てした方がむしろ適切であるかの觀さへ與へるのである。

然しながらこの方面に對する輸出の恢復は事變が現下の状態にまで展開せる今日に於てはむしろ、當國に於ける輸出餘力の問題に置き換へられるべき問題である。事變の新段階下に於ける長期建設下にあつては本品の需要増大は期して待つべく何人も疑點をさしはさむ餘地のない所である。何故かならば滿洲事變後に於ては蔣政權の反滿抗日策のために人為的に強權的にこの方面の需要が抑止されて來たのであつて中南支に於ける、豆粕・豆油、北支に於ける豆粕の需要は依然勃々として潜在してゐるのである。それ故一度堰が切られるならば北中南の全支にこれら三品が滔々として流入するであらうことは考慮の外である。これらのことについても稿を改めて詳説する心算であるから茲には概觀的結論を記するに止める。

大豆三品合計輸出消長表

年次	日本	支那	歐洲	其他	合計
建國前五ヶ年平均	100	100	100	100	100
昭和 七― 八年	七三	五三	二三	六五	八三

昭和 八― 九年	八七	三三	一〇五	三二	八
昭和 九― 十年	八三	四二	七五	六四	七
昭和 十一― 十二年	八四	二八	七〇	二九	六
昭和 十二― 十三年	九三	八	八	三	七
以上六ヶ年平均	八三	三	八	四	五

3. 落花生

大豆と共に主要製油原料子實たる落花生は、歐米油脂界の花形たることは言ふまでもないが。これらのことは後述にゆづり、茲には單に滿洲產落花生の仕向地別の検討に止める。

由來本品の輸出は年により非常な増減あり、一概に論斷することは不可能であるが、こゝ三、四年來の實績について見ると、大體一千五、六百萬圓程度に達し、一昨年までは大豆三品に亞ぐ大輸出農産物であつた。就中本品が歐洲に於ける最大不足物資たる關係上大豆同様多くは歐米諸國に輸出せられて來たのである。

今その間の事情を計數に立脚して觀察すると一昨昭和十二年頃までは第三國向が全輸出高の九十%内外を占め最も少い年たる昭和十二年に於てさへ八十七%に達し、多い年たる昭和八年度の如きは九十五%を占めて居たのである。

然しながら昨昭和十三年に入つては今次事變の進展により、從來支那・露領アジア・ハワイ・キウラソー等から輸入して居たものが澁滞の餘儀なきに立到つたため、これら諸國期待の代替品として盟邦日本の需要を喚起し、逐年増大趨向を辿りつゝあつた本品の日本向輸出は、果然そのテンネを速め、終に六百二十七萬圓に達し、前年比三倍餘の躍増となり、未曾有の活況を示した。支那向亦皇軍占領地域内の需要喚起により、これ亦前年比十七萬圓、十二倍餘の激増を示したる一方戰時下物價の必然性とも見られる諸物資需給不圓滑による物價高に災され第三國向は以上の日支向と逆に激減し、僅に五百六十五萬圓に止まり、例年の二・五分之一に相當する數量を辛うじて輸出し得たに過ぎぬ。従つて第三國向は建國直後來の不振を呈するに至つた。

大豆の増勢を辿れると照合する時この邊にも、同じく競争油料子實とは云ひながら、それら各品の本然の性状による使途の相違は勿論、現下の貿易が如何に各仕向國との間に介在する政治的、經濟的關聯に支配されて居るかを知らる證左が潜在して居るのではあるまいか。

建國後に於ける落花生輸出高仕向地別表

(單位圓)

年次	日本		支那		小計		第三國計		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	三三、六七六	六	三〇、三三九	六	六三、〇〇五	二三	四、七〇、三六五	八八	五、〇三七、〇〇〇	一〇〇
昭和八年	五〇、八二九	四	一九、九九六	二	五〇、八二五	五	一三、五八、一八三	九五	一四、一〇、〇〇八	一〇〇

年次	日本	支那	小計	第三國計	合計
九年	六九、八五〇	一六、三八一	七六、一六一	八、一三〇、二九九	八、八三六、三五〇
十年	六九、五四九	一六、一〇三	七九、六五二	一四、四三〇、九九八	一五、一四〇、六四九
十一年	一、三三、四七三	三、四八三	一、三四、九五六	一四、八六四、八〇三	一六、一〇九、七五九
十二年	二、〇一、五八五	一五、〇〇一	二、一六、五八六	一四、三三八、九八〇	一六、五九、五六六
十三年	六、二七、〇〇〇	一八五、〇〇〇	六、四六、〇〇〇	五、六五三、〇〇〇	一三、一五、〇〇〇

4. 蘇子 (荏)

我國に於ける油料子實中輸出商品化されるのは、前記大豆・落花生・蓖麻子及本品あるに過ぎぬ。然しながら蓖麻子は周知の如く、潤滑油としての最高品たる蓖麻子油の原料であり、主として飛行機用に供されるのである。それ故現在は日本向輸出のみに限定されて居る關係上、これが輸出について云々することは不必要である。

そこで現在我國に於ける輸出製油原料として残るは蘇子のみである。蘇子は日本では荏胡麻と呼ばれ、子實は胡麻の代用として又製油原料として利用されてゐる。荏胡麻より搾出したる油は荏油、荏胡麻油又は蘇子油と呼ばれ、乾性油なるを以て、日本では雨傘・提燈・油紙・合羽等の塗料に供し、その残滓たる荏粕は肥料として使用されて居る。

次に輸出額を見ると、日本向が壓倒的であり、産額少量なるを以て、極めて浮動甚しく、少い年は三百萬圓内外から多い年は一千三百萬圓に上るのであるが、茲二年間は大體七百萬圓臺を維持して居り、殆んど全額が日本向であると云つても過言に非ざる状態である。

即ち例年全體の九十八、九%を占め、支那向の極少量を加へる時、第三國向はその二・三%に過ぎず、價額にしても、昭和十一年度の四十四萬圓が最高であり、例年は十萬圓乃至十六、七萬圓に過ぎず、殊に昨年度の如きは、僅々一千圓に止まりその全體に對する割合は零となり、建國以來の不振を啣つて居るのである。

蘇子輸出高仕向地別割合表

(單位圓)

年次	日本		支那		小計		第三國計		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	二、六五、八〇〇	100	二、一八六	—	二、六八、〇五六	100	—	二、六八、〇五六	100	
八年	二、九二、九八八	九八	一、三六	—	二、九八、〇五四	九八	六八、三五八	三、〇五二、三三三	100	
九年	三、九七、二四	九六	二、〇〇五	—	三、九七、二四	九六	一七、三三四	四、一五、六〇三	100	
十年	七、三五、一四九	九八	九、八六三	—	七、三六、〇二二	九八	一六八、〇七〇	七、五三、〇八二	100	
十一年	一三、一六、〇五五	九五	二〇、四三六	二	一三、三六、四九一	九七	四四、六五四	一三、八一一、四四五	100	
十二年	七、六五、三三九	九八	八七、八〇四	—	七、七三、一三三	九八	一〇二、二六八	七、八五、四〇一	100	
十三年	七、七三、〇〇〇	九八	九七、〇〇〇	—	七、二九、〇〇〇	100	一、〇〇〇	七、三〇、〇〇〇	100	

5. 高粱

高粱は我國に於ける一般人民の主食物の一であり、日本人に對する米穀に近い存在價值を有するものである。由來滿洲と高粱は密接不可離の關係にある。我々は滿洲と云へば大豆を想ひ、高粱畑を聯想する。それ程滿洲に於ける高粱の存在は大である。

従つて我國に於ける高粱の生産高は極めて多額に上り、特産の大宗と稱せられ、我國一國經濟の動向を左右すると稱せられてゐる大豆と、その王座角逐戰を演じつゝあるのである。

然しながら前に一言せる如く、高粱は滿人にとつては日本人の米に對すると同様の魅力を持つてゐるのである。魅力といふのが當を得ないと云ふならば、むしろ日本人が米に對して意識的嗜好を感じて居らないと同様な意味に於て、既に意識の世界から超越して居るのであり、空氣、水に對するそれにも似た絶對的不可離の關係にまで押し進められてゐるのである。

それ故大豆同様年産四百萬噸にも及ぶこの高粱の殆んど全部がこの國四千萬民衆のエネルギー化して居るのである。今最近五ヶ年間に於ける本品の生産高に對する輸出力及び國內消費推定表を作成して見ると、量近は大體四百萬噸内外の消費高を示し、生産高に對する割合は九十五%内外となつてゐるのである。従つて當然のことゝは云ひながらその輸出餘力は僅に5%内外に過ぎぬのである。

然らば昭和九年を境として、爾後各作物とも一齊に増勢を辿りつゝあるにも拘らず、依然輸出餘力の増大しな

いのは何故であるか。それは人口の増殖によるものである。即ち我國の人口自然増加率は極めて高度なるを以て、これら主要食用農産物たる高粱・包米・粟・小麥等の増産が年毎に増す人口増殖による需要増大量以上の巾を以て進捗せざる限り、輸出餘力の涵養は不可能である。この事はこれら代替性に富める前記穀類についても同様の事が云へる譯である。

高粱生産高對輸出高、國內消費高表

(單位 噸)

年次	生産高	輸出高	差引消費高	同上記率
昭和八年	四、〇二一、八九〇	一五三、九五三	三、八六七、九三八	九六
昭和九年	三、四九九、五六六	一九九、九二二	三、二九九、五八四	九四
昭和十年	四、一〇六、四八六	七二、一七六	四、〇三五、三一〇	九五
昭和十一年	四、三四〇、七三三	一八四、五五六	四、〇五六、一七七	九六
昭和十二年	四、〇九八、三〇八	二五、九〇三	三、八七二、三〇五	九四

では生産高の5%内外を占める對外供給餘力は、如何なる方面に進出し、如何に我國國際收支改善の闘士として貢献しつゝあるのであらうか。

建國後七ヶ年間に於ける輸出実績について見ると、日本向及支那向は相互にその地位を轉換し、さながら天枰



の上下する如き相關關係を保持し、相逆行する需要線を畫きつゝ常に兩者の合計比重は全比重を示して居るのである。

即ち計數に就いて云へば昭和十年に於ける全輸出額中に占める日本の割合四十六なるに對し支那のそれは四十七であり兩者にて既に全輸出額を示し、十一年に於てはこれと逆に日本四十八、支那五十二となり、十二年には日本六十三、支那三十二、更に十三年には日本三十六支那六十三と常に天秤的動きを辿つて來たのである。

そのため第三國向は殆んど皆無に等しく、最近兩三年間の計數について見ても、十一年には皆無、十二年四千圓、十三年二十二萬九千圓と全く論外的少量に過ぎない。

それ故第三國向輸出振興による外貨の調達といふ立脚點から俯瞰する時は全く九牛の一毛にも及ばず、大洋の一滴にも等しい存在である。

だが再言するまでもなく、現下の我國輸出貿易に課せられたる責務は唯外貨の調達のみには止まらず、實に東亞協同點の不足物資の潤澤、圓滑なる供給にあるのである。

我々はこの東亞民衆に課せられたる大使命たる「興亞の聖戰をして有終の美果を結實せしむる」と云ふ見地から見る時、本品初め包米、粟等の所謂雜穀類の使命は、孤獨よく國際競争場裡に奮戦し赫々たる武勳を收めつゝある大豆のそれにも似た尊いものであることを痛感するのである。

即ち銃後日本農村の使命達成の上に、將又戰火にひしがれた支那四億の無辜の民衆の補給糧食として、その責務は實に重大である。若し萬一これら當國穀類の供給餘力なかりせばそこには幾多の難問題が續出したであらうことを豫想する時、これら物言はぬ物資も亦東亞協同體結成の重大使命遂行上、幾多の貢獻をなしたのでありこの東亞六億民衆の熱望して止まざる體制編成途上の勇士として遇さるべきであらう。これをたとへて云ふならば、大豆は第一戰の將士であり、これらブロック内必要物資は銃後の民衆のそれに當るのである。戰線將士の勇戦もさることながら、これら將士の心の糧たる銃後民衆の掩まざる努力精進も亦見逃すことは出來ぬのである。

茲に今日の我國輸出貿易の根底にひそむ二大使命の一端が見出せるのである。我々はあくまで東亞協同體組成メンバーたるの自覺を以てせねばならぬ。こゝに從來採り來りたる貿易政策に對する再檢討再認識が必要とされねばならぬ根本因子が潜在するのである。いさゝか本稿所期の目的より脱線したる嫌あり、この問題に就いては他日を期すこととする。

高粱輸出高仕向地別割合表

(單位圓)

年次	日本		支那		小計		第三國計		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	九、三六五、六三七	三三	一七、八八、九四三	六三	二七、八四、五九六	六六	一、三七一、三九	四	二六、四〇一、九〇八	一〇〇
昭和八年	三、四〇三、〇三八	四七	三、八三三、二四一	五三	七、二五、二九	一〇〇	一一〇	一	七、三二五、三六九	一〇〇

年次	日本	支那	小計	第三國	合計
昭和九年	三、四八、〇〇九	三、八三、六六五	七、三一六、七四四	一、三三、九七一	七、三三〇、六四四
昭和十年	二、〇九五、六六九	一、八八六、九〇六	三、九八二、五七五	一〇、五六〇	三、九九三、一三五
昭和十一年	五、六〇七、八七六	六、二一八、五八九	一一、七二六、四六五	—	一一、七二六、四六五
昭和十二年	六、七四一、九〇三	三、〇九六、八一五	九、八三八、七七八	四、四〇三	九、八四三、三二一
昭和十三年	六、七九〇、〇〇〇	一一、八二五、〇〇〇	一八、六一五、〇〇〇	三、三九、〇〇〇	一八、八四四、〇〇〇
	三六	六八	六三	九	一〇〇

6. 包 米 (玉蜀黍)

包米も前記高粱同様否對日關係に於いては高粱以上の重大使命を有してゐるのである。それは勿論日本銃後農村の二大重要問題の一つたる飼料問題解決の鍵として又支那食料問題緩和の一助としての重要性である。詳説は他日にゆづり、結論のみを概略すれば、本品の潤澤なる供給は絶對的に必要であるのである。

それ故これ亦高粱同様圓ブロック内の輸出に限定されて居るのである。

建國後より一昨昭和十二年に至る間は本品の需要趨勢も亦高粱と同様天秤的傾向を辿つて來たのであるが、三年以來、日本の爲替管理の強化により、從來主として補給を仰いで來たアルゼンチン及蘭領印度品の輸入窮屈によつて、必然に日本向輸出に優先的地位が與へられたため、日本向は未曾有の激増を示し、終に一千三百餘萬圓と、躍増せる前年に比してさへ約三倍の多きに達し全體に對する割合も七十三%と、これ亦未曾有の高次に到

達した。支那向は貿易統制法の發動により多小阻害されたと云へ、これ亦切迫せる實需の上に立つて前年比五十萬圓の増加を示したが、全體に對する比重は、日本向の桁外れの著増により二十六%にと激落の跡を示して居る。が常に日支合計數量は略全輸出量に近いのである。

これを要するに包米も高粱同様圓ブロック内不可缺の物資であり、就中戦時下日本農村にとつてはより緊要である。

それ故本品も亦第三國向輸出振興といふ見地から見れば一顧の要もないと言ひ得るのである。

包米輸出高仕向地別割合表

(單位圓)

年次	日本		支那		小計		第三國		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	二、四四、一九〇	四八	二、六九六、六七五	五三	五、一四〇、八六五	一〇〇	一、一四五	—	五、一四三、〇一〇	一〇〇
昭和八年	一、八九九、三四四	五七	一、四〇八、九二六	四三	三、三〇八、二六〇	九九	二、一三〇	—	三、三二九、四九〇	一〇〇
昭和九年	二、九〇三、六六三	五八	一、九四九、九八二	三九	四、八五三、六四五	九七	一、六三、三九六	—	五、〇一六、〇六一	一〇〇
昭和十年	五、一三、八二八	三五	九、〇七、四〇四	六三	一、四三、二二三	九七	四八、九八六	—	一、四七〇、二一八	一〇〇
昭和十一年	一、一三三、七三三	一六	五、六九三、一〇八	八二	六、八二五、八四一	九七	一、七九、六三九	—	六、九九五、四八〇	一〇〇

昭和十二年	四、三六、八三八	五三	四、三三、三四	四八	八、五九、五三	100	六、七、七	1	八、五五、八五	100
昭和十三年	三、〇三、〇〇〇	七三	四、六三、〇〇〇	二六	一七、六六、〇〇〇	九九	一四、〇〇〇	一	一七、七〇、〇〇〇	100

7. 粟

粟は大豆、高粱につぐ當國三大農産物の一にして、最近の年産額は三百餘萬石を突破するの盛況を示してゐる。

本品も亦前記高粱、包米につぐ生産農民の主食物の一ではあるが、由來滿人は粟が他品に比し高價なる爲、出來得る限り高粱、包米を食しこれを賣却する風習あり、主として朝鮮に於ける需要に應へてゐるのである。鮮農にとつて粟は日本人の米に匹敵するものである。

それ故主要穀物中生産に對する國內消費率は最も低く、僅に六十一%を占めるに過ぎず、殘餘の三十九%は國外に輸出されるのである。

この生産高對消費高の比率を昭和十二年度の實績について見れば次の如くである。

主要穀物生産高對國內消費高割合表

(單位 石)

品 種	生 産 高		輸 出 高		國 内 消 費 高	
	數	割 合	數	割 合	數	割 合
高 粱	四、三四、九四	100	三、八七、三〇五	六	三、八七、三〇五	九四
粟	三、三六、三三	100	二、六、五五	三元	三、〇九、七六	六一
包 米	二、二九、六三	100	一一、〇三	六	二、〇六、五七	九四
蕎 麥	一〇七、九三	100	二九、五七	二七	七六、四五	七三

では建國後六ヶ年間に於ける實績についてその輸出高の仕向地別構成を見よう。

即ち全輸出額一千四、五百萬圓乃至二千萬圓内外の中その九十數%は日本向、就中朝鮮向であり、その殘額たる三四%が北支方面に於て需要されて來たのである。

然しながら今次支那事變は糧穀、高粱、包米に對すると同様な影響を與へた。就中北支農民の食料問題解決の有効物資として、異常な需要を喚起し、昨年度の輸出額は六百餘萬圓に達し建國以來の最高輸出記録たる前年の百三十四萬圓に對しても實に五倍近くの躍進であり、東亞協同體構成途上にある今次聖戰後の三物資として、持てる國滿洲を表徴し、東亞協同體構成メンバーとして當滿洲國がいかに樞要な地位を占めてゐるか、いかに貢獻しつゝあるかの一證左を示してゐるものとも解される。

粟輸出高仕向地別割合表

年次	日本		支那		小計		第三國計		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	一四、六六九、一九五	九七	三、四〇、九三	二	一四、九八三、二八七	九九	一、六九八、一	一	一五、一〇〇、三六八	一〇〇
昭和八年	一四、一五二、五七一	九六	四、九六、〇八〇	三	一四、六五〇、六五一	九九	九、五〇、四八	一	一四、七四五、〇六九	一〇〇
昭和九年	一八、六〇六、六九五	九三	一、〇六三、二二	五	一七、五四三、四八三	九九	二、三九六、六二	二	一九、九四〇、一〇四	一〇〇
昭和十年	八、四三九、三九九	九三	二、八、七五四	三	八、七二、一五三	九六	三、八、五六八	四	九、〇四九、七二	一〇〇
昭和十一年	一七、五四七、六八九	九六	六、四四、三五	三	一八、八二、〇四	九九	一、三、四六四	一	一八、三、八、四六	一〇〇
昭和十二年	一三、七六六、六九〇	九〇	一、三四八、三九四	一〇	一四、一三五、〇八四	一〇〇	六、二、九〇七	一	一四、一、九六、九九二	一〇〇
昭和十三年	一三、八六三、〇〇〇	六九	六、〇三、一〇〇	三〇	一九、八九三、〇〇〇	九九	六、九、〇〇〇	一	一九、九、六三、〇〇〇	一〇〇

8. 蕎 麥

蕎麥は前記高粱、包米及粟と異り、第三國向輸出が絶對的優位を占めて居るのである。

即ち全輸出額は年により極めて浮動があり一概には論斷出來ぬが大體第三國向は二百萬圓乃至それ以上に達し、全輸出高に對する割合は少い時にも四十二%、多い年は九十五%に達して居り、建國後六ヶ年平均について見ると七十八%を占めてゐる。第三國向については日本向の七、八十萬圓三、四十%であるが、これは近年に至つ

て激増したものであり、建國後六ヶ年平均に於ては六十五萬圓、全體の二十二%を占めるに過ぎぬ。

蕎麥に關する限りは從來支那向は振はず、日本及第三國に於て殆んど全額を需要してゐたものである。これは支那人及滿人が從來の迷信的觀念より本品を餘り嗜好せぬための現象である。

この事は當國內に於ける前記生産高對國內消費高表を一瞥しても窺知し得るのである。この點からみても、又本品の營養的組成から見ても將又本品の長期保存にたへ得ざる缺點が漸次科學の力により取除かれつゝある現状より見ても、その宣傳如何によつては必ず歐洲諸國に於ける本品に對する關心は現在以上に熾烈となり、その需要を増大することは想像に難くないのである。これらの點に關しての検討は別項にゆづり本項にては以上に止める。

蕎麥輸出高仕向地別割合表

年次	日本		支那		小計		第三國計		合計	
	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合	價額	割合
昭和七年	四〇七、六〇	一四	五、四七七	一	四一三、〇七七	一四	二、四五五、一六九	六六	二、八六八、二六六	一〇〇
昭和八年	一六一、三五六	一四	四、一三三	一	一六五、四九一	一四	三、〇五七、二二	六六	三、二二二、六一	一〇〇
昭和九年	三三九、三九四	一四	四、八〇六	一	三四四、二〇〇	一四	三、九六六、九八	六六	四、三一二、一八	一〇〇
昭和十年	七八三、四八	一四	四、九三	一	七八八、四一	一四	一、七〇六、七二	六六	二、四九四、一三三	一〇〇
昭和十一年	一、三六七、六九	一四	一、三、九四〇	一	二、七六、六三	一四	一、九一七、二二	六六	二、六三四、四三三	一〇〇
昭和十二年	八七三、四三	一四	一、九七〇	一	八七五、四〇	一四	一、六五五、五七	六六	二、五三〇、九七	一〇〇
昭和十三年	六五五、三八	一四	一、四二二	一	六五六、八〇	一四	一、二九五、五四	六六	一九六、二、八三	一〇〇
以上六ヶ年平均										

(單位圓)

(康徳六年二月 飯野清雄)

(單位圓)

## 一、滿洲大豆輸出の動向と歐洲市場

### 内 容

- 一、建國前後に於ける大豆の輸出状態
- 二、世界に於ける大豆生産と滿洲大豆
  - 1. 概 説
  - 2. 米國に於ける大豆生産状態
  - 3. ルーマニアに於ける大豆栽培の特殊性
- 三、滿洲大豆輸出上に占める歐洲の地位
- 四、世界に於ける主要油料子實の生産高
  - 1. 品種別生産高及特性
    - (イ) 落花生
    - (ロ) 亞麻仁
    - (ハ) 椰子實(コブラ)
    - (ニ) 棕櫚核(パームカネル)
    - (ホ) 棉 實
    - (ヘ) 菜 種
    - (ト) 胡 麻
  - 2. 各種油料子實の政治、經濟的地位の管見
- 五、歐洲主要七ヶ國に於ける油料子實の需要概観
- 六、歐洲主要七ヶ國に於ける各種油料子實の需要高
  - 1. 概 説
  - 2. 需要國別に見た各種油料子實の消長
    - (イ) 獨 逸
    - (ロ) 英 國
    - (ハ) 丁 抹
    - (ニ) 佛蘭西
    - (ホ) 和 蘭
    - (ヘ) 瑞 典
    - (ト) 伊 太 利
  - 3. 各種油料子實國別依存度
    - (イ) 落花生
    - (ロ) 亞麻仁
    - (ハ) 棕櫚核
    - (ニ) 椰子實
    - (ホ) 棉 實
    - (ヘ) 菜 種
    - (ト) 胡 麻
- 七、歐洲に於ける大豆需要の趨向

前掲「滿洲貿易と輸出農産物の特殊性」に於て現下に於ける輸出振興の必要、輸出入品目の構成及び大豆の重要性等に就いて略述したが、輸出振興は懸つてその支配的地位にある大豆輸出の振興にあり、大豆輸出の動向を知ることが取りも直さず我國輸出貿易の動向を物語るのであることが明かとなつた。

然しながら吾人は本小論に於ては直接的輸出促進政策を討議せんとするものではない。勿論その對策の検討こそ刻下の急務ではあらうがそれは他の機會にゆづり、成るべく政治的色彩濃厚なる分野を避け専ら過去現在の實績の上に立つて滿洲大豆輸出の動向を究明しようと思ふのである。

先づ第一に問題となるのは最近に於ける輸出状態であるが我々は常に現状をよりよく認識せんがためには先づ過去の實績を検討せねばならぬ。國家の研究に歴史の必要なる如く、各商品にもそれぞれ歴史的研究價值がある。現在を過去よりの連鎖であり又將來への一ポイントである。従つて過去現在の充分なる認識を以てせば或程度の將來への見透しはつく譯である。一見徒勞に見える過去の検討はその將來性に對する素晴らしい示唆を與へる場合が多いからである。この意味に於て最近までの大豆輸出の經過を略述し更に現状を直視して見よう。

### 一、建國前後に於ける大豆の輸出状態

滿洲大豆の輸出は建國を契機として一大轉換を來した。建國後に於ける輸出の減退を説明するためには先づ建國前に於ける激増事情に就いて検討するのが順序であり最も捷徑でもある。當時は現在の如くブツツク經濟、排他的國民主義經濟政策も未だ温床の域を脱せず交易は比較的自由な状態の下におかれて居た。従つて滿洲大豆の如き世界的需要を背後に持つ商品は累年増産をつゞけ加速度的輸出増進を續けた。それ故生産の増加は直ちに輸出の増大として認識され得るのである。

今この間の事情を一層明瞭ならしむるために當時に於ける本品の出廻高を一瞥すると次の如く、年により些少の豊凶の差はあるが大體年々増加傾向を辿り、滿洲事變直前頃には、終に生産高は五百數十萬噸を算するに至り、昭和五年の出廻高は四百五十餘萬噸と、現在の全生産高を遙に上廻る額に達し、滿洲大豆の黄金時代を現出したのである。就中北滿大豆の増産は目覺しく、滿洲大豆の黄金時代は新に開拓された北滿大豆によつて現出されたと云つても過言ではない位である。即ち計數について見ると南滿大豆の出廻は大正八年の百六十六萬餘噸から事變直前たる昭和五年十月より翌六年九月に至る、所謂特産昭和五―六年度には二百一萬餘噸を算するに至り、その間十一年間に僅々二割内外の増加を示したるに對し、北滿大豆は、大正八―九年には僅に二十三萬餘噸に過ぎなかつたものが、同じく昭和五―六年までの同一期間内に、二百四十九萬噸を數へるに至り、實に十一年間に十一倍といふ驚異的增加を示したのである。

大豆出廻高南北滿比較表

(單位噸)

年次	南滿		北滿		合計	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合
大正元―二年	一、〇一九、五九九	七四	三五二、八三	二六	一、三七一、三九九	一〇〇
大正二―三年	九八三、二七	七五	三三〇、九六八	二五	一、三三三、八八	一〇〇

大正三―四年	一、四三六、三六	七五	四七三、五六一	二五	一、八九八、六六一	一〇〇
大正四―五年	一、〇四四、〇〇	七二	四七三、六九一	二九	一、四七一、七九一	一〇〇
大正五―六年	一、三二一、四五三	七七	三六八、四九九	二五	一、六九九、九五三	一〇〇
大正六―七年	一、三三〇、七三九	七八	三七〇、三三三	二三	一、七〇〇、九七二	一〇〇
大正七―八年	一、六九三、八〇三	八三	三六一、二七七	一八	二、〇七五、〇八〇	一〇〇
大正八―九年	一、六九、九七四	八八	三三三、三三九	二二	一、九〇三、三〇三	一〇〇
大正九―十年	一、七三、三八七	七六	五六六、九八八	二四	二、三三九、三二五	一〇〇
大正十―十一年	一、七〇〇、二六六	六六	八七四、四一	三三	二、五七四、六七	一〇〇
大正十一―十二年	一、九二四、七二八	六〇	一、二九八、九九九	四〇	三、二二三、七二七	一〇〇
大正十二―十三年	一、六四九、七八五	五八	一、一九五、六九五	四三	二、八四五、四八〇	一〇〇
大正十三―十四年	一、三六九、四三七	四四	一、七三〇、四〇三	五七	三、〇九九、八三九	一〇〇
大正十四―十五年	一、七〇一、八五一	四七	一、九九、五七六	五五	三、六三一、四三三	一〇〇
昭和元―二年	一、五四七、九一七	三九	二、四五三、六〇〇	六一	四、〇〇一、五一七	一〇〇
昭和二―三年	一、八九九、三六三	四八	二、〇四四、三四	五三	三、九四三、五九六	一〇〇
昭和三―四年	一、八六九、四〇七	四四	二、三四四、一六八	五六	四、二二三、五七五	一〇〇
昭和四―五年	一、五五五、七〇七	四〇	二、三四二、一六八	六〇	三、八九七、九七五	一〇〇
昭和五―六年	二、〇二二、九九一	四五	二、四九三、九一六	五五	四、五〇五、四〇七	一〇〇

昭和六十七年	二、一八、〇三八	三	二、〇四、九一九	四八	四、三三、九五七	100
昭和七十八年	二、〇七、七八	六三	一、二九、七五三	三八	三、〇二、四八〇	100
昭和八十九年	一、六六、八二七	五〇	一、六九、〇〇七	五〇	三、三三、八三四	100
昭和九十年	一、四九、二四〇	四八	一、五三、〇四三	五三	二、九五、二八三	100

然らば何故に北滿のみが、かくの如き躍増を來したか。

それは次に列記する如き環境の變化によつて、北滿農民の採算が急激に有利に展開されたからである。

茲に北滿大豆に對する滿鐵及舊北鐵間の大豆集貨競争及所謂官商の大豆買占といふ二つの著明なる事實が提起されねばならないのである。

由來歐洲大戰直後たる大正七、八年頃迄は滿洲に於ける日露の勢力は相均衡して居た。新京以南の所謂南滿地方は、滿鐵線が縦貫せる關係上、日本の權益強く、新京以北の所謂北滿地方は、北鐵を根據とする露國の勢力下にあつた。元來、これら二大國策鐵道は、勿論夫々日本及露國の、在滿權益の擁護乃至開發機關たるは言を俟たぬ所であるが、同時に又鐵道會社たる以上、それに相當する貨物の輸送を必要とすることも明である。然しながら周知の如く、當時滿洲に於ける主要輸送貨物としては、僅に農産物、就中大豆があつたに過ぎぬ。従つてこの兩者間に大豆集貨競争の惹起されたのは當然である。而してこの兩者の勢力圏を見ると、前記せる大勢から見て

明かなる如く通常南滿は滿鐵、北滿は北鐵に屬し、それぞれ大連港乃至は浦鹽港に搬出され、その間兩勢力の分野は判然として居たものである。然しながらそれは無風時代の事であり、この兩者の權益に多大の變革を與へる一大要因が惹起された。それは云ふ迄もなく、歐洲大戰後に勃發した露國の大革命である。露國はこの革命によつて政情混沌とし、勢ひその餘波をうけて北滿の輸送経路も一時中斷されるに至り、浦鹽向貨物たる哈爾濱を中心とする北滿地方の物資は滿鐵を利用せざるの餘儀なきに至り、茲に全滿の輸出物資は總て大連港に南下するに至つたのである。

然るにその後露國の革命も終熄し、所謂U・S・S・R政權となるに及び、同政權は北滿に於ける自己勢力圏の恢復を企圖し、北滿物資を革命前同様、浦鹽を経由せしめんことに専念した。茲に滿鐵對北滿の角逐が再び表面化した。即ち一度自己の勢力圏内に歸した北滿物資の輸送權を滿鐵がそのまま放棄する筈はなく、斷乎として集貨輸送競争を開始したのである。兩者の競争は夫々一國を代表し、一國の權益擁護機關の故を以て、その成敗は總てその國權益の盛衰を代辯するものである。従つて兩者の角逐も激甚を極め、單なる表面的の運賃引下のみを以つてしてはその成果を期待し得ざる事態を惹起するに至り、兩者共各種の秘密政策を實施するの餘儀なきに至つた。

今その主要なるものを摘出して見れば、北鐵は一方歐洲油坊業者と密約し、北滿大豆を浦鹽經由輸出する者に限り、極端なる運賃割引を爲すと共に、哈爾濱の油坊業者に對し原料運賃割戻制、豆粕運賃割引制なるものを設

けたる外、自ら取引機關を經營し大豆を直接買付け、之が浦鹽經由輸出の方法をも採用した。これがため北滿の歐洲向大豆及北滿油坊の日本向豆粕の大多數は再び浦鹽を經由することとなつた。

これに對し一方浦鹽は三井、三菱を首めとする歐洲向特産輸出業者に對し、北滿産大豆の秘密運賃割引制度を採用すると共に、他方「成發東」なる取引機關を設け北鐵同様大豆の買付、賣却を行ふ外、四平街より洮南、齊々哈爾を經由して、哈爾濱の背後地にして且北滿の穀倉地帯たる克山、泰安鎮地方に四洮、洮昂、齊克鐵道の敷設に努めたる外、官商たる發券銀行の取引機關との間に秘密割引運賃の特約をなす等、凡ゆる手段を講じて之れ亦集貨に努めたのである。

従つて歐洲及北滿油坊業者の採算は、北滿大豆を原料とする限り、南滿乃至日本等の油坊業者よりも割引運賃額丈け有利となれるため、彼等の原料買付は北滿大豆にのみ集中される結果となり、勢ひ北滿の生産農民も南滿農民に比し有利となり、惹いて北滿大豆に對する所謂官商の買占を誘致し、之が爲農民の金融も亦甚しく圓滑化し、彼此相俟つて前記の如き増産を齎らすに至つたのであると云はれてゐる。従つて事變後に於ける生産の減退の原因もその後相ついで見舞はれた大洪水、匪害のみに歸することは當を得ず、事變後に於ける北滿特産の浦鹽向輸送停止の爲、従來の如き滿鐵、北鐵間の集貨競争解消され、北滿大豆の特典たる割引運賃契約喪失し、且發券銀行の北滿大豆買占も亦頓挫するに至りたるため、北滿特産に對する金融圓滑を缺き、價格の上にも値下りを見るに至つたことも亦有力なる要因である。

然しながらこの内部的諸要因の外に外部的重大障礙の發生したことも見逃してはならぬ。それは後述するが如き歐洲に於ける當國大豆の主要需要國たる獨逸の輸入制限である。かく内外の惡材料の挾撃に、逐年生産は減退し滿洲特産界は極度の不振時たる昭和十年を迎へ、その前途に對しては多大の不安が藏せられ、茲に於て滿洲農業の多角經營化が叫ばれるに至つたのである。そこで問題となるのは滿洲大豆の需要量である。この問題を解決する前提として先づ滿洲大豆が全世界大豆産額中に占むる地位を検討する必要がある。

## 二、世界に於ける大豆生産と滿洲大豆

### 1. 概 況

大豆の原産地は交趾支那、日本の南部及瓜哇方面と稱せられ、日本・朝鮮・滿洲及支那等に於ては氣候土質が本品栽培に好適せるため、太古より之を栽培してゐたと稱せられて居る。然してその起源は遠く二千年以前に及ぶと云はれてゐる點を見ても、本品が如何に古くより栽培されてゐたかを窺ふことが出来るであらう。それ故現今に於ても世界に於ける大豆の生産は殆んど亞細亞、就中滿洲・支那・日本・朝鮮等の東亞地方に局限せられてゐるかの感が深い。

然らば斯る東洋、殊に極東地方獨特の産物たる大豆が、何故遠く歐米地方に需要の中心を移すに至つたか。元來歐米人は肉食、パン食人種である。従つてそれに要する獸脂獸肉の需要は莫大な數字に上る。然しながら



その中最も彼等日常の食用に供する必須食品の一たるバター類の不足が齎らされた。従つて何等かの油脂によつてその代替品を見出さねばならぬ運命に立至つた。そこで人造脂肪たるマルガリンの製造が發明されるに至り、植物性油首めその他一般油脂類から自由に人造バターの製造が可能とせられるに至り、廣く世界各國の油脂原料が漁られるに至つた。かゝる歐米の油脂需要に應じ大豆が歐洲及その他の諸國に知られる様になつたのは極めて最近のことである。即ち英國にては一七九〇年に大豆の初輸入を見、米國にては一八〇四年初めて大豆に着目し、一八一九年に試植實驗を行ひ、一般に奨励したが未だ觀賞の域を脱しなかつた。

大豆が世界的商品性を裏書されたのは、一八七三年に於ける埃國首都維也納に開催された萬國博覽會に、日本及支那より出品され、同國の科學者ハーベルランド氏の調査研究が發表されてからのことである。而も一般商品として、東洋大豆、殊に滿洲大豆の特質が認識されたのは、一九〇八年に三井物産會社によつて滿洲大豆が商品見本として百噸英國に搬出されて後の事である。

爾來逐年滿洲大豆はその品質の良好なると價格の低廉さを以て、よく歐洲市場に於ける幾多の競争品と角逐しつゝ、今日の名聲を克ち得たものであり、今日に於ては醬油大豆 (Soy Bean) の聲價は歐米油脂原料中の白眉である。

斯く大豆の品質の良好なる點と價格の低廉とは終に全世界に於ける油料子實界を風靡した。それ故各國、就中歐米諸國に於ては、本品が日常必需食品の原料なるを以て、自給の必要を痛感し且その栽培が極めて寛容度廣く容易なるを以て、本國並に各自植民地に栽培を試みるに至り、現今にては弗々その成果が見られる様になりつゝあるのみならず、今後は尙一層各國ともその栽培面積を擴張しつゝある現状より見て、聽てこれら諸國の大豆増産は、我國唯一無二の輸出品の前途に暗影を投げはしないであらうか。この點も本品の輸出の動向を述べるに當つて一瞥する必要がある。

右の如く大豆の栽培は東洋に起源し漸次全世界に栽培せられるに至つたが、就中現在我々の最も關心を拂はねばならぬのはアメリカ合衆國に於けるそれである。合衆國にては最近少量乍らも歐洲向に輸出するに至つてゐるからである。尙この外新興生産國としてバルカン諸國が擧げられるが、未だに試作の域を脱せず、最近の報導によればルーマニア、ブルガリア等の生産高は三萬噸に及び、今後は十萬噸を目標に増産計畫が遂行されるに至つたとの事である。現在に於ける世界大豆生産額を知るために最近十ヶ年間に於ける計數について見ると次表の如く、滿洲大豆は五百二十萬噸乃至三百四十萬噸を占め全世界生産額の四十三%乃至三十二%を占めてゐるに對し、支那大豆は六百五十五萬噸乃至五百萬噸の間を浮動し、全世界生産額の五十四%乃至四十七%と殆んど全産額の半數に達してゐるのであるが、後述の如く、支那、ロシアの諸統計の不確實極まることは一般世界人の認める所であり、この數字に對しどの程度の信用をおいてよいか多大の疑問が存してゐる。それ故次表を作成した統計書に於ても支那産額は合計數量に加算されず、唯列記してゐる程度に過ぎぬが、日滿支經濟一體の見地から敢て摘出その地位の検討を行つたものである。

通説たる満洲の大豆産額は、全世界産額の六、七割に及ぶと稱されてゐるのはこの支那産額を除外しての結果である。

以上満洲、支那兩國に次ぐ大豆生産國は米國及び日本であり、それについてはジャバ、スマトラ等の南洋諸島である。日本は朝鮮を合せ約八、九十萬噸を産出し、世界産額の七、八%に達してゐるが、未だ自給自足の域に到達し得べく餘りに道遠しの感あることは、大豆及其の製品たる豆粕輸入高が百五、六十萬噸に及んでゐることも明である。

従つて吾人が検討する必要のあるのは米國に於ける百萬噸の産額であり、獨逸と政治的、經濟的に特殊關係あり、殊に最近目覺しい増産をつゞけつゝあるルーマニア、ブルゼリア等バルカン諸國のそれである。

世界主要大豆生産國に於ける累年生産高表

(單位千噸)

(インターナショナル、イアフツク、オヴ、アグリカルチュアル、スタチスチツク一九三七―六による)

國 別	昭和二年 同六年平均		昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合
ルーマニア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ブルガリア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

總 計	昭和二年 同六年平均		昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合	生産高	割合
米 國	二九六	—	四〇八	—	三五八	—	六二九	—	一、〇〇八	—	八二六	—	一、二二六	—
其 他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
歐 米	二九六	—	四〇八	—	三五八	—	六二九	—	一、〇〇八	—	八二六	—	一、二二六	—
滿 洲	五、三三七	四三	四、二六八	三五	四、六〇一	三五	三、三九八	三三	三、八六三	三四	四、二四七	三五	四、三三三	—
日 本	三三七	三	三二六	三	三六六	三	二八三	三	二九五	三	三四四	三	—	—
朝 鮮	五四三	四	五六四	五	五八八	四	四九三	五	五六四	五	四八七	四	—	—
支 那	二一八	一	一四九	一	一八三	一	一七五	一	二〇三	二	二四七	二	—	—
支 那	二、七六	四七	六、五〇〇	五三	七、二七一	五四	五、六四五	五三	五、〇二九	四五	五、九二一	四九	—	—
其 他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
亞 細 亞	三、〇〇	—	一、九	〇	三三	〇	三三	〇	二二	〇	一八	〇	—	—
總 計	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇	三、三三七	一〇〇

2. 米國に於ける大豆生産状態

米國に於て大豆が栽培せられる様になつたのは、極めて最近の事に屬し、且東洋諸國に於けるが如く、食用又は搾油原料を目的として栽培して來たのではなく、「クローバー」「ヴェツチ」「カウピー」等の代用品として、青刈にし、飼料乃至は綠肥用作物として重要視されて來たものである。このことは日本内地に於ても見られ、そ

の一例としては水田の基肥として栽培せられてゐる地方がある。即ち米國にては大豆粒の收穫を目的とせず、青刈大豆の收穫を目的とするものにして、謂はゞ飼料作物の一に過ぎなかつたのである。

米國は元來植民地的單一粗放農業國である。然し最近かゝる粗放農業から脱し、集約的、多角的經營に轉換せんとする意圖が漸次濃厚となり、輪作として大豆の栽培が利用されるに至つたことと、一方自動車の普及に伴ふ養馬の減少により、從來馬匹の飼料として栽培せられて來た、同國重要農産物の一たる、燕麥の需要減退により、これが代替品として歐洲方面に根強い需要力を有する大豆を栽培せんとする氣運が熟したること、共にかの自動車王フォード氏の大豆利用價値に注目せる卓論によるものである。

即ちフォード氏永年の持論たる「自國農民の經濟的復興は、農民をして世界的生産過剩なる、小麥及び棉花の栽培を減少し、土壤に窒素分を増加し地味を肥沃ならしめ、食料及飼料として充分なる營養價値を持ち、商品又は工業原料として有用なる大豆栽培の積極的獎勵に待つの外なく、仍て大豆栽培の目的をして子實採取を主たらしむることが、此際國策的見地より必要なり」との提案が政府當局を動かした結果、同氏は復興資金を借受け、栽培及び加工の獎勵に専念したのである。

尙同氏の大豆試験のために消費した金額は一九三二、三の兩年にて百二十二萬弗と稱され、單に自己の研究に止めず、州立イリノイ大學の學者にも研究費を支給し、大豆・豆粕・豆油及び飼料その他工業的利用法の研究を依頼して居る程である。

之等の中最早試験期を過ぎ、之を市販品として、國內需要の開拓竝に自動車部分品の製造に供しつゝあるものと及び其の他一、二を例示すれば

イ、食料としては

豆 乳(大豆10水分90%)大豆チーズ

サラダ油 大豆の鹽炒り(ビールのつまみもの)

煮 豆 大豆バター(炒豆の粉末、油の混合物にて褐色を呈し、歐洲の人造バターと異なる)

ワッフル(一種の菓子にて大豆粉50%)

ビスケット(大豆粉25%)

煎 餅(大豆粉50%)

ロ、工業的加工品としての新用途は粕の不完全燃焼による黒色粉原料を高壓の下に壓搾し、鑄造所の砂型、電氣スイツチ、コイルケース、シヤフトの引手、自動車の部分品に又フォード自動車の外装塗料エナメルに使用する塗油には豆油を充當しつゝあること。

ハ、フォードは別途家畜、家禽の飼料用として大豆粕及び魚粉の混合物を作成し、市販に供せんと企圖しつゝある。

ニ、其他シヤトルにては大豆粕の蛋白質より膠グリユウを製造し、ベニヤ板の接合用に相當の需要を有するこ

と、及び東部に於ては大豆粕を製紙工業のペーパーサイジングに供しつゝある。斯くの如く大豆の利用價值は無制限に近く、その將來性は科學の進歩と共にありの觀強くマデックピーンと呼稱されるのも故なしとしない。それ故北米合衆國に於ては最近家畜飼料用青刈大豆としての栽培より、子種採取本位となり、その栽培面積の擴張と加工に盡力しつゝあるのである。

従つて米國農業組織中に於ける大豆の地位は、大戰後年一年とその重要性を増し、特に最近兩三年來の飛躍的發展は目覺しく、今やコーンベルト諸州に於ては最重要農産物の一として農業組織中に堅固なる地位を礎いて終つたのである。

### 3. ルーマニアに於ける大豆栽培の特殊性

ルーマニアに於ては既に一九〇八年頃トランス・シルバニア地方に於て大豆の試植を行つたが、概して成績不良なりしたため、その後中斷の形となつて居たが、近年内外の經濟情勢の推移は、再びこの國を大豆栽培に追ひやるに至つた。試みに最近四ヶ年間の大豆栽培面積及收穫高を見ると、次の如く、一九三四年の六十廳から三十七年には七萬廳に激増し僅々四年間に一千百餘倍の激増を示して居り、その前途如何はこれ亦アメリカ同様我國の惱みの種であり、殊にこの國が我國大豆の主要需要國たる獨乙とは特殊的關係にあり、就中その大豆が獨逸の指示によつて生産されてゐるのであつて見れば尙更である。

年次	面積	收穫高
一九三四年	一、四六五	六〇廳
一九三五年	二〇、五一一	二、五九九廳
一九三六年	四八、三五三	三、二七七廳
一九三七年	一一〇、〇〇〇	七、〇〇〇廳

斯る點より見てこの國の大豆作は米國大豆と共に必ずや將來、我國大豆輸出の壓迫材料となるべく豫想されるが故に、以下同國大豆栽培の現状を一瞥しやう。こゝで吾人にとつて最も興味あるのは如何なる内外の情勢の變移がかくもこの國の大豆増産を誘致したかと云ふ點である。先づその主因と目されるものについて見ると、由來この國は曲型的農業國家として、自他共に許してゐる程に、凡ゆる農業的自然的條件に恵まれてゐるにも拘らず、何故大豆作に轉換せねばならなくなつたのか。それは從來一貫せる農業保護機關なきため、農民をして土地改良に對する關心を失はしめ、勢ひ掠奪農法に奔らしめ、以てドナウ沿岸諸國中、陋當收穫高に於て最低位に轉落するの余儀なきに立至つたのである。この間の事情は同國農務大臣の演說中に引用されてゐる左記の數字が雄辯に物語つてゐる。

歐洲主要國農産物陋當收穫高比較表

國名	品名	陋當名
丁 抹	小麦	(二・八六廳)
	大麦	(三・七六廳)

獨逸	小	二・七
チエツコ	大	一・七
ブルガリヤ	大	一・六
ポーランド	大	一・二
ユーゴスラビヤ	大	一・一
ルーマニア	大	〇・九
	小	〇・五

右の如き單位當收穫高の低下に加ふるに、一般農産物の質的低下も見逃すことは出来ない。元來同國の租稅負擔の重壓は農民にとつて堪へ難い程度のものである。従つて農民はこれに嫌氣し、耕作方法の改善及品質改良に對する熱意を喪失するに至つた爲である。例へばオーストリア農民が陌當二〇・五疋の人造肥料を使用し、貧農の多いのを以つて名あるハンガリヤでさへも、尙且五疋を施與するに反し、この國ルーマニアに於ては、租稅の重壓に喘ぐが故に、僅かに〇・四疋を施肥してゐるに過ぎぬ現狀である。斯る租稅重壓下の農民の貧困は、總前記の如き農産物を質的にも、亦量的にも他國のそれに比し極めて低位に位置せしめてゐるのである。

一方品質劣悪なる商品が、今日の如き競争激甚なる世界市場裡に於てよく、他の競争品と輸贏を決し、優者として勝殘ることが不可能であるばかりでなく漸次驅逐され、その影を没しつゝあるは自然の勢である。同國は由來世界的農業國にして、その生産する農産物は、常に國內需要を充し、その餘剩部分は歐洲各國の不足糧食を充

足して來てゐたのである。然しながら前記の如くこの國の農産物は量的低下と共に、質的低下を來した。勢ひ今日の輸出市場裡に於いて輸贏を決するべく餘りに競争要素を缺如して來た。それ故彼等の輸出市場は徐々に他者に浸蝕されつゝあるに加へ、一九三三年以來、この國の最大顧客であつた獨逸が、食糧及び飼料の自給自足政策を斷行せるを以て、さらぬだに不振を託つ農産物輸出は、全く杜絶の状態となり、内外の惡情勢の挾撃に聽て同國民經濟は破綻の瀬戸際に押しつめられたのである。

斯く現行農業が衰退の一途を辿りつゝある現在、そこに何等かの打開策の登場が必要とせられるに至り、茲に油料子實栽培が注目せられ、就中、比較的施肥を必要とせざる、大豆栽培が當國の現狀に適合せる點と地方獨逸の大豆栽培勸告と兩々相俟つて、前記の如き顯著なる成果を挙げ得たのである。

然らば獨逸は何故、これらバルカン諸國に大豆の栽培を奨勵する必要があるのであらうか。この點こそ我等の最も關心を要する所である。由來獨逸は持たざる國として、常に外貨の調達に困窮しつゝある。獨逸が如何に統制經濟の最高の段階を行く國であるにしても、如何に貿易を計畫化するにしても、獨乙國六千七百餘萬國民の、日常不可缺食糧としての油脂の輸入を閉鎖することは不可能である。さりとて國內での自給自足の望むべくもないことも明白である。その證左として獨逸は一時滿洲大豆の輸入を禁止状態に置いたが久しからずして再びその禁をといたことは後述の如くである。

茲に於て獨逸は、盟邦ルーマニアに呼びかけて、大豆栽培を勸奨し、自國商品との交換によつて、外貨の支拂

なしに、この國民體位保全上不可欠な油脂原料を獲得すると同時に、政治的、軍事的にこれら諸國を連結せんとしたのである。即ちバルカン諸國に對して大豆其他油料子實の栽培を行はしめ、これを買取ることによつて、之等諸國に於ける農業恐慌緩和の一助たらしめ延いては對獨好感情培養の一策たらしめると同時に更に一朝有事に際し、英佛の海路封鎖による、滿洲國よりの大豆輸送が遮斷された場合に於ても、この國民體位保存上必須の重要食料を、充分とは云へないまでも或る程度の陸路補給を可能ならしめんことを期してゐるものゝ如くである。従つてこの大豆獎勵策は獨逸にとつては一石二鳥にも當る名なのである。

それ故獨逸はルーマニヤとの間に、相互貿易協定を締結し、生産地に於て既に滿洲大豆を遙に上廻る高値を示してゐるルーマニヤ大豆を輸入してゐる状態である、自由主義經濟下に於ては、我々は一商品の競争能力乃至はその將來性を論ずる場合に於ては必ずその商品のコストから出發すべく慣習づけられて居る。然し現今の如く世界各國が自由主義經濟に轉じ、アウタルキー經濟、ブロック經濟に移行し、自由貿易が相互貿易に置き換へられつゝある情勢下にあつては、コスト如何は必ずしも國際市場に於ける絶對的な輸贏決定要件ではあり得ない。換言すればルーマニヤ大豆が滿洲大豆に比しより高値を維持しつゝありと云つても、この獨、ル關係が滿獨關係以上に親密度の高いものであり、獨逸商品が滿洲國より以上の高値でルーマニヤに賣却され、ル國がこの高値商品を消化しうる限りは獨逸はルーマニヤ大豆を買ふであらうことは明かである。要はその交換の相互的條件如何に懸つて居るのである。

獨逸に於ける滿洲大豆市場は必然にルーマニヤ大豆に浸飼される運命にあることは前述の如くである。

然らば滿洲大豆の獨逸に於ける需要の前途は悲觀されねばならないか。それは一にルーマニヤに於ける大豆生産額の如何にある。然しながら現在驚異的増産を挙げたとは云へ、未だ僅に六、七萬噸を出でざる數量であり、且この問題の前提要件たる相互貿易による高價な商品を輸入する義務を負ふことは勿論である。茲に新たな問題が提起されねばならない。それは前記貿易に伴れて派生する國內の物價騰貴の問題である。獨逸の如き高度統制經濟國に於てならばいざ知らず、ルーマニヤの如き、古來より政争激甚を極め、従つて政變絶えざる國家に於て、果してよくこの國內物價騰貴を抑制し得る丈の、物價、通貨及市場各方面からの有效適切なる對策が講じ得られるであらうか、この點多大の疑惑なきを得ないのである。

以上の如き國內情勢と、同國の自然的條件から見て、ルーマニヤの大豆増産の將來性には多大の疑問符が附されねばならず、少くとも當分の間は「滿洲大豆に大打撃を與へる様な事態を惹起し得るとは思考し得ないのである

### 三、滿洲大豆輸出上に占める歐洲の地位

元來歐洲諸國民は肉食に對する依存度が、他地方民に比し一段と高い。それ故獸肉及油脂の需要は東洋人の考へ及ばぬ莫大な數量に上るのである。

然しながら云ふまでもなく、これら歐洲諸國に於ける油脂需要は人口の増殖と共に、年々多きを加へつゝある

にも拘らず、その供給力には限度があり、舊態依然の状態である。従つてそれら食糧品の入超額は逐年増大しつゝある。

殊に英・佛・獨・丁・和・伊及瑞典等の諸國は、近年各種食糧品の不足甚しく、就中油脂類の缺乏はその極に達してゐる。それ故彼等は各種油脂を買漁るのみならず、油脂原料としての各種油料子實の夥しい數量を要求するのである。

以上の外家畜、家禽の増殖を企圖する結果、そこには勢ひ彼等の飼料不足を醸し、各種雜穀類の輸入を齎らすと同時に、吾人人類に獸、魚肉乃至油脂の必要缺くべからざる如く、彼等鳥獸の身體も亦所謂濃厚飼料たる、これら油脂粕の施與を要請するのである。

茲に植物性油料子實の需要は喚起され直接的、間接的にこれら文明國人を以て自認する西歐國民の必要不可欠の食料となり、彼等の露命を保持してゐるのである。

謂はゞ彼等自稱文明人は、後進國に産出する油脂及油脂原料にその生命を委ねて居るのである。

滿洲大豆亦その一構成分子として、はるか西の方歐洲國民の一大不足食糧品の解決に多大の貢獻を爲しつゝあるのであり、實に文化的人道的大使命を有してゐるのである。

徒らに非觀論を唱へ自らを過大に卑下する勿れ。滿洲大豆の歐洲に於ける地位は、そんな生やさしいものではない。吾人はこの點を強調したのである。常に事物を観察するに當つては冷靜克くその本來の姿を把握せねば

ならぬ。

徒らに一つの論に迎合するは望ましからぬ。ましてや該論が公明正大、邪心なき境地に立つてのものならばいざ知らず、世に傳へられるもの必ずしも、斯る立場からのみ論ぜられるのではない。否多くの場合、人間の通有的弱點とも見られる。自己保護的色彩を帶同し易い傾向が見られるのである。即ち例を示して見ると、先づ農民は諸物價の昂騰を口實に大豆のより高價なる賣却を主張するのであらうし、農産當局官廳とて増産計畫遂行上、將又民生安定の見地から見ても、この點を強調しないまでもこの點に關し默認するの態度に出ずるのは物の勢である。然しながらこれを購入し、販賣する者の立場から見れば、歐洲に於ける農産物市價の低落を楯に、國內價格のより下値にあるべきことを論據付け様とするであらう。茲に於て生産者と輸出業者との立場の相違により各々正反對の要求がなされねばならぬのであり、爲政當局も勢ひ見解の相違を來たすべきは考へられる。従つて各種論調も自らその立脚せる立場を異にするに従つて、勢ひその論調を異にするものである。

意識すると意識せざるとに拘らず生産者は生産者の立場を、糧棧は糧棧の、輸出商は輸出商の立場を有利に導びかんが爲に、各種の討議をなすのは人情の自然である。

然しながら平時に於てならばいざ知らず、斯る超非常時下に於て、興亞の理想具現も愈々その緒につかんとせる今日かゝる個人的、自己中心的觀念は當然打破し、清掃されねばならないのである。

吾人はこの意味に於て信ずるに足る統計の上に立つて、實證的に滿洲大豆の動向を指示すべき幾多關係事項に

ついで筆を進め様と思ふのである。

では歐洲に於ける滿洲大豆の需要の現状は如何であるか、今最も本品の需給を明確に定め得る、その年十月より翌年九月に至る所謂特産年度に於ける我國積出の仕向地別輸出數量について見ると、歐洲向輸出は滿洲建國前五ヶ年平均に於ては百四十五萬餘噸を數へ、全大豆輸出額の六十%を占め、その後たる建國直後に於ては、更にその數を加へ百六十四萬餘噸乃至百五十三萬餘噸を算し全體の七十一、二%を占め斷然他地方向たる日本、支那向を壓してゐたが、その後前記生産の激減と獨逸の輸入制限にたゞられて漸減し、百萬餘噸となり全體の三十七、八%にまで低下したが、昭和十二、十三年度頃より再び生産の恢復と獨逸との親善關係恢復と相俟つて漸増し、昨年度は百三十七萬噸にまで復歸し、本年度は國內増産と滿獨協定の強化により尙一層の躍進が期待せられてゐるのである。

以上の如く大豆そのものとしての輸出はその六、七割までが歐洲依存であり、歐洲の需要如何が直ちに我國大豆輸出の成績を左右するものである。従つて現今喧しい問題となつてゐる大豆輸出の振興もこの點に留意せられねばならぬことは云ふまでもない。

なほこの間の事情は拙なき筆にて収々するまでもなく、過去の実績たる輸出統計によつて如實に代辨せられて居るを以つて、次の仕向地別輸出表の作成を以て之に代へよう。

大豆輸出高仕向地別割合表

(單位 噸)

年次	日本		支那		歐洲		其他		合計	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
建國前五ヶ年平均	五〇三、七〇一	二二	三七七、五三三	一五	一、四三三、四八六	六〇	八九、五二六	四	二、四三三、三五	一〇〇
昭和七—八年	四五〇、三三九	二〇	一三三、七二七	六	一、六四五、六七七	七三	五五、九六一	二	二、二八四、五四四	一〇〇
昭和八—九年	四九七、六六一	二三	八五、五八三	四	一、五三八、一九六	七二	四四、六九四	二	二、一六六、一三四	一〇〇
昭和九—十年	五八七、三六八	三三	一七二、〇一〇	九	一、〇五九、七四四	五八	三〇、五六三	一	一、八八六、七三四	一〇〇
昭和十—十一年	六四四、三六一	三六	一一〇、四七七	六	一、〇二六、七九九	五七	一六、三三三	一	一、九七九、九三〇	一〇〇
昭和十一—十二年	七二二、〇〇八	三三	一八、七三六	六	一、一八三、九五三	五八	一八、八六一	一	二、〇三三、五九八	一〇〇
昭和十二—十三年	七三〇、二四三	三三	五七、八二三	三	一、一七一、四七四	六三	一、四四六	一	二、一五〇、八七五	一〇〇
以上六ヶ年平均	六〇一、八〇三	二九	一一二、七三四	六	一、一〇四、三〇〇	六四	二六、三二〇	一	二、〇四三、二二六	一〇〇

次にこの仕向地別輸出の消長を一層瞭然たらしむべく、前表を基礎に輸出指數を作成して見ると、増勢を辿つて居るのは日本向のみであり、他は一齊に建國前五ヶ年平均よりもはるかに低位を示して居るのである。例を昭和十二—十三年度にとつて見ると支那向の如きは八十五%減、其他向たる南洋、米國に至つては殆んど全減の狀態となつて居るのである。



然しながら主要需要地たる歐洲向は昭和十一年度を境として爾來年々増進歩調を辿つて來て居るのである。

大豆輸出について問題となり、又検討せらるべきは歐洲向であることは云ふまでもない。豆粕の日本に於ける需要の變遷は直ちに當國豆粕輸出の動向を左右するものであると同様、歐洲に於ける大豆需要の消長は直ちに滿洲大豆輸出の盛衰を代辨するものである。

大豆の需要は云ふまでもなく製油原料としてある。然しその製品たる豆粕と豆油の何れに重點が注がれて居るかと云ふ點については一概に論斷し得ないのである。時により場合によつてそれぞれその採算の中心點は異なるからである。

従つてその場合によりそれぞれ競争品との摩擦が生ずる譯である。油として採算を立てる場合には油として、又粕に採算點をおく場合にはその粕にそれぞれ競争品の挑戦がある譯である。

一般に油料子實と稱せられるのがこの大豆の競争品である。前記せる如くその時の四圍の情勢によつてその競争要件の異なるのは云ふまでもないが、大體これ等の子實は互に相牽制し會ひ互に角逐しつゝ自己の市場を擴張せんと努めて居るのである。

吾人はそれ故以上の消長が如何なる子實により、又如何なる國々によつて影響されて居るのかを検討せねばならない。

換言すれば滿洲大豆の需要は懸つて歐洲にある。では歐洲の如何なる國々に依存して居るのか。して又その競争子實は何であるか。といふ點に要約されるのである。

大豆輸出仕向地別消長表

年次	日本	支那	歐洲	其他	合計
建國前五ヶ年平均	100	100	100	100	100
昭和七八年	八九	三五	一一三	三三	一四〇
昭和八九年	九〇	二〇	一〇六	三〇	一四五
昭和九十年	二七	四三	七三	三三	一七六
昭和十一年	二六	三九	七三	二八	一六六
昭和十一年十二年	二四	三三	八二	三〇	一六七
昭和十二年十三年	二四	二五	八〇	二二	一五三
以上六ヶ年平均	二九	三三	八〇	二九	一七一

四、世界に於ける主要油料子實の生産高

世界に於ける油料子實の生産高を知ること、當國大豆の研究をするに際して最も關心を持たねばならぬ點で

ある。

即ち現下の如き經濟情勢下に於いてはその重要性は更に一層加重するのである。何故ならば各國夫々自己を中心に經濟ブロックを形成し、排他的政策を採用して居る結果、過去に於けるが如くその市場に於ける自由經濟下に於ける競争條件とは著しい變化があり、いさゝかでも政治的關聯乃至は經濟的相互依存度の強い地方の商品はそれ丈有利な條件に置かれるからである。

否現在に於いてはその政治的、經濟的關聯こそ凡ゆる競争條件中最有力なる地位を占めるに至つて居るからである。従つて單にその生産數量の多寡を論ずる以上に、その生産物資が如何なる國々の政治的、經濟的勢力圏内に歸屬して居るかを併せ究明せねばならない。

今油脂及油料子實並に油粕等の調査統計に於ける世界的權威と稱されて居る、ロンドンのフランク・フェア社の年報によつて、主要油料子實の國別生産高及び需要構成の主要要件たる該品の用途を一瞥し、後述する歐洲油料子實需要の趨勢についての基礎概念を形成しよう。

大豆の生産高については前述した通りである。それ故茲には歐洲油料子實界の王座を維持しつゞけてゐる、大豆の最強敵落花生を始めとして亞麻仁、椰子實（コブラ）、棕櫚核（パームカネル）、棉實、胡麻、茶種と、その重要度一單なる需要量一の順を追つて概観することとしよう。

### 1. 品種別生産高及び特性

#### (イ) 落花生

日本では支那から渡來したので通例「南京豆」<sup>ナンキンマメ</sup>と稱せられ、なほ唐人豆・唐豆・番豆とも稱し、また地下で結實するので落花生・落花松・落花參・地豆・地果・長成果等の漢名がある。

落花生の原産地については、漸次アフリカ説が覆へされて、現在ではブラジル説が有力となつて居る。原産地はともあれ現在は世界到る處に極めて廣範圍に栽培せられて居るが、就中西印度、アフリカ地方に多量に栽培されて居る。

落花生は種々の用途を有して居るが、別して製油原料としてのそれは大である。

落花生油は常溫では無色透明の液狀を呈し、品質極めて良好である。第一に搾つたものは、オリヅ油の代用として、調理用に供し第二番油は主に燈用に用ひる。第三番油は石鹼製造に用ひ、その殘滓は家畜の飼料として最も良好である。又ラード又はヘットを加熱溶解したものに落花生油その他を混じ、凝固せしめて人造バターを製造するのである。

次にその生産高を見ると、原産地説の根據地たる、アフリカ及び南米は共に振はず、最近の世界生産高は英領印度によつて、その六、七十%を占有され、落花生生産上に占める印度の地位は絶對的である。今その産額を見

ると、昭和九年度の如きは三百二十八萬噸を算し、最も新しい數字たる昭和十二年度の生産高について見ても二百八十四萬噸を數へ、最近六ヶ年間の最低生産高に於てさへ尙百八十九萬を示してゐるのである。印度に次ぐのは米國の十%乃至十六%及び英佛領アフリカの十%前後である。

茲に於て吾人の知りうることは歐洲に於ける最も需要大なる落花生はその主要需要國たる英國內に於て全世界産額の七十%内外を佛國內に於て同じく十%内外を占められて居るのである。この邊にも本品の根強き需要力の一因が存在して居ることは明である。否この點こそ本品の王座を維持し得る最大の要件であらう。

世界に於ける落花生生産國別累年表

(單位 噸)

地方別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
支那	一八四、四六三	五	二二九、六六六	三	一三七、四七三	三	一六三、八二一	五	七六、〇五九	二	—	—
英領アフリカ	二二七、七九〇	六	二七四、五九三	七	三二一、〇一六	七	二四六、二二七	七	二五五、六八〇	七	三九五、六二一	九
佛領アフリカ	一九五、四三七	五	三六〇、六九八	九	四七二、〇五五	一〇	三四七、七七	一〇	四五一、六〇〇	一三	五九二、八八八	一三
東部アフリカ	五〇、八〇三	一	四〇、四四三	一	五〇、八〇三	一	五〇、八〇三	二	五〇、八〇三	一	六〇、九六三	一
米國	四四四、五七七	一三	四二七、五三八	一〇	四八二、一八八	一〇	五七三、五四六	一七	五八九、九一九	一六	五八五、八八五	一三
印度	二、六八三、三八	七〇	二、八三六、八二二	六九	三、二六六、九三三	六八	一、八九八、九九七	五七	二、二〇一、七八〇	六〇	二、八四七、九八八	六三

右指數	100		107		114		117		116		118	
	シヤバ島	合計	シヤバ島	合計	シヤバ島	合計	シヤバ島	合計	シヤバ島	合計	シヤバ島	合計
100	一四、五六六	—	一七、六九八	—	六、〇〇三	—	一〇、六六九	—	二、三三七	—	七、七六〇	—
107	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
114	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
117	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
118	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 1. 單位噸、一英噸は一・〇一六〇五噸として換算推定  
 2. レウユー オウ・ザ オイルシード・オイル アンド オイル ケイク マーケットフォー1937

(ロ) 亞 麻 仁

亞麻仁は歐洲原産の一年生草本の纖維原料植物の種子であるが、莖の收穫に適する時期には、種子の含油量が未だ最高に達しないから、亞麻仁を目的として栽培する場合には、莖の方を多少犠牲にせねばならない。従つてその纖維を目的とするか子實の目的とするかによつてその栽培は自ら異なる譯である。

古代歐洲に於ては、拜禮の際に亞麻仁を炭火の上に置いて蒸煙し、希臘及印度では、その油を蜂蜜に混和して食品の調理に應用し、又シリヤ人及びアビシニヤ人は、この油を日常の食料にしてゐたと傳へられて居るが、現今では亞麻仁油を食料に供することは絶無である。

亞麻仁油は食料油としては不適であるが代表的乾性油であるから、印刷用のインキに混入し、或は防濕用に供する他、種々の工業用として廣く利用せられてゐる。

尙この残滓たる亞麻仁粕は、蛋白質に富み消化も良く營養價も亦大なるを以て家畜の飼料として好適であるが、高價である爲に一般成畜には供與され得ないで、離乳期の幼畜の飼料として用ひられてゐるのである。然しながら亞麻仁には毒性の物質を生ずる場合があるが、これは加熱によつて避けられるのでそれ程問題とはならぬ。

では最近の生産状態は如何であらうか。亞麻仁といへば亞爾然丁、亞爾然丁と云へば直ちに亞麻仁を聯想するこゝと程、亞爾然丁の亞麻仁は著名である。

従つてその生産高も年により豊凶の差はあるが、大體百五十萬噸から二百萬噸内外を記録して居り、全世界生産額の五、六十%を占めて居る。次いで露西亞であるが、この國に關しては周知の如く、凡ゆる問題についてさうである如く農業生産についても亦信ずるに足る統計を見出せないのであるが、過去の實績並びにその他該年度中に於ける、諸種類推資料より次の如き統計を作成してゐるのである。これについて見ると、露西亞は大體八十万噸内外の生産力を有し、全世界の二、三十%を占めて居る譯であり、この國については印度が擧げられるのである。

このアルゼンチン亦準英國國內にあることは世界歴史の語る所であり又同國貿易統計表の物語る所である。

少くもアルゼンチンは經濟的には英國の屬領の如き立場に置かれて居り、英國の支援なしには到底満足なる發

展は期待し得ない様な状態にあるのである。換言すればアルゼンチンは英國の經濟的支配下にある經濟的屬國である。

→、それ故亞麻仁も亦英國に於ては自國領土内産物と同様の地位に置かれて居る譯である。

世界に於ける亞麻仁生産高國別累年表

(單位噸)

仕向地	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
アルゼンチン	二、二〇五、八四四	八六	一、三七一、六六八	四九	一、四六三、二二三	五二	二、〇五七、五〇一	五五	一、四七七、八七二	四九	一、九六六、〇七三	三二
印度	四一七、五九七	一一	四〇九、四六八	一五	三八三、〇五一	一四	四二六、七四一	一一	三九〇、一六三	一三	四四四、七〇九	一一
米國	三〇〇、七七六	八	一七三、三三七	六	一三三、四三三	五	三七八、九八七	一〇	一五〇、〇七一	三	一七六、七九三	三
加奈陀	六三、三三三	一	一七、三四三	一	二二、〇九〇	一	三七、三六〇	一	四五、五九五	一	一七、四五二	一
露西亞	七六三、〇三八	二〇	七三六、六三六	二六	七三、三三三	二五	七六二、〇三八	二〇	八二二、八四〇	二八	七六三、〇三六	二二
歐洲諸國	七六、二〇四	二	九一、四四四	三	二六、八四六	四	一〇一、六〇五	三	九一、四四三	三	八六、三六四	三
合計	三、八四四、六六二	100	二、七九八、八〇八	100	二、八〇〇、七六七	100	三、七四四、三三三	100	二、九七七、九九五	100	三、四四四、四八八	100

(ハ) 椰子 實 (コブラ)

茲に椰子實とは通常ココ椰子と稱せられる棕櫚の一種の果實の外皮を除却した胚乳を乾燥したもの、即ちコブラを云ふのである。

コブラは椰子油の原料として年々多量に熱帯地方から歐洲に輸出されるのである。

コブラの製造について一言すると、その方法は種々あるが、普通は果實を地上に斜に立てた鐵棒の先端に突きつけておいて振ぢりつゝ、厚い纖維層を除き次に硬い殻を兩割し、内から白色の果肉を抉出し、そのまま乾燥すると、果肉は収縮して堅殻から自然に剝離するのである。

乾燥には日光、焚火、蒸氣等を用ひるが、焚火によるときは煙によりその製品の品質を悪くする害がある。よく調製されたものは白色であり、それからは良質の食用油が搾取される。尙この油は常温にては固體であるが、二十度以上に於ては液體となるのである。主なる用途としては前記の如く食料として用ひられる外石鹼製造にも多額の需要がある。

椰子油で製した石鹼は冷水にてもよく溶解し、起泡性が強いため、普通の化粧石鹼の製造には殆んど缺くべからざる重要原料である。

椰子樹の繁茂が熱帯地方に局限せられて居る關係上、その果實の一部たる椰子實(コブラ)の生産高も、これらの地方に限られて居るのである。即ち蘭領印度の五十萬畝内外、全體の四、五十%を首位に、フィリッピン、

南洋群島海峽植民地等が之に亞ぐ供給地である。然しながらこれら地方に於ける果實は、農産物の通例とは云ひながらその間に非常な相違が認められるのであり、又生産高についても、比較的未開地方のこととて正鵠を期し得ざることは勿論である。

世界に於ける椰子實生産高國別累年表

(單位 噸)

地方別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
セイロン島	一六、八九三	二	六五、三三五	六	一〇七、三三七	四九、四四三	五三、六四五	六八、七六六	六	六八、七六六	六	六
海峽植民地	一八六、八三三	二〇	一九五、六九一	一六	一九九、六六八	一八三、六六三	一九九、八四四	一六七、六九九	一四	一六七、六九九	一四	一四
フィリッピン	一三六、〇一六	一四	三〇七、三三七	二二	三五一、八八九	二五六、九四三	二六四、〇六三	三三六、四四三	三三	三三六、四四三	三三	三三
※南洋群島	一〇一、六〇五	一一	一五三、四〇八	一三	一五三、二〇八	一三三、〇八七	一三七、〇〇六	一一七、〇〇六	一一	一三七、〇〇六	一一	一一
※東部アフリカ	一五、二四二	一	一五、二四二	一	一五、二四二	三五、五六三	三五、五六三	三五、五六三	三	三五、五六三	三	三
※蘭領印度	四八七、三三二	五三	四九三、九七三	四〇	四一三、五八三	四九一、二二五	五二五、三四七	四四	五〇三、二七	四	四	四
合計	三、〇〇八、七七一	100	一、〇一〇、一七二	100	一、一〇〇、〇〇〇	一、一八六、二一〇	一、一八六、二一〇	一、一八六、二一〇	100	一、一八六、二一〇	100	100

(ニ) 棕 櫚 核 (パームカネル)

棕櫚科植物の一にして、通例油椰子と稱する椰子の子實の内部にある堅い種子を云ふのである。即ち油椰子の果實は内部に硬い種子を藏し、その周囲を果肉で包んで居る。パームオイル(棕櫚油)と云はれるのは、この果肉中に含まれてゐる脂肪であり、石鹼原料及蠟燭原料に用ひられるのである。

パームカネルオイル(棕櫚核油)は前記油椰子の内部にある種核からとる脂肪にして、椰子油に類似した性状を有し、主に食料及石鹼原料に用ひられる。

椰子實と共にその生産可能地域が局限せられて居る。大體前者と同地方に於いて栽培せられて居るのであるが、本品は英領アフリカに最も多く大體三、四十萬噸を生産し、全體の六十數%を占め亞いで佛領アフリカ、白耳義領コンゴ、蘭領印度等である。

本品も亦英佛兩國にて世界産額の八十%内外を占めて居る現狀である。

世界に於ける棕櫚核生産高國別累年表

(單位 噸)

地 方 別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英領アフリカ	三九、九〇〇	六	三三、八六六	六	三七、六一	六	四四、〇二五	六	四九、〇九六	六	三五、七八	五

右 指 數	100		八七		九六		一〇九		一三三		一一〇	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
佛領アフリカ	一一五、九〇七	三	一〇四、五一一	二〇	一三三、三〇〇	二四	一四一、四七六	三三	一七六、八六三	三三	一六三、五六八	三
白耳義領コンゴ	五八、四九九	一〇	六三、〇九八	一三	四九、九九九	八	六四、九九九	一〇	九四、九九九	一三	八六、三三三	一三
蘭 領 印 度	一七、八三四	三	二三、〇三〇	四	二五、〇九九	四	三〇、五五三	五	三五、六五一	四	三九、六六六	七
マレー半島	一、二六八	一	一、九九二	一	三、〇三三	一	三、九九九	一	五、〇四四	一	七、一一三	一
合 計	六三〇、四六八	一〇〇	五四〇、四六八	一〇〇	五八〇、二六二	一〇〇	六三〇、一〇〇	一〇〇	八〇一、一五〇	一〇〇	六三三、四六八	一〇〇

(ホ) 棉 實

言ふまでもなく棉の種子にして、棉栽培の副産物として得られる棉實の用途は極めて廣大なものである。その含油量はこれら各種子實に共通なる如く、その品質生産地の風土及び栽培法の如何によつて異なるが、陸地棉の種子はその風乾物百に對し一七・六四—二三・八%の油を含有してゐる。

従つて現今棉實の最も主要なる用途は、製油工業原料として用ひられることであつて、その製品たる棉實油は廣く各種の用途に供せられる。

棉實油は半乾性油にして、主として食用及び石鹼製造に用ひられ硬化油原料としても盛んに使用される。

又棉實油ステアリンは融點二十六—四十度に達し豚脂及び牛脂の代用品として使用されるのである。

次に製油に随伴する棉實粕について見ると、肥料として又家畜の飼料として、頗るその聲價を擧げて居る。ではその世界に於ける生産分布は如何。棉も亦比較的溫暖以上の氣候に好適して居る關係上、その地域は相當局限されて居る。

米國は棉實生産に於いて實に全世界の半數近くを占めて居る。由來棉は高級作物なる關係上、年により、極めて豊凶の差甚しく、その生産高に安定性は認められない。多い年は四百四、五十萬噸、少い年は三百萬噸以下のことがある。

米國に亞ぐ生産地は印度であり、印度は年二百萬噸以上の生産力を有し、全體の三十%内外に及び、これにエチプトの十%内外を加算する時は英圏内に於て實に世界産額の四十%を占める譯であり、世界全生産額の九十%内外はこの英米兩國にて獨占されて居る結果となるのである。

世界に於ける棉實生産高國別累表

(單位噸)

地方別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
米 國	四、三九〇、〇二五	五九	四、〇〇四、二〇〇	五五	三、〇四八、一五〇	四六	二、九九七、三四八	四六	三、二〇〇、五五六	四六	三、九二一、七九三	四八
印 度	一、九三〇、四九五	二六	二、〇三三、一〇〇	二八	一、九三〇、四九五	二九	二、〇三三、一〇〇	三一	二、二〇九、九九九	三一	二、五〇〇、九八八	三三

右 指 數	100		九 九		九 八		八 七		九 四		一〇〇	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
支 那	三、七六六	一	五、九二七	一	四、〇〇八	一	六、一八七	一	七、二三四	一	四、〇六六	一
ブ ラ ジ ル	二〇三、二一〇	三	二、五四〇、〇三三	三	三三〇、二二六	五	三三〇、二二六	三	四〇六、四三〇	六	四〇六、四三〇	五
其他南米諸國	四〇六、四三〇	五	四三二、八二二	六	四三二、八二二	七	三三八、六二二	四	二、五四〇、〇三三	四	二、五四〇、〇三三	三
東部アフリカ諸國	一四三、二四七	二	一四三、二四七	二	一三七、〇〇六	二	一三七、〇〇六	二	一三七、〇〇六	二	一三七、〇〇六	二
エ チ オ プ	三、五五、四〇四	五	三、五五、四〇四	五	七二二、四九九	一一	六六五、三三六	一一	七二二、四九九	一一	七九九、八〇〇	一一
合 計	七、四〇五、七七一	100	七、三六八、二〇二	100	六、六三〇、八八五	100	六、四三二、四八四	100	六、六三〇、八八五	100	八、〇〇九、九二〇	100

(ハ) 茶 種

茶種は油菜の種子にして、極めて油分に富み、往時はその油を燈用となしたが、現今ではオリヅ油の代用品として、食用に供し又纖維工業用減摩用、人造ゴム原料等に用ひられてゐる。

生産について見ると、印度は九十六、七萬噸を算し、全體の九十%内外に達し、他は殆んど、一顧の要なき程である。而して本品の生産高は従來年々極めて、安定してゐたものであるが、近年に至り稍減退傾向が觀取されるに至つたのは注目すべきである。

世界に於ける菜種生産高國別表

(單位 噸)

右 指 數	地方 別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
		數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合
100	支那	四、七九	四	一六、九二	一	二、七二	一	六五、九四	六	一八、三〇	一	—	—
	印度	九六七、二八〇	八七	一、〇六三、八〇四	九三	九九二、六一	九二	九〇九、三六五	八六	九六六、二六四	九〇	九八五、五六九	九二
100	ポロラニア	六六、〇四三	六	五〇、八〇三	四	五〇、八〇三	五	五五、八八三	五	五〇、八〇三	五	五〇、八〇三	五
	ルーマニア	三〇、四八二	三	三〇、四八二	三	三〇、四八二	三	三五、五六三	三	四〇、六四三	四	四〇、六四三	三
100	合計	一、一〇八、八八四	100	一、一七一、一〇〇	100	一、一〇九、七七一	100	一、一〇六、七七一	100	一、一〇九、九一九	100	一、一〇九、七七一	100

(ト) 胡 麻

胡麻は支那滿洲では脂麻・芝麻・油麻と呼ばれ、熱帯地方の原産と稱せられてゐるが、温帯地方にも好適し、印度・支那・日本等では胡麻油搾取原料として栽培してゐる。

胡麻はそのまま、食料ともなり、又薬用としては緩下劑・驅蟲・解毒・通經・催産の効果大である。一般的には強劑として知られてゐる。

右の外工業用としては石鹼材料及びオリヴ油代品として加工されて居る。

又その搾油粕たる胡麻油粕は、菜種粕の代用品として肥料、飼料に用ひられてゐる。

胡麻も亦英領印度は絶對的地位に置かれて居る。即ちその生産は東洋に限られ、全生産高は五十餘萬噸に上り、その中印度の産額は四十餘萬噸に達し、全體の八十%以上を占め、その残餘は支那産である。

世界に於ける胡麻生産高國別累年表

(單位 噸)

右 指 數	地方 別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年	
		數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合
100	支那	三、四七	六	三、七三	六	四、五三	八	二八、九七	三	一〇八、〇三	二〇	不明	—
	印度	四九五、八三三	九四	五五三、七四七	九四	五二七、一六九	九二	四〇〇、四八四	七	四二二、九九	八〇	四八九、七六	—
100	合計	三、七七、〇〇三	100	五八六、四八〇	100	五八〇、六九二	100	三九九、四六三	100	五三一、〇三六	100	四八九、七六	—

2. 各種油料子實の政治、經濟的地位の瞥見

以上に於て、當國大豆の競争油料子實たる・落花生・亞麻仁・椰子實・棕櫚核・棉實・胡麻及び菜種等主要油料子實の世界的生産分布並びに、その製品たる各油脂及油粕の用途の極めて概觀的考察を終つたのである。



吾人がこの通覽によつて知り得た最も顯著なる收穫は、これら各種油料子實の生産地分布が全く歐洲から分離して居ることである。

即ち各種子實とも比較的未開國乃至半未開國たる産業の後進國に於て生産せられて居るのである。従つてそれら油料子實の生産地は殆んど歐洲列強によつて侵略乃至は屈從を余儀なくせられて居る地方にして、彼等の政治的、經濟的勢力圏内にあるのである。

就中英、佛兩國に於て殆んど全世界油料子實生産國を獨占して居るかにさへ觀取されるのである。

試みに英國のそれについて一瞥すると、英國の世界侵略はその「日没を知らざる大範圍」によつても知られる如く、世界の各地をその領土として占有して居るのである。従つてこれら油料子實生産國のその範圍に包含せられて居るもの數多く、世界に於ける、菜種、胡麻の九十%、落花生、棕櫚核の六、七十%、棉實の四十%、亞麻仁の十二、三%は總てこの日の没することを知らざる英國の領土に於て生産せられて居るのである。

この他各種油料子實共に、歐洲諸國に於ては殆んど生産されず、亞細亞、亞弗利加等に於て生産されて居るのであるが、前記の如く、これら生産國が陰に陽に、政治的に經濟的に非生産國たる歐洲列強の支配下にあると云ふことも、大豆の競争子實の検討を爲すに當つては見逃すべからざる重要ポイントである。

換言すれば油料子實の主要需要國たる歐洲列強の支配圏外に生産される子實は實に我國大豆のみである。茲に大豆輸出振興の困難が見られるのである。

次に認められねばならぬことは、等しく油料子實とは總稱されながら、その製品たる各種油脂の特質により用途に相當の差異があることである。

食料油に適し工業に不適のものもあれば、工業油的要件を具備し、食料油に適さないものもある。

現在は科學の進歩によつて或程度、化學的操作により、或る種の油脂を他の用途に適せしめる様な工作が行はれ、工業的不適格油に工業油としての適性を賦與することは不可能ではない。がそれにも自ら限度があり、諸種の採算關係に左右されることは明である。

就中右に列記せる子實油中、亞麻仁は純乾性油にして、全く工業油であり、食料には不適である。この外棉實油、棕櫚核油は比較的工業油としての使命の方が食料としてのそれより大である。

その他一様に食料及び工業原料に使用されるとは云ひながら、これらの油料子實より搾取した油脂は勿論、その残滓たる油粕は、その組成分子に多大の懸隔があるのである。

先づ前記油料子實の生命とも稱すべき、出油量について見ると、椰子實は六十三%にして最も含油率高く、亞いで棕櫚核、胡麻の四十五%、落花生の三十六%、菜種の三十五%、亞麻仁の三十%、棉實の十八%、大豆の十五%の順序であり、大豆は算も含油量に於て劣弱である。

然るにその半面をなす、出粕量について見れば、當然これと反對に大豆は八十五%にしてトップを切り、椰子實の三十七%が最低位である。

茲に油料子實需要の本然の分岐點が認められるのであり、換言すれば牧畜業盛大にして、飼料用作物に恵まれる地方に於ては、油粕の需要大なる爲、勢ひ出粕度の高い大豆、棉實が需要されるのであり、これと反對の國々に於ては、當然に含油率の高い、出粕率の低い椰子實、棕櫚核、落花生、胡麻等が選擇されるに至るのである。

尙この他その製品たる、油脂の性状の差異により、食料油としての需要が大なるか、又工業油としての需要に重點をおくかによつても自らその原料子實の選擇に多大の差異が生ずるものであることは前述の如くである。

主要油料子實出油量及出粕表

品	種	出油量	出粕量	計
椰子	實	六三	三七	一〇〇
棕櫚	核	四五	五五	一〇〇
胡麻	生	四五	五五	一〇〇
落花生	種	三六	六四	一〇〇
菜種	仁	三五	六五	一〇〇
亞麻	仁	三〇	七〇	一〇〇

棉	實	一八	八二	一〇〇
大豆	實	一五	八五	一〇〇

(フランクフェア年報による)

### 五、歐洲主要七ヶ國に於ける油料子實の需要概観

以上に於て、歐洲に於ける油脂不足の不可避なることと世界に於けるその植物性油脂原料の供給國及びそれら油脂及油粕の特色の極めて概観的検討をなした。

油脂の不足は、彼等の生存を前提とする限り、或る一定量の輸入を保持せねばならぬことも亦明白である。では歐洲に於ては一體幾何の油料子實の輸入を必要とするか。勿論油脂として輸入せられるもの、油料原料たる子實のまゝ輸入せられ、それに加工を施すもの、又はマルガリンその他の高級製品として輸入せられるものも考へられる。

然しながら後進産業國ならばいさ知らず、歐洲の如き先進資本主義國家に於て、最終製品としての油脂乃至はその加工品の輸入が可及的に回避せられるは言を俟たぬ。

従つて歐洲諸國にては原料たる各種油料子實を購入し、これに自國の製油工場にて加工し、油とその残滓たる各種油粕に振分けるのである。茲に歐洲製油工業の發展の素因が存在するのである。

それ故歐洲の製油工場は、滿洲の如く大豆のみを原料とするにあらざして、採算有利なるものを選び、亞麻仁の有利なる時には亞麻仁、落花生、棉實の有利なる時には棉實といふ具合に、隨時原料を變更し得る設備を有するものである。(滿鐵佐藤氏、大豆の加工参照)

これは原料を遠く、海外諸地方に仰ぐ工業國としては當然採らるべき處置である。この工場の設備あつてこそ、各種油料子實間の均衡が保たれ、その價格も必然に足並を一にする所以である。

では昭和八年より同十二年に至る最近五ヶ年間の実績についてその角途の推移を一瞥しよう。

今滿洲大豆の歐洲に於ける主要需要國たる、獨逸・丁抹・和蘭陀・伊太利・瑞典・英國・佛蘭西に於ける油料子實の入超高をフランク、フェアー社油脂年報によつて作成して見ると、前記主要七ヶ國合計にて百萬噸を突破して居るのは僅に大豆、落花生、亞麻仁の三品にしてこの三品にて、全油料子實需要高の六十餘%以上を占め、昭和八年の如きは、實に七十二%を占めて居たのである。従つて、歐洲に於ける油料子實の動向は全く、前記三品の左右する所であつた。それ故これら子實の一張一弛が斯界の注目の的となつて居たのである。

別して昭和八、九兩年頃に於ては、大豆と落花生は全く對蹠的地位にあり、互に王座獲得を目標に相角逐して居たのである。

即ち昭和八年度に於ては、大豆は百六十八萬噸を算し、全體の二十七%を占めたるに對し、落花生は百四十六萬噸にしてこれ亦全體の二十四%を占め、兩者にて既に全體の半數以上を占有して居たのである。次いで翌九年

には大豆は稍停滯氣配觀取されたるに反し、落花生の進出目覺しく、終に百六十八萬噸と前年度の大豆と略同數量を擧げ全體の二十六%を占め、大豆は僅々五萬噸の小差を以つて首位を、落花生に譲らねばならなくなつたのである。

而してその後たる昭和十年以後に於いては、大豆は年一年その數を減じ、昭和十一年には早くも百七萬噸と辛くも百萬噸臺を死守するまでに激減し、その割合も十八%を占めるに過ぎなくなつた。落花生亦十年には百二十四萬噸に減退しその割合も二十二%となつた。その間に獨り亞麻仁の躍進を見たのである。然しながら一昨昭和十二年に至つては落花生は又もや、大躍進を示し、百九十萬噸を數へ、記録的激増を見せ、全體の二十九%を占め大豆、亞麻仁をはるか脚下に見降すに至つたのである。茲に於て大豆落花生の王座競ひは、亞麻仁を加へ三者鼎坐の形となつたのである。

主要七ヶ國油料子實合計需要高累年表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合
椰子	五六、五〇	一〇	七五、〇四三	一一	五六、九八〇	一〇	六七、二〇七	一一	六〇、七三三	九	六三、六〇	一〇

品名	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	以上五ヶ年平均
椰子實	100	119	98	113	101	106
棕核	100	108	127	106	140	137
花生	100	115	85	101	129	106
亞麻仁	100	123	183	126	288	144
菜種	100	100	100	100	100	100
其他	100	100	100	100	100	100
合計	6,318,035	6,580,011	5,700,366	6,040,319	6,580,352	6,240,611

以上に於て大體數量的見地から主要三品たる大豆・落花生及亞麻仁について、その地位及び推移を概観したのであるが、次に全子實の數量的ウェイトをはなれた推移について検討して見ると、比較的増勢を辿つて居るのは、胡麻・棕核・棉實であり、現状維持と見られるのが、椰子實・落花生の兩者であり、減退傾向の著明なのは、大豆・菜種・亞麻仁である。

即ち昭和八年を100とする需要指數に於て、昭和八年より十二年に至る五ヶ年平均に於ては胡麻164・棕核127・棉實128・椰子實106・落花生106・大豆80・亞麻仁96・菜種88を示して居るのである。

以上の如く各品種別の推移は實に變轉極まりないのである。だが合計數量に於ては、年により多少の増減は見られるが、次表にも明かなる如く、五ヶ年平均指數は恰度基準100を指示し、各品種間の個別的盛衰にとらはれざる根強い需要を如實に物語つて居るのである。

従つて各品種間の需要の消長は、決して總需要額の消長によるものではなくして、それら各品種間の内包的、外延的特殊關係によるものであると言ひうるのである。そこには供給國と需要國との政治的、經濟的關聯もあらう。子實それ自體の生産の増減もあらう。又それら子實の需要の變遷もあらう。これが吾人の研究題目であるのである。

歐洲主要七ヶ國に於ける油料子實角逐表

品名	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		以上五ヶ年平均	
	指數	數量	指數	數量	指數	數量	指數	數量	指數	數量	指數	數量
椰子實	100	100	119	101	98	113	101	106	101	106	106	106
棕核	100	100	108	127	106	140	106	137	140	137	137	137
花生	100	100	115	85	101	129	101	129	129	106	106	106
亞麻仁	100	100	123	183	126	288	126	288	288	144	144	144
菜種	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
其他	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
合計	6,318,035	6,318,035	6,580,011	6,580,011	5,700,366	5,700,366	6,040,319	6,040,319	6,580,352	6,580,352	6,240,611	6,240,611

合	其	大	棉	亞
計	の	豆	實	麻
100	100	100	100	100
112	118	97	110	92
111	117	96	113	101
94	100	64	113	94
94	103	71	117	94
96	118	68	116	96

### 六、歐洲主要七ヶ國に於ける各種油料子實の需要高

#### 1. 概 説

右の如く歐洲主要七ヶ國に於ける油料子實の需要高は年により多少の増減はあるが大體六百萬噸乃至六百五十萬噸内外に上るのである。

然してその六百萬噸の油料子實が、これら七ヶ國に於て平均的數量の消費をなして居るとは考へられぬし、又その油料子實間に介在する前記各種の本質的乃至附隨的相違により、これら子實の需要が年により、國により、相當變遷を來すであらうことは容易に想像せられるであらう。では如何なる國に如何なる子實が需要せられて居るか。

先づこの七ヶ國に於ける最近五ヶ年間の全油料子實需要量を擧げその全體に對するパーセンテージを見よう。

歐洲に於ける油料子實需要高を一瞥する者は誰でも、如何に獨逸が多額の子實を輸入して居るかといふ點について注意を惹かれるであらう。

即ち獨逸の輸入高は昭和八年度に於て、實に二百二十九萬噸を算し全歐洲需要量の三十七%を占め、同九年よりは年々減退せるとは云へ、なほ全體の三十四%を占めて居たが、同十年には終に百三十三萬噸にまで激減し、その全需要額中に占める割合も極度に減退し、二十三%を占めるに過ぎなくなつて終つたが、翌昭和十一年よりは又復漸次恢復歩調を見せるに至り、百六十六萬噸と三十三萬噸方を挽回し、その占める割合も二十七%となり、昭和十二年度には、數量的には多少の増進が見られたが、他國の一層の激増により、相對的には減退し、全體の二十六%へとその間一%の減退を示したのである。然しながらこの五ヶ年間の平均について見ると、依然百八十三萬噸を數へ、全體の二十九%を占め、歐洲に於ける油料子實需要國の王座換言すれば、世界に於ける最大植物性油脂原料消費國として斯界の動向を左右して居るのである。

この獨逸に亞ぐ需要國は英國及び佛國である。英佛は昭和八、九年頃に於ては全くその需要量に甲乙なく、大體全額の二十%たる百三十萬噸内外の消費力を維持して居たのであるが、英國は、昭和十年度より急激な躍進を見せ、同年の如きは、獨逸の意外の不振と相俟つて終に百六十萬噸に達し、全體の二十七%を占め、不振の獨逸を遙に凌駕するに至り、その後は前記の如き獨逸の恢復に再び壓倒されたが、依然全體の二十五%を占め、堅實な需要を示して居るのである。他方佛國は依然百三、四十萬噸を堅持し、英國に次く消費市場としての地位を保つ

て居るのである。

以上獨、英、佛の三國にて既に全歐需要量の七十三、四%を占め、昭和八年度の如きは實に八十%に達して居るのである。即ち茲に於て油料子實は亞細亞・亞弗利加・亞米利加の比較的未開國に於て生産され、歐洲に於て需要されるものであり就中その八十%近い數量が獨逸・英國・佛國等の油坊工業の原料子實として需要せられて居るといふ結果になるのである。

獨逸的に云へば、歐洲の三強國たる英・獨・佛はこれら油料子實の需要に於ても亦世界の三大國であり、油脂乃至油脂原料が近代國家にとつて如何に緊急缺くべからざるものであるかといふことを證するに足る一證左ではあるまいか。

この獨・英・佛に次くのは和蘭・丁抹の十%内外であり、ずつと下つて伊太利の五、六%、最後が瑞典の二、三%である。

油料子實合計

(單位 噸)

國 別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英 國	一、三〇九、〇三三	二二	一、三三五、六九九	二〇	一、六〇四、〇五八	三七	一、四九九、六六一	二五	一、六四九、三六六	一五	一、四七九、五八四	二四

佛 國	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
獨 乙	一、三四八、〇五一	三三	一、三九九、〇五三	二〇	一、三四三、六六二	二二	一、三九九、一三三	二二	一、四五一、六五九	三三	一、四八八、三六六	三二
丁 抹	二、九三三、六六九	三七	二、三三三、八三八	三四	一、三三三、八二二	三三	一、六六一、六二〇	二七	一、六七〇、四〇六	二六	一、八三四、三三七	二九
和 蘭	三九三、三三三	六	四九七、七六六	七	四六九、三三四	八	四三〇、〇五九	七	四三八、七〇三	七	四三四、四八八	七
伊 太	五三八、三三三	八	七三三、七九七	一一	七四三、七〇三	一三	六六八、五〇〇	二二	七二一、八二四	二二	六七二、六五五	二二
瑞 典	二四三、〇三三	四	三六八、三三三	六	二七六、三三五	五	一八七、三四七	三	四一七、一五四	六	二九八、六七八	五
合 計	六、三六八、〇五三	一〇〇	六、三三三、〇五三	一〇〇	五、八四一、一三三	一〇〇	六、〇四四、三三九	一〇〇	六、三三三、三三三	一〇〇	六、一三三、三三三	一〇〇

以上が歐洲主要七ヶ國に於ける各種油料子實の合計需要數量であるが、次に問題となるのは右の如き、全需要量に就いての割合の外に、假令その需要量が相對的には僅少であつても、絶對的に激増傾向を示して居るものもあれば、これと反對に減退歩調を辿つて居る國もあるのである。

今この點を明確に認識するために、これら七ヶ國の昭和八年度の需要量を基準一〇〇として、爾後の經過を検討して見ると、次の如く興味ある計數を見出し得るのである。

先づ順序として量的にこれら七ヶ國中最高位に置かれてゐる獨逸より觀れば、獨逸は後述する如き各種の事由により年々減退し、昭和九年には九九、昭和十年には早くも六〇と半減近い急減を示したが、その後は再び増勢に轉じ、昭和十一年七四、同十二年七五と漸次恢復を見せつゝあるとは云へ、この七ヶ國中、昭和十二年に於て

同八年に比し減退を示したのは唯この國のみである。

では獨逸に亞ぐ英國はどうであらうか。英國は概して増加傾向にあり、昭和十二年の如きは一二六を示し、同八年より二六%の激増を示して居る。佛國は昭和九、十年には多少の減少を見せたがその後は堅實の歩みを見せ、昭和十二年には一〇八を示して居るが、獨逸に次ぐ不振國である。

以上に於て三主要需要國についての検討を終つたが、これらの三國に於ける五ヶ年平均が増加を示して居るのは僅に英國の一三%のみにして佛國は現状維持、獨逸は一八%の激減である。

これに對し、和蘭・瑞典・丁抹等は何れも着實なる増進を示して居り、就中、瑞典の如きは一三四・一五一・一八二・一八二と極めて飛躍的に激増して居り、和蘭之に次ぎ、一三九・一三九・一二七・一三五を示し、丁抹は稍停滯氣味なりとは云へ、五ヶ年平均に於ても尙一%の増加を示して居るのである。

最後に伊太利であるが、この國も昭和十一年のエチオピア戦争による減退を除き、瑞典・和蘭に次ぐ需要の増大を記録してゐるのである。

即ち次の如くである。

主要七ヶ國に於ける油料子實需要指數表

品 種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
英 國	100	103	133	125	126	123
佛 國	100	97	96	103	108	100
獨 逸	100	99	66	74	75	83
丁 抹	100	109	110	113	113	111
和 蘭	100	119	119	127	131	128
伊 太 利	100	112	113	117	121	123
瑞 典	100	114	151	183	183	150
合 計	100	105	122	129	135	100

2. 需要國別に見た各種油料子實の消長

次に以上の數量の根底をなす各國についてその品種別構成を検討して見やう。或る特定國の油料子實の需要、別してその子實需要が如何なる品種によつて、如何なる割合を占められて居るか云ふことを知るためには、先づその國の油坊工業についての検討を前提要件とするのである。即ちその國の油坊は、その國の各種の情勢によつて自然に、その國の實勢に添ふべく、幾多の變遷を來し適應性を附與されて來て居るからである。

詳言すれば、工業油、就中、乾性油工業の發達した國々には自ら亞麻仁の搾油が發達し、食料油の不足せる國々には、落花生を多く需要し、牧畜國にては比較的含油率の多い品種よりも出粕量の多い大豆の消費が適應するのである。

それ故に各國その領土の廣狹、土壤の肥瘠、地形の如何、人口の割合、工業の種類及び發展過程等によつてそれそれの國独自の、その國に最も緊切缺くべからざる油脂乃至油粕を要請するのは理の當然にして、これら油料子實の需要分布も亦この根本的差違に基底を置くものであることは言ふ迄もない。これを反面から見れば、或る國が需要する油料子實の種類、數量如何によつて或程度まで、その國の國富乃至は産業、經濟状態の一面が窺知し得るのである。

以上の概念を腦裡において以下歐洲主要油脂需要七ヶ國について各種油料子實需要趨勢を大觀して見やう。

(イ) 獨逸

大戰前の獨逸に於ては亞麻仁の搾油工業が最も殷盛を極め、繼いで椰子實、棕櫚核油工業であつた。大豆油工業も英國、丁抹を凌ぎ、ベンチンによる抽出法を採用してゐた。然して油坊工業の中心地は、海外よりの原料輸入を仰ぐ工業國の常の如く、海港ハンブルグ市を中心にして發展して來たものである。

然るに歐洲大戰により、獨逸の諸工業は殆んど壊滅乃至は休操状態に立入るの餘儀なきに至つたが、この國に於ける油脂の不足は他の國々に比し極めて重要度を異にせるを以て、他工業より一步を先んじて恢復を示したの

である。尙この國の背後には、オーストリア・ルーマニア・チエツコスロヴァキヤ・ポーランド等の油脂入超國を控へて居るのであり、その採算如何によつては自國の需要量のみならず、更に輸出品としての活路さへ見出されるのである。

では獨逸は最近幾何の油料子實を需要して居るか。以下ロンドンのフランク・フェア社年報により、その國の入超額を以て、その年度に於ける當該國の需要數量と看做し、論を進めることとする。

先づ前例に倣ひ、最近五ヶ年間の需要量に就いて觀ると、前述せる如く、獨逸は歐洲一の油料子實需要國である。それは同時に世界に於ける需要の最高を示すものであることも述べた。従つて本項に於いてはその需要が如何なる子實によつて構成されて居るかについて論述すれば足りるのである。

この國の輸入する各種油料子實の構成を一覽して吾人の瞳に焦付くのは我滿洲大豆が如何にこの國の油料子實界に重きをなしてゐるかといふ點である。即ち大豆は昭和八年には百十七萬噸を數へ、全需要高の五十一%を占め、落花生・棕櫚核・亞麻仁・椰子實等の競争油料子實を遙か脚下に眺め、斷然他品の追隨を許さぬものがあつた。然しなから後述する如く、供給源たる滿洲國に於ける大豆の大減收と、この國の貿易政策の壓迫とに相挾撃せられ、爾來逐年大中の減少を示し、昭和十一年には早くも四十八萬噸と半數以下に急減し、その占むるパーセントイデも五十一%から二十九%にまで低落したのである。

この大豆の減退によつて浮び上つたのが、棕櫚核、椰子實であり、前者は昭和八年の十一%から、同十一年に



は二十三%に、後者亦同期間に五%から十三%にと目覺しき飛躍を示し、當國大豆の牙城に肉迫し、あはや永年の王座も終に、宿將棕櫚核の代位する所とならんかの急配さへ觀取されたのである。

然しながら翌年十二年には滿洲大豆の増産と、兩國間の政治的、經濟的親密化により、再び頽勢を盛返し、全需要額の三十六%を占むるに至り、棕櫚核も大豆の挽回により、相對的には、前年の二十三%から十九%にと四%方の激減を示したのである。

以上の推移を前五ヶ年平均について見ても明なる如く、この國油料子實の需要は全く、大豆によつてその四十%内外が獨占され、亞いで棕櫚核・落花生の夫々十六%であり、亞麻仁の十五%、椰子實の九%がその主たるものである。

獨乙に於ける油料子實需要割合表

(單位 趙)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數
椰子實	三三、一八七	五	三三、一〇〇	一〇	九三、九一五	七	二二〇、九三三	一三	二〇九、五五〇	一三	一七一、九五五	九
棕櫚核	二四八、二九	二	二七四、一九九	三	二四一、三九三	一八	三三四、二七四	三	三三三、七〇〇	一九	二九二、一五七	一六
胡麻	四、六八五	—	二、八六八	—	四、〇六七	—	一、七〇五	—	一六、五三七	—	五、九七三	—

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數	數 量	割 合 數
落花生	三五、六六七	一四	三九四、八九九	一八	一九〇、九七五	一四	三三三、八二九	一九	二八八、二四三	一七	三〇〇、七五	一六
菜種	三五、〇〇五	一	一七、一八六	—	四、二四九	—	五、六三四	—	三、〇九七	—	一一、〇三	—
亞麻仁	三五八、二九四	一六	三六、九五三	一四	二四七、三四五	一九	二八、九〇一	一三	一八〇、三五九	二	二六四、三三〇	一五
棉實	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆	一、一七〇、九五七	五二	九三、六七五	四一	五五、八六三	三九	四八四、〇八七	二九	六〇〇、八〇〇	三六	七三七、〇七六	四〇
其他	四八、六五五	二	六七、八八七	三	三七、〇三四	三	五三、二六七	三	四九、一一〇	三	五〇、九八八	三
合 計	二、二二二、六三三	100	二、三三三、八八八	100	一、三三三、八八八	100	一、三三三、八八八	100	一、三三三、八八八	100	一、三三三、八八八	100

次に各品種の需要指數に就て見ると、當國油料子實の大宗大豆はそのパーセンテージに於いて減退した如く、その指數に於てもそれ以上の激減を示し、昭和八年の一〇〇に對し九年には七八、十年には四四、十一年には四一と三年間に六十%内外の激減を記録したのである。

その後は漸次回復し昭和十二年には五一にまで挽回したが、依然滿洲建國當初から見れば半減の態である。だがこの國に於けるこれら子實の盛衰は他の六ヶ國のそれに比し極めて際立つて居り、大豆の半減の外に、亞麻仁も亦半減し、殊に菜種の如きは九十%近くの減退を示したに反し、棕櫚核・椰子實の如きは共に堅實な増進を示してゐるが、胡麻の如きは浮沈極まりなく、昭和十一年の三六から翌年十二年には三五二とその間實に十倍近い、躍増を示してゐるのである。



英國に於ける油料子實需要割合表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合
椰子	105,084	8	97,519	7	123,384	8	125,942	8	80,673	5	106,330	7
棕 櫚 核	130,103	10	135,833	10	161,641	10	147,345	10	153,333	9	145,431	10
胡 麻	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
落 花 生	13,663	1	14,467	1	14,365	1	18,064	1	27,926	1	17,044	1
菜 種	21,156	2	20,805	1	30,871	2	23,274	2	23,755	1	23,977	2
亞 麻 仁	24,873	2	18,035	1	26,134	2	27,139	2	29,035	2	25,321	2
棉 實	45,334	3	54,633	4	65,758	4	62,779	4	62,923	4	56,633	4
大 豆	160,117	13	180,038	13	161,532	10	183,470	13	100,544	6	171,233	12
其 他	43,918	3	45,461	3	46,074	3	43,679	3	43,759	3	44,378	3
合 計	1,202,044	100	1,211,768	100	1,208,068	100	1,249,621	100	1,249,366	100	1,479,564	100

再言するまでもなく英國に於て減退して居るのは大豆丈である。然らば之は大豆の需要減退に起因するものであらうか。巷間傳へられる大豆市價の割高によるものであらうか。吾人はこれを否定するものである。何故ならば獨逸を例外として他の歐洲諸國は例外なしに大豆の需要を増大して居るではないか。

この點に關しては後述に譲り、吾人の強調したいのは最近兩三年來惹起された民主主義國家團と所謂國家主義的國家團との對立が齎らす經濟的對立である。言ふまでもなく英佛露ブロックに對する日滿伊の聯繫であり、反面持てる國と持たざる國、現状維持國と現状打破國といふ世界の二大潮流による色分である。

かゝる政治狀態の下にあつて、且つ自國の範圍乃至は準範圍内に需要し切れざる油脂資源を保有する英國が何を好んで、最も増悪すべき極言すれば間接的戰端を切りつゝある日本の經濟圏内たる滿洲の大豆を買はう筈はないではないか。

即ち昭和十一年來の英國に於ける大豆需要の減退は、大豆それ自體に包する價格の割高もあらうがそれは昨今に於てはむしろ技業に屬し、根本的要因はこれを兩國間の政治的關聯に於いて見出すを至當とするのではなからうか。

かゝる政情下にあつてこれと反對の歸結を見出さうとすることそれ自體既に世情の推移に對する認識を缺くものではなからうか。

これを要するに領土内の子實の一齊凶作、政治的親善その他凡ゆる條件が最善の段階に到達し得ざる限り大豆の英國向増進が期待されうる理由はなく、現下に於ける澁滯傾向こそ刻下の政狀を端的に物語つてゐるものではないからうか。

前記の如く總需要量の増大、就中他子實の一齊増勢を見つゝあるに於てはこの點なほさらの感が深いのである。

英國に於ける油料子實需要消長表  
右指數

品 種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	103	106	100	107	101
棕 櫚 核	100	104	104	103	107	103
胡 麻	100	101	101	101	107	100
落 花 生	100	106	106	104	107	100
菜 種	100	109	106	100	102	100
亞 麻 仁	100	107	105	102	106	100
棉 實	100	109	103	103	107	100
大 豆	100	103	101	101	100	100
其 他	100	104	105	107	100	100
合 計	100	101	103	103	103	100

(ハ) 丁 抹

丁抹は獨逸に次ぐ大豆消費國である。

元來丁抹は著名なる牛酪生産國にして、食料としての植物油は殆んど必要とせられず、油脂は主として石鹼工業油として重視せられて居るのである。國內油坊としては資隆洋行の所有に係る大製油工場あり主として大豆油を製造し、自國の工業方面の需要に應ずると共に北瑞典・南獨逸等に輸出販路を有してゐるのである。

右の如くこの國は牛酪國である爲、勢ひ家畜の濃厚飼料に不足する點から、各種油料子實中最も出粕度の高い大豆が最も要請されるのであり、又石鹼工業原料確保の見地から、同工業に最適品たる椰子實の輸入が之に亞いで居るのである。

今この間の事情を過去五ヶ年の計數に就いて見ると、大豆は年二十三萬噸乃至二十七萬噸を需要され、全輸入額の五十五乃至六十三%を占め、前述の國內産業状態を如實に物語つて居るのである。

椰子實は生産の項に於て述べた如き事情から、依然根強い需要があり、全體の十七%乃至二十%を占めて居り、續いて落花生・棕櫚核・亞麻仁の順序である。

丁抹に於ける油料子實需要割合表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合	數 量	割 合
椰 子 實	7,104	19	7,610	18	8,183	18	8,753	20	7,293	17	6,988	16

品種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	105	113	121	103	109
棕櫚核	100	105	113	121	103	109
胡麻	100	105	113	121	103	109
落花生	100	105	113	121	103	109
亞麻	100	105	113	121	103	109
菜種	100	105	113	121	103	109
亞麻仁	100	105	113	121	103	109
棉實	100	105	113	121	103	109
大豆	100	105	113	121	103	109
其他	100	105	113	121	103	109
合計	100	105	113	121	103	109

ではこの國に於ける各種子實の需要の消長は如何であるか。その需要指數について見れば、總需要量が堅實なる増進を持続してゐる點から見て、この國の油料子實需要が確固たる基礎の上に立つ、實需によるものであることが了解せられるのである。従つて各種子實も亦概して安定せる需要を示して居り、前五ヶ年平均に於ては昭和八年に比し棉實の四十五%を筆頭に、棕櫚核の四十二%之につき、以下胡麻の十二%、椰子實の九%、亞麻仁の八%、大豆の七%落花生の七%と例外なしに増大して居るのである。

然しながら、斯る指數に於て常に矛盾を痛感するのはそれぞれその占むるウェイトが異なるを以つて、大豆の七%増と棉實の四十五%増の間には數量的には格段の差異あることである。それ故あながちこの指數のみを以つて各品の實際の消長を論斷することはいさゝか當を得ない憾がある。がこれも亦大勢を認識する上にはじむを得ぬ現象である。

丁抹にける需要指數

品種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	105	113	121	103	109
棕櫚核	100	105	113	121	103	109
胡麻	100	105	113	121	103	109
落花生	100	105	113	121	103	109
亞麻	100	105	113	121	103	109
菜種	100	105	113	121	103	109
亞麻仁	100	105	113	121	103	109
棉實	100	105	113	121	103	109
大豆	100	105	113	121	103	109
其他	100	105	113	121	103	109
合計	100	105	113	121	103	109

(二) 佛 蘭 西

獨逸、英國に次ぐ油脂工業國は實に佛蘭西である。

佛蘭西は獨逸と共に食料油脂の缺乏にあへいで居る。而してこの國に於ける牧畜業は近隣の他の國々に比べ比較的不振を辿つて居る状態である。それ故佛蘭西に於ては食用植物性油脂として極めて品質良好なる落花生が搾油の中樞をなしてゐるのである。その計數について見ると、落花生は年により多少の増減はあるが、大體年々八十萬噸近く需要せられ、その全需要額に對する割合も六十%近くに及んで居る。

これについては工業油、就中この國の名産の一たる化粧石鹼の原料たる椰子實、及び美術工藝印刷に缺くべからざる亞麻仁が需要せられ、亞麻仁の全需要額に對する比率は十八%乃至二十一%に達し、椰子實亦十%内外の需要を有して居るのである。その他棕櫚核の五%、大豆の二%、胡麻等の少量が消費されてゐるが、この國に於ける油脂界の大勢は食料油たる落花生の左右する所であり、大豆・棉實等粕を目的とする子實の需要に全く論外の地位に置かれてゐる現状である。

佛國に於ける油料子實需要割合表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數
椰子實	一九、六〇四	一五	一六、九七九	一五	一四、八六六	三	一四、四三八	八	一三、六二一	九	一六、九六一	二
棕 櫚 核	一〇、九五〇	一	二八、一八三	二	七六、八九九	六	二二、一九七	九	七〇、二〇七	五	六二、四六五	五
胡 麻	五、七〇七	一	八〇五	一	二、一九七	一	一、八五九	一	三、二五	一	一、二三	〇
落 花 生	七五、〇六七	五九	七八、八二六	五九	六三、三三三	五五	七九、〇六六	七	八九、三二八	七	七八、三五六	五九
菜 種	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
亞 麻 仁	二六三、九九五	二〇	二七、四五四	一八	二六、三三二	三	二八〇、一八六	三〇	二七、九三三	一	二六、七五八	一九
棉 實	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
大 豆	一五、三八五	一	一七、七三四	一	二四、〇四〇	二	二七、八六四	三	二九、六七七	二	三三、八八七	二
其 他	六三、五九	四	五九、四三	五	五三、六〇七	四	五三、九五三	四	四六、八八	三	五四、八六七	四
合 計	一、三六、〇三三	100	一、四〇、〇三三	100	一、四一、六六二	100	一、三九、一三三	100	一、四一、三九九	100	一、三六、三六六	100

次に需要指數について見ると、最も飛躍的に増進してゐるのは棕櫚核である。棕櫚核の躍増は目覺しく、昭和八年を一〇〇とする指數に於て同九年には二五七、同十年には七〇二、同十一年には一躍一、一〇六と僅々三年

間に十一倍餘の驚異的記録を樹立したのであるが、同十二年には忽ち大激落を示し六四〇にまで低下した。

吾人は茲にも最近に於ける世界貿易政策の固執をまさまさと見せつけられるのである。それは棕櫚核と、この國に於て落花生に亞ぐ需要を有する椰子實との品質、用途の類似によるものである。由來椰子實は佛蘭西領に生産少なきに反し、棕櫚核は前掲の如く、佛領アフリカに多量に生産され、且つその生産が年々激増して居る結果、從來多量に需要して來た椰子實に代ふるに棕櫚核を以てしたのである。昭和十一年の激増も、十二年の激増もその領土内に於ける生産の推移と對照して見て明かである。換言すれば棕櫚核の激増は自國內物資の活用により、對外期待物資の節減を企圖する、最近のブロック貿易政策の露呈に他ならぬ。従つて椰子實の運命は懸つて、佛領アフリカに於ける棕櫚核の生産如何に左右されるものである。

主要原料たる落花生は一張一弛、國民の嗜好油脂として、又各種工業原料として比較的底堅い推移を見せて居る。亞麻仁亦現状維持に過ぎざる状態である。

次に我國産大豆について見ると、棕櫚核の激増について否、棕櫚核より以上の堅實な増加を示してゐる。即ち昭和八年の一〇〇より同九年には一一三となり、同十年には更に一五六、同十一年には一八一となり、同十二年には終に一九四と四、五年間に二倍近い増加を示し、而もその間一年として停滯乃至は減少の事實が認められな

いのである。これは如何なる原因によるか。總需要は小浮動を続け依然増減なきに反し、割高を高唱され、而も政治的に反

對の立場に在る圓ブロック内の大豆を需要するのであるか。

茲にも大豆輸出對策の検討せられるに先立つて解明せらるべき一テーマが存してゐるのである。吾人の見る所によるとこれは最近の世界政情不安による。廣義國防の見地から、國內に必須食料品たる、家畜家禽増殖の要請が次第に喧傳されるに至りたる爲、その最適飼料たる豆粕に對する關心が喚起された結果に他ならぬと思ふのである。茲にも競争油料子實間の價格の如何に對する根強い抗議が見出されるのである。

その需要の如何により、等しく競争製油原料とは云ひながら、そこには他品を以て代替し得ざる嚴たる利用方途が存してゐるのである。

然らざれば對日感情の極度に悪化してゐるこの國に於て、如何にして他品に比し、極めて割高なる本品が年々増大しつつある理由を説明し得ようか。

佛國に於ける油料子實需要消長表

品種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	94	73	6	69	79
棕櫚核	100	257	703	1,104	640	562
胡麻	100	153	44	350	40	322

品	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	四三、七七一	六二、二八八	六七、三六六	七六、〇五九	四六、三七九	八八、八五七
棕櫚核	二九、〇六〇	二二、〇五五	三七、七六六	二五、二三四	三四、二九九	二九、四五三
胡麻	二、八七八	二、一二一	三、二六二	二、四八七	二七、六〇九	九、六六七
落花生種	一〇八、三七一	一七五、二八一	一四二、一九一	一七七、七四二	一七、六六六	一四四、三三四
菜種	八、六五九	七、三九六	七、六六〇	九、四九三	四、八〇五	七、六〇三
亞麻仁	二九、三五六	三八、七三九	三九、八五三	三五、七七三	三四、〇一八	三三〇、〇八三
棉實	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—

(ホ) 和 蘭

和蘭に於ける油脂工業界の王座は亞麻仁の占める所である。云ふまでもなく、亞麻仁は亞爾然丁の特産物にして、全世界總生産額の過半数を占めてゐることは前述の通りである。

その亞爾然丁と密接不可離の關係にあるのが、英國、米國について和蘭である。和蘭はこの國の亞麻仁を輸入し、自國の工業用品を販出してゐるのである。

持たざる國々は何等かの手段によつて自國の權益を擴張せねばならぬ。而してその政治的、經濟的關聯の度合如何は懸つて、相手國に對する自國の利益の多寡によるのであることは云ふまでもない。

亞爾然丁と和蘭はこの點に於いて相投合してゐるのである。従つて和蘭に於ける亞麻仁の需要高は大體三十萬

噸以上上り、全需要額中に占むる割合も最低四十三%、多い時は五十五%にも及んで居るのである。次いで落花生の二十%、大豆の十三、四%であり、これらは食料乃至工業原料として利用されてゐるのである。尙ほ亞麻仁と共に工業油として需要されて居るのは椰子實・棕櫚核であり、この兩者合計大體十二、三%である。

和蘭に於ける油料子實需要割合表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合	數	割合
椰子實	四三、七七一	八	六二、二八八	八	六七、三六六	九	七六、〇五九	二二	四六、三七九	六	八八、八五七	
棕櫚核	二九、〇六〇	五	二二、〇五五	三	三七、七六六	五	二五、二三四	四	三四、二九九	五	二九、四五三	
胡麻	二、八七八	一	二、一二一	—	三、二六二	—	二、四八七	二	二七、六〇九	四	九、六六七	
落花生種	一〇八、三七一	二〇	一七五、二八一	二四	一四二、一九一	一九	一七七、七四二	二七	一七、六六六	二五	一四四、三三四	
菜種	八、六五九	三	七、三九六	一	七、六六〇	一	九、四九三	二	四、八〇五	一	七、六〇三	
亞麻仁	二九、三五六	五	三八、七三九	四	三九、八五三	五	三五、七七三	四	三四、〇一八	四	三三〇、〇八三	
棉實	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	



大豆	其他	合計
元、四四七	四、二四一	五八、三三三
二〇、五八八	一九、四七九	七〇、〇六七
一八	三	二一
九、一五二	七、八二二	一七、〇七四
二	一	三
九六、〇三七	五、一七五	一〇一、二五二
一四	一	一五
九、七三二	七、四四七	一七、一七九
一四	一	一五
八八、九三三	八、八〇六	九七、七三九
一三	一	一四

この國に於ける油料子實の實要は七ヶ國中最も堅實な歩調を辿り總需要指數は一〇〇・一三九・一三九・一二七・一三五と極めて安定してゐるのである。就中最も着々他品の領域に侵出して居るのは胡麻及び我滿洲大豆である。

胡麻は數量的に餘り重要性はないが、その増進のテンポは目覺しく、昭和八年を基準として見ると十二年度には實に九・六倍の激増となり、大豆亦二・五倍餘の増加を示して居るのである。

次いで増加して居るの椰子實・落花生・亞麻仁であり夫々前五ヶ年平均は昭和八年度より三十八%・三十三%・十三%の増加を示して居る。この國に於て減退してゐるのは、茶種だけで右と同様比較に於て十二%の減少である。

和蘭に於ける油料子實需要消長表

品種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	143	137	139	108	126
桐核	100	33	100	87	83	102
胡麻	100	33	133	144	99	136
落花生	100	133	133	109	149	133
亞麻仁	100	85	103	109	149	133
菜種	100	109	136	110	107	123
亞麻	100	1	1	1	1	1
棉實	100	1	1	1	1	1
大豆	100	33	103	144	107	137
其他	100	44	100	126	122	134
合計	100	129	137	137	126	134

(ハ) 瑞典

丁抹と共に牛酪國なるを以て、輸入植物性油並に自國産製油は食料油脂として利用せられるものに非ず、工業原料を目的として輸入又は製造せられてゐるのである。然しその工業化とて他國のそれはに比し極めて遅々たる



瑞典に於ける油料子實需要消長表

品 種	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子實	100	89	143	151	141	133
棕 核	100	100	100	100	100	100
胡 麻	100	100	100	100	100	100
落 花 生	100	300	66	100	27	165
菜 種	100	100	100	100	100	100
亞 麻 仁	100	100	28	100	100	100
棉 實	100	100	100	100	100	100
大 豆	100	162	151	236	203	175
其 他	100	196	369	744	33	36
合 計	100	166	33	183	183	100

(ト) 伊 太 利

伊太利は周知の如く比較的畜産に恵まれざる國である。従つて油脂類の需要に對し獸脂、獸肉を以て供するとは不可能である。そのため勢ひ食料油脂の不足を來し、植物油脂原料の需要を喚起するのである。

先づこの國に於て最も大なるパーセンテージを占めるのは、食料油の王者たる落花生である。落花生は1否この國に於いては各種とも共通ではあるが1年により實に驚くべき増減、浮沈を見るのであるが、前五ヶ年平均について見ると、總需要額の三十九%を占め、斷然他を壓し、ついで亞麻仁の二十三%、椰子實の十三%、胡麻の八%、菜種の五%、大豆の四%であり、我大豆は實に最下位にランクされて居るのである。而してこの大豆の地位は、この五ヶ年間を通じ、常に最下位にあるのである。

これは畢竟するにこの國の粕需要力の貧弱、延いては同國牧畜業の不振を物語るものである。それ故に、大豆・棉實の如き出粕率の高い子實は同國に於ては採算が困難となる譯である。それ故自國內に於てたと海外に於てたとをはず粕の處分方法の見出されざる限り、これら出粕率の高い子實はこの國には需要され得ないのである。

伊太利に於ける油料子實需要割合表

(單位 噸)

品 種	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
椰子實	39,043	16	51,556	24	49,903	18	30,999	17	33,874	6	39,055	13
棕 核	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

品	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子	100	133	126	139	126	128
棕櫚核	100	162	165	177	176	177
胡麻	100	232	249	277	269	244
落花生	100	33	49	55	69	62
菜種	100	66	77	100	133	121
亞麻仁	100	100	100	100	100	100
棉實	100	100	100	100	100	100
大豆	100	38	26	23	26	27
其他	100	100	100	100	100	100
合計	100	276	276	276	276	276

次にこれら各品の角逐について見てもその需要には全く安定性なく、その年の各種事情に左右され、一外に論斷する譯には行かぬ。それ故五ヶ年平均について検討して見ると、これら子實中最も増加顯著なるは大豆であり、大豆は昭和八年に比し九十四%増と殆んど倍増して居る状態である。それに次いで増勢を辿つたのは胡麻の七十%、落花生の四十一%、菜種の三十八%各増であり、椰子實は保合、亞麻仁のみが八%の減退を示して居る。従つて右の傾向より見る時は大豆輸出の前途もその粕の輸出採算如何により、又國內資源の確保といふ點に重心をおく政策のとられてゐる今日家畜、家禽の増殖対策は必至である點より見て相當の期待が持たれる譯であるがこれに關する詳細は後述に譲る。

伊太利に於ける油料子實需要消長表

品	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	五ヶ年平均
椰子	100	133	126	139	126	128
棕櫚核	100	162	165	177	176	177
胡麻	100	232	249	277	269	244
落花生	100	33	49	55	69	62
菜種	100	66	77	100	133	121
亞麻仁	100	100	100	100	100	100
棉實	100	100	100	100	100	100
大豆	100	38	26	23	26	27
其他	100	100	100	100	100	100
合計	100	276	276	276	276	276

3. 各種油料子實の國別依別度

以上に於て歐洲に於ける主要油料子實需要國に於ける各種子實需要消長の検討を終つた譯である。では各子實は如何なる國々に依存して居るか。重複のきらひはあるが、これら子實の需要状態をより一層明確

ならしめんがため敢て本項を物するのである。

(イ) 落花生

生産及び前項に於て一言せる如く、落花生油は食用油として風味佳良にして最も人間の嗜好に適するものである。

落花生の主要需要國は佛蘭西であり、年消費高は八十萬噸近くに達し前記七ヶ國に於ける全需要額の四十六%乃至五十五%を占め、亞いで獨逸である、獨逸は年三十萬噸近い需要額を示して居る。言ふまでもなく落花生油と大豆油はその性状は極めて類似して居るを以て、兩國間の政治的經濟的提携如何によつては、獨逸に於けるこの落花生需要量の相當部分を、我滿洲大豆を以て代位せしめ得る餘地が存して居るのではなからうか。

最近獨逸と同様の需要量を示して居るのが英國であり、現下の國際經濟情勢より見て、英國の本品需要量は益々増大すべく豫想されるのである。

落花生需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	一三三、六六三	九	一四四、四六七	七	一五五、三五五	二	一八八、〇六四	一三	二七四、九六六	一五	一七三、〇九四	二

佛獨丁和伊太瑞合	佛		獨		丁		和		伊		太		瑞		合	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
佛	七九五、〇六七	五四	三九四、八五九	二二	一九〇、九七九	一五	七九〇、六四六	五三	八九三、二八	四七	七八八、二五六	一九	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇
獨	三三、六六七	二	三〇、三三六	二	三六、一七五	三	三三、八二九	二	三六、六三三	二	三三、六八一	二	三、〇〇七、七五	〇	三、〇〇七、七五	一九
丁	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二	二五、三三三	二
和	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七	一〇八、七七一	七
伊	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六	八二、四三三	六
太	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一	一、三九九	一
瑞	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇	一、〇〇一、七九四	〇
合	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇	一、〇〇一、七九四	一〇〇

(ロ) 亞麻仁

昭和八、九年頃に於ては獨逸の需要が最も多く、年需三十萬噸以上に達し全需要額の二十七、八%を占めて居たが、最近は二十萬噸内外に減少し、その割合も僅かに十五%にまで激減し、和蘭・英國・佛蘭西等の諸國に押されて居る。即ち昭和十二年度の実績について見ると、最も多いのは和蘭であり、獨逸の需要最盛時たりし昭和八、九年時代のそれに匹敵し、その全需要額中に占めるパーセンテージも二十六%に達し、亞いで英國の二十四%、佛蘭西の二十二%であり、獨逸はこれに次ぎ十五%を占めるに過ぎない。

亞麻仁需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	249,872	19	187,035	16	261,434	20	277,139	23	290,635	24	253,311	20
佛國	263,995	20	237,454	20	258,231	20	280,186	23	273,933	23	262,758	21
獨逸	358,294	28	366,953	27	247,445	19	281,901	23	180,359	15	264,370	21
丁抹	19,358	1	16,298	1	25,536	2	20,356	2	22,735	2	20,854	2
和蘭	293,356	23	381,739	27	398,530	31	355,773	27	324,018	26	330,083	27
伊太利	75,035	6	64,544	6	72,120	5	54,160	4	80,861	7	69,343	6
瑞典	35,152	3	38,533	3	41,469	3	36,635	3	53,880	4	40,934	3
合計	1,290,221	100	1,179,555	100	1,306,655	100	1,313,189	100	1,315,391	100	1,211,566	100

(ハ) 棕 櫚 核

棕櫚核の需要に於ては獨逸は斷然他國を壓し、最近は年三、四十萬噸の入超高を記録し、全體の五十二、三%を占て居る。

獨逸に次では英國であり、茲兩年の獨逸の躍増により、その相對的地位は昭和八、九年頃の二九乃至三十%か

ら二十一乃至二十五%にまで低下したが、その需要額は十五萬噸内外に達し、依然堅固なる需要の存在して居ることを立證して居る。

獨逸・英國については佛蘭西・和蘭・丁抹であるが、これら兩國は僅々三萬噸内外の需要力を有するに過ぎず、棕櫚核の消費國は、獨逸・英國であると云つても過言ではない様である。

棕櫚核需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	110,103	30	135,833	29	161,642	29	147,455	22	152,233	25	145,431	26
佛國	10,950	3	28,183	6	76,889	14	111,197	17	70,107	12	61,465	11
獨逸	248,219	66	274,199	68	241,393	43	374,274	55	332,700	53	323,157	55
丁抹	20,890	5	15,460	3	41,240	7	34,696	5	36,147	6	29,667	5
和蘭	29,060	7	21,065	4	37,766	7	25,244	4	34,191	6	29,453	6
伊太利	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
瑞典	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	368,113	100	394,765	100	568,659	100	701,766	100	615,355	100	561,135	100

(三) 椰子 實

椰子實の依存して居る國も、棕櫚核同様獨逸である。獨逸は、最近二年間は年二十萬噸を超え、その占める割合も三十%數に及び、ついで英國・佛蘭西であり、この三國にて既に七十%近くを需要して居るのである。

以下の四ヶ國は年によ多少の増減はあるが、大體五萬噸以下の需要量を有せるに過ぎざる状態である。

椰子實需要國別割合表

(單位 噸)

國 別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數	數量	割合數
英 國	105,084	一八	97,599	一四	133,384	二二	135,941	一九	80,673	一三	106,300	一七
佛 國	199,604	三三	186,999	二六	146,186	二五	144,428	一七	137,621	二二	156,961	二五
獨 逸	131,187	二〇	135,300	二二	92,925	一六	110,933	三二	109,550	三三	117,955	二七
丁 抹	73,104	一二	76,130	一一	81,822	一四	87,553	一三	74,293	一二	78,398	一三
和 蘭	43,721	七	61,318	九	67,336	一一	76,591	一一	46,379	八	58,857	九
伊 太	59,033	七	51,526	七	49,903	九	30,939	五	33,874	四	39,055	六
瑞 典	18,628	三	16,482	二	26,454	四	28,833	四	33,394	五	24,555	四
合 計	586,110	100	515,022	100	566,900	100	637,109	100	607,711	100	636,101	100

(ホ) 棉 實

歐洲に於ける棉實の需要は全く、英國一國に獨占されて居る形であり、最近の需要額は年六十數萬噸に對し、その七ヶ國に於ける全油料子實需要高の十%近くにさへ當つて居るのである。

これは近年自國領たる印度に於ける棉實産額が二百萬噸を突破して居る點より考へてもさこそとうなづける譯である。

本表によつて知り得ることは棉實が、その生産大なるに拘らず、餘り需要がないことである。従つて棉實の需要に關する限り、英米兩國が獨占して居るのであり、その他の國々にとつては棉實の生産及價格關係は直接には何等の影響がない譯である。

印度・埃及に産する棉實はその母國たる英國に於て需要されるのが原則であり、例へこの需給關係に不均衡が齎されたとしてもそれはこの二つの持てる國々間の事に屬し、一應はその他の國々から乖離してゐる譯である。勿論この棉實の豊凶とて人氣的には他の競争品市場に陰陽の影を投ずることのあり得ることは云ふまでもな

5。

棉實需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	四六五、三四	九九	五五四、六三	九八	六六五、七八	一〇〇	六二一、七九	九九	六六三、九三	九九	五六六、〇六	九九
佛國												
獨逸												
丁抹	三、七九	一	九、五二	二	一、五八	〇	七、〇三	一	五、〇九	一	五、五三	一
和蘭												
伊太利												
瑞典												
合計	四六九、〇三	一〇〇	五五四、一三	一〇〇	六七三、三六	一〇〇	六九二、八二	一〇〇	六七三、九二	一〇〇	五七二、五九	一〇〇

(ハ) 茶 種

本品の需要亦その生産關係より見て英國に多いことは想像せられる。英國に亞いでは伊太利である。然しながら本品はその全需要額に於てさへ僅々五、六萬噸に過ぎず、その消長が油料子實界の動向に反映するには餘りに量的に薄弱である。が總需要量の寡少なる國、例へば伊太利の如き國の需要趨勢から論ずる時はあながち無視し得ざる場合もあり得るのである。従つて一應の検討は必要とせられるのである。

茶種需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	三、二五六	三三	三〇、八〇五	三九	三〇、八七一	四五	三三、二七四	四三	三三、七三五	四五	三三、九六七	四二
佛國												
獨逸	二五、〇〇五	元	一七、一八六	三三	四、三四九	六	五、六四	二	三、〇九七	六	一一、〇三三	一九
丁抹												
和蘭	八、六九九	一三	七、三六六	一四	七、六六	二	九、四九三	八	四、八〇五	九	七、六〇三	二二
伊太利	二、三三四	一七	七、〇九六	一四	二四、六六六	三五	一四、七三三	一八	三〇、七五五	四〇	二五、七〇	三七
瑞典												
合計	六六、一七四	一〇〇	三三、四一四	一〇〇	六七、四六六	一〇〇	五三、一三三	一〇〇	三三、三六二	一〇〇	五三、三三三	一〇〇

(ト) 胡 麻

茶種より一層需要力少く、過去五ヶ年間の需要実績について見ても、その間の最高記録たる、昭和十二年度に於てさへも八萬五千噸に過ぎず、五ヶ年平均需要高は僅に四萬八千噸に過ぎない。本品に於ける伊太利の地歩は絶對的である。即ち伊太利五ヶ年平均に於て二萬三千噸を占め、全需要額の四十



七%と殆んど半數を占めてゐるのである。  
 斯く伊太利が前記茶種・胡麻等含油率の高い子實を他の國々に比し極めて多量に搾油するのは同國の國內事情によるものであることは前述の如くである。

胡麻需要國別割合表

(單位 噸)

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	532	100	805	100	2,197	100	1,859	100	322	100	1,133	100
佛國	4,645	100	2,868	100	4,077	100	1,705	100	1,657	100	5,973	100
獨逸	8,153	100	9,163	100	9,124	100	6,953	100	3,126	100	9,006	100
丁抹	2,878	100	2,102	100	3,232	100	2,487	100	2,769	100	9,677	100
伊太利	1,557	100	2,829	100	3,843	100	4,430	100	2,920	100	3,967	100
瑞典	2,733	100	3,676	100	5,495	100	7,244	100	5,777	100	8,899	100
合計	22,733	100	25,766	100	36,495	100	37,244	100	45,777	100	64,899	100

前記油料子實の他、蓖麻子・麻實・向日葵種・蘇子等の少量が必要されるが、それらは生産高の僅少なる爲年

需僅に十八、九萬噸に過ぎぬ。

其他油料子實需要國別割合表

國別	昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		五ヶ年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
英國	43,918	100	45,461	100	46,074	100	43,679	100	43,759	100	44,374	100
佛國	62,519	100	59,433	100	33,607	100	35,953	100	46,818	100	54,867	100
獨逸	48,655	100	67,887	100	37,024	100	32,267	100	49,210	100	50,918	100
丁抹	4,124	100	2	100	13,818	100	8,533	100	5,956	100	5,644	100
伊太利	17,600	100	15,357	100	3,385	100	3,644	100	2,689	100	2,487	100
瑞典	33	100	656	100	1,236	100	2,494	100	74	100	1,093	100
合計	127,111	100	207,255	100	189,966	100	187,733	100	187,960	100	207,633	100

七、歐洲に於ける大豆の需要

以上に於て現在歐洲諸國に於て需要されてゐる主要油料子實に對する一應の検討は終つた譯である。従つてこれら子實の需給關係乃至は各需要國の産業經濟状態と子實の選擇といふ點についての一般的認識は得られたであ

らう。

然し乍ら吾人は勿論これら各子實それ自體の需給關係の究明を必要とするものでないことは云ふ迄もない。要は唯當國大豆との關聯に於てのみ必要とせられるのである。

歐洲に於ける大豆の需要は前述せる如く、當國建國直後たる昭和八、九年度に於ては百六十萬噸以上に達し全油料子實需要額の三割近くを占め歐洲油料子實界の王者として自他共に許し、その聲望を専らにしたのであるが、その後は漸次減退し、昭和十一年に至つては終に百七萬噸にまで減退して了つたが翌十二年からは再び漸増傾向に轉じたのである。

然らば何故大豆の需要が減退せねばならなかつたか。

この問題を進めるに當つて、吾人は先づ、この大豆の供給について一言せねばならぬ。即ち歐洲に於て需要されてゐる大豆は如何なる國に於て生産されるものであるかと云ふ點についてである。

由來大豆は東洋の特産物の一であり、その主要生産國は滿洲・支那・日本等であることは前述した如くである。

先づ滿洲に亞ぐ東洋の生産地たる日本・支那に於て果して輸出餘力があるか。これは縷々説明するまでもなく萬人周知の事であるから敢て説明するまでもない。支那に於ける生産高は五、六百萬噸と稱されて居るがそれはもとより支那のことであるから實際は如何程の收穫があるのか分明でない。が然し、國際農業統計年報に於てさ

へも支那とロシアはその合計數量から除外してある點より見ても、この國の統計に關する限り、ロシアのそれと同様でどこまで信を置いて良いのかわからぬのであるが、その貿易統計より見ても大豆はむしろ滿洲國よりの輸入を必要としてゐるのであり歐洲向輸出記録を發見することは不可能である。

日本も同様年々滿洲國より多量の輸入をして居るのであり、その輸入數量も年毎に増大してゐる傾向にさへあるのである。

これで東洋に於ける滿洲國以外の生産國についての輸出餘力についての検討は終つた。次にアメリカ合衆國であるが、この國の輸出もフランク・フェア社油脂年報による限り、昭和六、七年度に多少の輸出が見られたのみにして、それ以外には輸出記録はない。

茲で一應説明せねばならぬのは、米國は廣大な領土を有し、三百萬噸乃至四百萬噸の多きに達する棉實、五、六十萬噸に上る落花生、その他亞麻仁等世界に冠たる國內生産力を有しながら、尙ほ且つ供給不足を告げ年々多額の輸入を見てゐることである。従つて商社乃至は商政策上多少の歐洲向大豆輸出がなされたりとするも、それを度外視しても大勢を知る上に何等の誤謬を生ずる程の數量ではないのである。ルーマニヤ・ブルガリヤ亦同様である。

それ故歐洲に於て需要され、取引されつゝある大豆は凡てこれ當滿洲大豆と見て何等差支へないのである。即ち歐洲に於ける一般的大豆について述べることをそれ自體が當國大豆について述べることである。従つて歐洲

諸國に於ける大豆の消長の歴史を検討することはとりも直さず我滿洲大豆輸出の盛衰を物語るものである。では大豆需要の變遷について一瞥しよう。

先づ順序として當滿洲國建國前の事情を概観すると、昭和二年の九十四萬噸を最低として、年々大巾の激増を記録し昭和四年には終に百六十九萬噸を突破し、その後も略百三、四十萬噸近邊を堅持し、滿洲建國當初たる昭和七・八・九年には再び上伸し百六十餘萬噸臺を維持したのであるが、その後は急激に減退し、昭和十年には百十六萬噸、更に翌十一年には百七萬噸にまで減退したのである。

斯る大豆減退の要因は何處にあるか。

その減退事由を究明するに先立ち、大豆は歐洲の何れの國に於て需要されて居るか、換言すれば如何なる國々が滿洲大豆にその依存度を大にするかを解明することが必要である。

大豆需要といふ見地から見る時獨逸の地位が如何に重要であるかは周知の事實である。然し乍らその消長に關しては餘り検討されてゐない憾がある。

古くは昭和四年頃に於てさへ既に百萬噸を突破し、昭和二年より同六年に至る五ヶ年平均に就いて見てさへ、その需要量は八十七萬餘噸に及ぶ盛況であり、その全大豆需要額中に占める地位も群を抜き多い時は七十二、少い時に於てさへもなほ五十九%を占め、建國前五ヶ年平均に於ては六十四%を示して居たのである。

建國後に於ても直後たる昭和七、八年頃に於ては些したる減退も見られなかつたが、九年度よりは減退歩調

顯著となり、十年には五十一萬噸、十一年には更に四十八萬噸にと急減し、全需要額中に占める割合も、それに伴れて急低下し、四十四、五%を占めるに過ぎなくなりその絶體的地位も相對的地位も極度に低下したのである。

この大豆需要王國たる獨逸に於ける趨向と逆行したのが丁抹である。即ち由來丁抹は國別需要の項に於て概観せる如く全油料子實需要量中その六十%内外を大豆によつて獨占されて居る國柄である。それ故數量的にも獨逸に亞ぐ滿洲大豆の需要國である。その年需要額は建國前に於ては未だ、大豆製油の殘滓たる豆粕の認識淺かりしため、五ヶ年平均需要量は二十萬噸内外にして、全體に對する比重も十五%を占むるに過ぎなかつたが、茲兩三年は頗る需要増大し、全體の二十%以上を占むるに至つた。

獨逸、丁抹に亞いでは英國であり、その輸入額は十六萬噸以上に上り全體の十%乃至十四%を占めて居たが、茲兩三年は續述せる如き事情によつて漸減し、昭和十二年度に於ては十萬噸にまで減じ、その全需要額に對する割合も八%にまで低下した。

英國については瑞典の十二、三萬噸、十%内外であり、和蘭の十萬噸、八、九%、佛蘭西の三萬噸、二、三%伊太利の一萬噸、一%の伊太利の一萬噸、一%の順序である。

主要七ヶ國に於ける大豆需要割合表

國別	昭和二年		昭和三年		昭和四年		昭和五年		昭和六年		建國前五年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
獨逸	五六七,二六六	六	八四七,九〇〇	九	一,〇〇四,〇七二	六	八八八,九七三	七	一,〇二四,六三三	六	八七〇,三三七	高
伊太利	五七,六〇〇	六	六三,〇三九	五	八六,七三三	五	二,三八八	〇	四〇,三八八	三	五〇,〇三三	四
小計	六四〇,八六六	六六	九一〇,九三九	六四	一,一〇〇,八〇二	六六	八九一,三六一	七二	一,〇四五,九一〇	七二	九二〇,三六〇	六八
丁抹	一五五,二五〇	二七	二二一,三九五	一五	三三二,三三三	一四	一七三,一四四	一四	三三八,〇四三	一六	三〇一,一九一	二五
瑞典	六七,一六九	七	八八,九〇四	六	九八,五七四	六	四八,二六二	四	三二,三〇六	二	六六,八二三	五
和蘭	九,七六一	一	一七,九三三	一	四八,二五八	三	一八,八九〇	一	三三,一八三	二	二五,三九九	二
英國	八二,九四五	九	一九四,六六九	一三	二〇六,二七五	一三	一〇七,二七〇	九	一一,九六三	八	一四〇,六二六	一〇
佛國	一三三	〇	八,一五〇	一	一,七一九	〇	五五六	〇	一〇,八二四	一	四,二七四	〇
小計	三二五,二五七	三三	三九〇,八八一	二八	五九六,〇四九	二五	三六八,一三三	二六	四四二,〇一八	二九	四八,九〇三	三三
總計	九二〇,〇三三	一〇〇	一,三〇一,八二〇	一〇〇	一,六九六,八五二	一〇〇	一,二五九,四八三	一〇〇	一,四九七,九二八	一〇〇	一,四一九,二六三	一〇〇

其 一

其 二

國別	昭和七年		昭和八年		昭和九年		昭和十年		昭和十一年		昭和十二年		建國後六年平均	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
獨逸	一,一八七,〇五一	七二	一,二七二,九七三	七〇	九一三,六七五	五五	五二五,八六三	四四	四八四,〇八七	四〇	六〇〇,八〇〇	五	八二二,〇七三	五八
伊太利	三二,五〇四	一	六,三三二	〇	一〇,一〇八	一	三,三三二	二	三,九三二	〇	八,五六四	一	一三,八〇〇	一
小計	一二〇八,五五五	七三	一二八,二六五	七〇	九二三,七八	五五	五二九,一九	四六	四八八,〇一八	四〇	六一九,三六四	五	八三五,八七三	五九
丁抹	三三八,八六四	二	三三四,六八三	二	二七三,七八五	一七	二六〇,〇一	二	二四四,三六	二	二四五,六三五	三	二四七,七三〇	一八
瑞典	九,〇七	〇	五七,八八三	〇	九三,四三三	一	一〇〇,八四五	九	一三六,四五七	一	一七,〇一九	一〇	八五,七四四	六
和蘭	四一,六八四	一	三九,二四四	二	一三〇,五八	六	七九,一三五	八	九六,〇三七	九	一一七,〇一九	一〇	八二,〇五八	六
英國	一六二,四八六	一〇	一六〇,〇七	一〇	一八〇,〇三八	一	一六二,五三	一四	一八三,四七六	八	一〇〇,五四	八	一四一,一七四	一〇
佛國	一四,五三	一	一五,三八五	一	一七,三七四	一	二四,〇四〇	二	二七,八六四	二	二九,七七	三	三二,四九三	一
小計	四四七,五三三	二七	四〇〇,三三三	三〇	六九三,九八八	二五	六五二,六六	五	五八二,一四	五	五九二,六六	四	五七二,一九	四
總計	一,六三五,〇八八	一〇〇	一,六八〇,五九三	一〇〇	一,六一七,六六三	一〇〇	一,一八八,五五二	一〇〇	一,一四一,二二二	一〇〇	一,二〇二,四六四	一〇〇	一,四〇〇,四五六	一〇〇

備考 1. 單位地、英、獨、佛は一英噸・〇一六〇五地として換算  
 2. 年度は曆年  
 3. フランクフェア年報による。

以上に於て大豆需要の國別ウエイトは一應解明せられた譯である。

次に前掲需要高を基準として國別消長表を作成すれば次の如く、建國前五ヶ年平均對建國後六ヶ年平均に於て建國後の方が減退してゐるのは實に獨逸、伊太利のみであり、協定國外の英・佛・和・瑞・丁の諸國に於ては減退の事實は見出せないのである。

茲に刻下の課題となれる輸出振興、就中大豆の第三國向輸出對策の一暗示が潜在してゐるのではあるまいか。建國後に於ける大豆輸出の停滯乃至減退が叫ばれ、その改善對策が前面に押出され、凡ゆる角度から、凡ゆる方面からの検討が必要とせられてゐる今日、吾人の最も注目すべき、最も審議を必要とするのは實にこの獨逸向輸出の減退事情であらねばならない。

今この間の事情を今少しく詳述すれば、最も増勢顯著なるのは佛蘭西であり、建國前五ヶ年平均を基準とする時、昭和七年には三・四倍、八年には三・六倍、九年には四・一倍、十年には五・六倍、十一年には六・五倍、十二年には七倍にと一年として例外なく、僅々六年間に七倍の驚異的激増を示してゐるのである。

佛蘭西については和蘭である。和蘭も前者と同様な比較に於て。昭和九年の例外的激増を除いては年々順調な躍進を示し、昭和十年の二倍、十一年の二・四倍、十二年の二・五倍にと着々たる需要又増大傾向が觀取されるのである。

瑞典亦十一年度に於ては稍滯滞を見せたが大勢は年々増加歩調を辿つて居り、減退した十二年度と雖もなほ一

・八倍を示して居るのである。丁抹も最近停滯傾向觀取されるとは云へ依然建國前の二十數%増を示して居る。これに反し吾人の最も期待し、その依存度の高い獨逸に於ては、建國當初たる昭和七、八年頃までは依然として需要量は増加傾向を持続し、建國前に比して一層の活潑さを示し、三十數%の増加を示し滿洲大豆の黄金時代示現に大なる役割を演じたのである。

然し乍ら昭和九年より漸次減退傾向に轉じ、十年には終に建國前五ヶ年平均の四十一%減となり、十一年には更に四十四%減と殆んど建國前の半數にまで減退したのである。これを建國當初たる昭和七年度と對比すれば實に二・五分之一減である。

次に伊太利について見ると、この國に於ては前述せる如く、各種子實共年により極めて浮沈甚しく、大豆亦この例にもれず浮沈を續けて來て居るが、建國後の趨勢を見ると全く減退の一途であり、建國前五ヶ年平均を基準一〇〇とする需要指數に於て、昭和七・九・十年度に於てはそれぞれ四〇―四五を示したが、昭和八年の如きは二三、昭和十一年に至つては減退傾向更に熾烈となり、終に九にまで低下し、翌十二年には稍恢復したりと雖も未だ尙ほ一七の低位に置かれて居り、建國後六ヶ年平均について見ても、僅に二八と、八十二%の激減である。

以上によつて吾人は第三國向大豆輸出の減退は偏に獨・伊、就中需要ウエイトに於て絶對的高次を占むる獨逸向減退の結果に他ならぬとの結論に到達したのである。

吾人が大豆輸出の減退と云ふのは常に建國前乃至直後の実績を基礎としてゐるのであることは云ふまでもない。そこに建國を契機とする何等かの減退要因が窺知されるのである。

それらの要因として挙げられるのは前述せる國內諸事情の外に世界的農業恐慌の影響による國內生産力の急減であるが、他國の増加に逆行してゐる點より見て、そこに獨逸のみに見られる獨自的減退事情が見出されねばならない。

大豆需要高國別消長表

國別	昭和						建國前 平均	昭和						建國後六 年平均
	二年	同三年	同四年	同五年	同六年	七年		同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年		
獨逸	六九	九七	二八	一〇三	一七	一六	一〇〇	二四	一五〇	五九	六	七〇	九	
伊太利	二五	二六	一七	一〇	一〇	四三	一〇〇	一三	四〇	四五	九	一七	一六	
小計	六九	九七	二八	一〇三	一七	一六	一〇〇	二四	一五〇	五九	六	七〇	九	
丁抹	七	一〇	一五	一三	一五	一三	一〇〇	一六	一三	二九	一三	一三	一〇	
瑞典	一〇二	一三	一四	一三	一八	一四	一〇〇	一七	一五	二二	一三	一三	一〇	
和蘭	元	七〇	一八	七	六	一四	一〇〇	一四	一七	二二	一三	一三	一〇	
英國	元	七〇	一八	七	六	一四	一〇〇	一四	一七	二二	一三	一三	一〇	
佛國	三	一九	一六	一三	一五	一三	一〇〇	一六	一三	二九	一三	一三	一〇	
小計	三	一九	一六	一三	一五	一三	一〇〇	一六	一三	二九	一三	一三	一〇	
總計	七三	一〇六	二二	一〇九	一〇	一〇	一〇〇	二〇	一三〇	七九	八九	一〇三	一〇	

(康徳六年三月 飯野清雄)

### 三、最近の麻袋市場を繞る諸問題

#### 内容

- 一、大連麻袋價格暴騰と其原因
- 二、暴騰對策の轉換
- 三、麻袋統制要項の解説

- 四、統制實施と其後の業界
- 五、特産輸出振興の立場から觀た麻袋問題
- 六、結 論

我が滿洲の特産たる大豆の輸出包装用としての麻袋、は既知の如く、康徳五年六月末、換物人氣に煽られて曾つて見ざる大暴騰を演じ、相場は天井知らずの状態を示現、爲に輸出を阻害するものと非難され、取引所は次第に互り最高價格、円値を設けたが、依然思惑筋の蠢動に行過高値は訂正されず、遂に十一月二十四日大連に於て産業部當局に依り、斯業の統制要綱が發表せられ、消極統制より積極政策へと一大轉換が行はれたのである。本稿は、大連麻袋市價暴騰の諸原因を説明し、次いで今回發表せられた統制要綱の解説をなし、其の後に於ける斯業に惹起するであらう諸問題を紹介したものである。

#### 一、大連麻袋價格暴騰と其原因

滿洲特産の包装用としての麻袋の重要性は、今更茲に述べる迄もない。麻袋價格の高低は、特産輸出價格に影響する處甚大であり、麻袋價格の低廉は望ましいことである。従來麻袋價格の變動大ならず、麻袋市價昂騰が、

最近の麻袋市場を繞る諸問題

特産輸出採算を阻害するものとして、問題視されたことは建國以來なかつた。然し乍ら本年六月初旬より麻袋市價は大正末年以來の天井知らずの相場を示した即ち次の如くである。

大連麻袋各月平均相場表

(一袋單位錢)

年 月	鐵筋新麻袋		備 考
	現 物	先 物	
昭和十二年 一月	三五・八	三五・〇	
二月	三三・九	三三・〇	
三月	三三・二	三三・九	
四月	三三・九	三四・六	
五月	三四・二	三四・九	
六月	三四・二	三四・七	
七月	三四・四	三四・七	
八月	三五・二	三五・五	
九月	三六・六	三六・五	
十月	四〇・一	三八・九	
十一月	四三・五	三九・一	

年 月	鐵筋新麻袋		備 考
	現 物	先 物	
昭和十三年 一月	三六・七	三七・六	
二月	四〇・三	三七・五	
三月	三九・五	三九・七	
四月	三五・〇	三六・〇	
五月	三八・八	三七・五	
六月	四八・四	四九・四	六月廿二日五十四錢の門値設定
七月	四九・七	五〇・〇	
八月	四八・九	四八・四	
九月	四八・三	四八・五	
十月	四六・〇	四四・六	十月六日最高價格設立 十月一日最高價格變更
十一月	四三・三	四三・九	
平均	(+)七・三	(+)七・一	
前年十二月對本 年十一月	高(+)	低(-)	

即ち前年十二月ヶ月の平均相場に比して、本年十一月ヶ月平均相場は現物七錢三厘、先物七錢一厘、共に二割三分方高値となつてゐる。

而して六月二十日には現物五十五錢恰度と云ふ高値を示現してゐるが六月廿二日五十四錢の門値設定があり、其の後幾分落付きたるやに見えたるが、依然相場は前年に比して十錢餘の高値にあり、十月六日續いて七錢下げの現物四十八錢と云ふ最高價格が決定せられ、上値は阻まれ、大體此の門値以下で越月し、十二月一日最高價格は再度引下げられ、現物四十五錢五厘、一月限四十三錢五厘と決定されたが、依然思惑筋の蠢動絶えず、五日には暗取引は門値を上廻り始めたが、市面低迷裡に七日以降最高値に顔合せし商内薄を續け、最近殆んど出来不申で市場閉散を示してゐる。これが最近の大連商品取引所の麻袋價格暴騰概貌である。

次にこの大連麻袋市價の暴騰、換言すれば全滿麻袋市價の昂騰を齎した諸々の原因を述ぶることとする。

- (1) 今春來爲替管理の存在を材料として思惑を行はんとする動向が相當強かつたこと。
- (2) 爲替管理局は、市價が煽られるのを極力回避せんことを期し、許可は大體順調裡に行はれたが、手續上多少遅延した事實が、思惑の中心材料とされたこと。
- (3) 大連麻袋市場の思惑が、素人筋の出動にまで發展し、相當大規模な投機となつたこと。
- (4) 大連商品取引所に於て、綿糸布は先般の日本内地の圓ブロック内輸出禁止に遇ひ投機性を失つた爲め、投機對象が麻袋のみとなつた結果、投機筋の中心となつたこと。(大連商品取引所は、綿糸布・麻袋・人絹を上場す)

等の理由が今回の大きな暴騰の原因となつてゐる。然し乍ら數量的には輸入數量は次表の如く、昨特産年度の夫れに比し、本特産年度に於ては二千百萬枚以上の輸入増となつており、この事實よりすれば此の昂騰は品不足による昂騰ではなく、單に輸入許可が多少遅延したことを材料とし思惑が行はれたに因るものは明かである。

大連麻袋輸入數量比較表

(松本商店調による) (單位百枚)

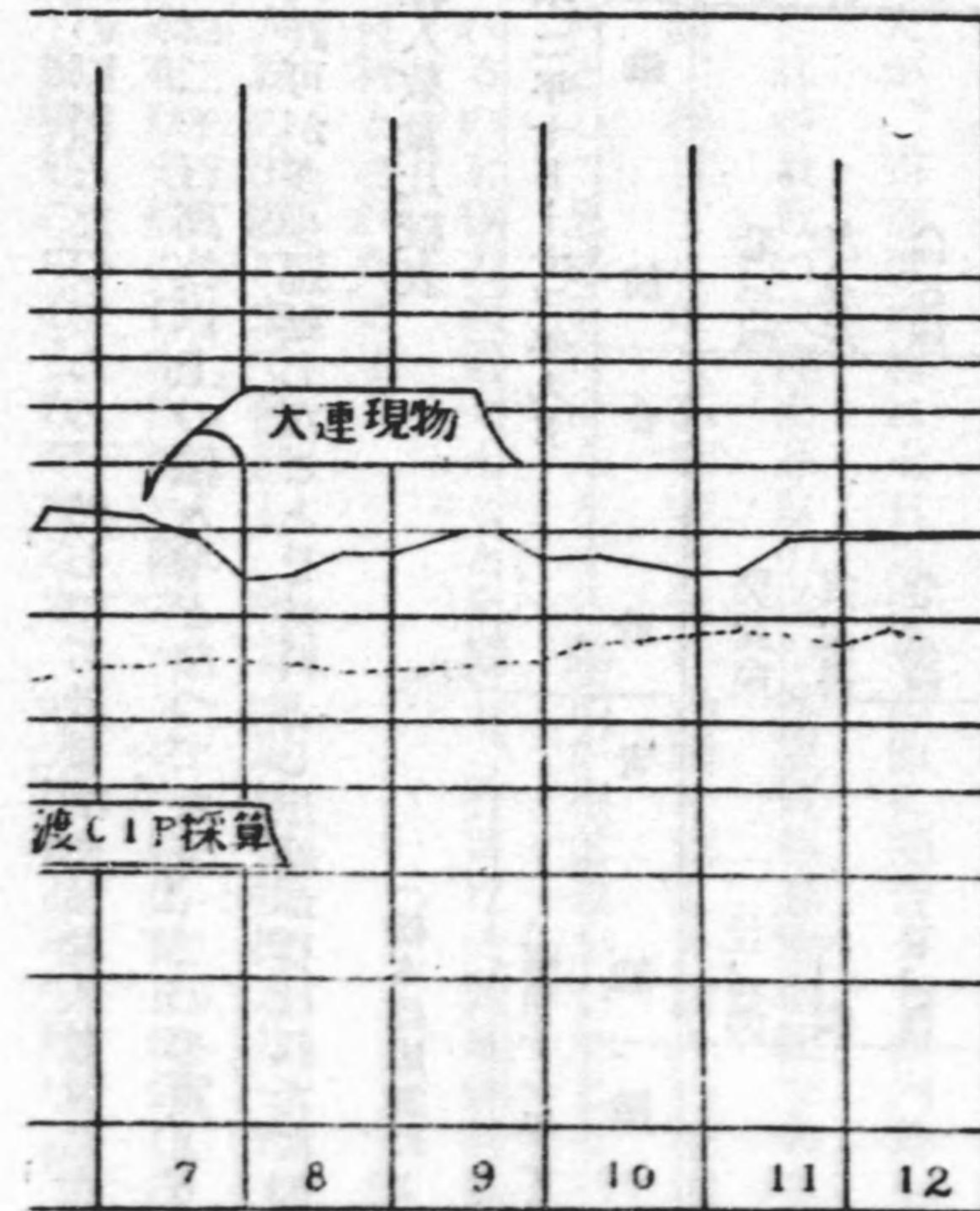
月別	昭和十二年十月—十三年九月				昭和十一年十月—十二年九月			
	青	鐵	合	計	青	鐵	合	計
十月	九、六八〇	三七、二八四	四六、九六四	三三、九五六	五一、六九〇	七五、六四六		
十一月	三、六〇〇	七〇、三七六	七三、九七六	八、〇六四	一〇、一五三	一八、二二六		
十二月	一三、三八〇	八四、〇八四	九七、三六四	一七、六九三	四八、四三六	六六、一三〇		
一月	一、〇〇〇	三三、五八〇	三三、五八〇	一三、一五六	四、六〇〇	五七、七五五		
二月	七三〇	二二、三八〇	二三、〇〇〇	五、六〇〇	四〇、四四八	四六、〇四八		
三月	一、五〇〇	二七、二八〇	二八、七八〇	一、九六〇	二〇、九二〇	二二、八八〇		
四月	—	一〇、三三〇	一〇、三三〇	二六〇	—	二六〇		
五月	二七、九五六	一一、一三三	三九、〇八八	四八〇	七〇〇	一、一八〇		
六月	一八、一四八	二六、四〇〇	四四、五四八	四八〇	一、五〇〇	一、九八〇		
七月	一五、一〇〇	六九、五八八	八三、六八八	四、八八〇	九、五八〇	一四、四六四		



合計	八月	九月
11,400,000	5,015	9,500
11,400,000	45,593	29,060
11,400,000	50,616	38,560
11,400,000	13,576	21,100
11,400,000	24,096	11,800
11,400,000	37,671	15,000

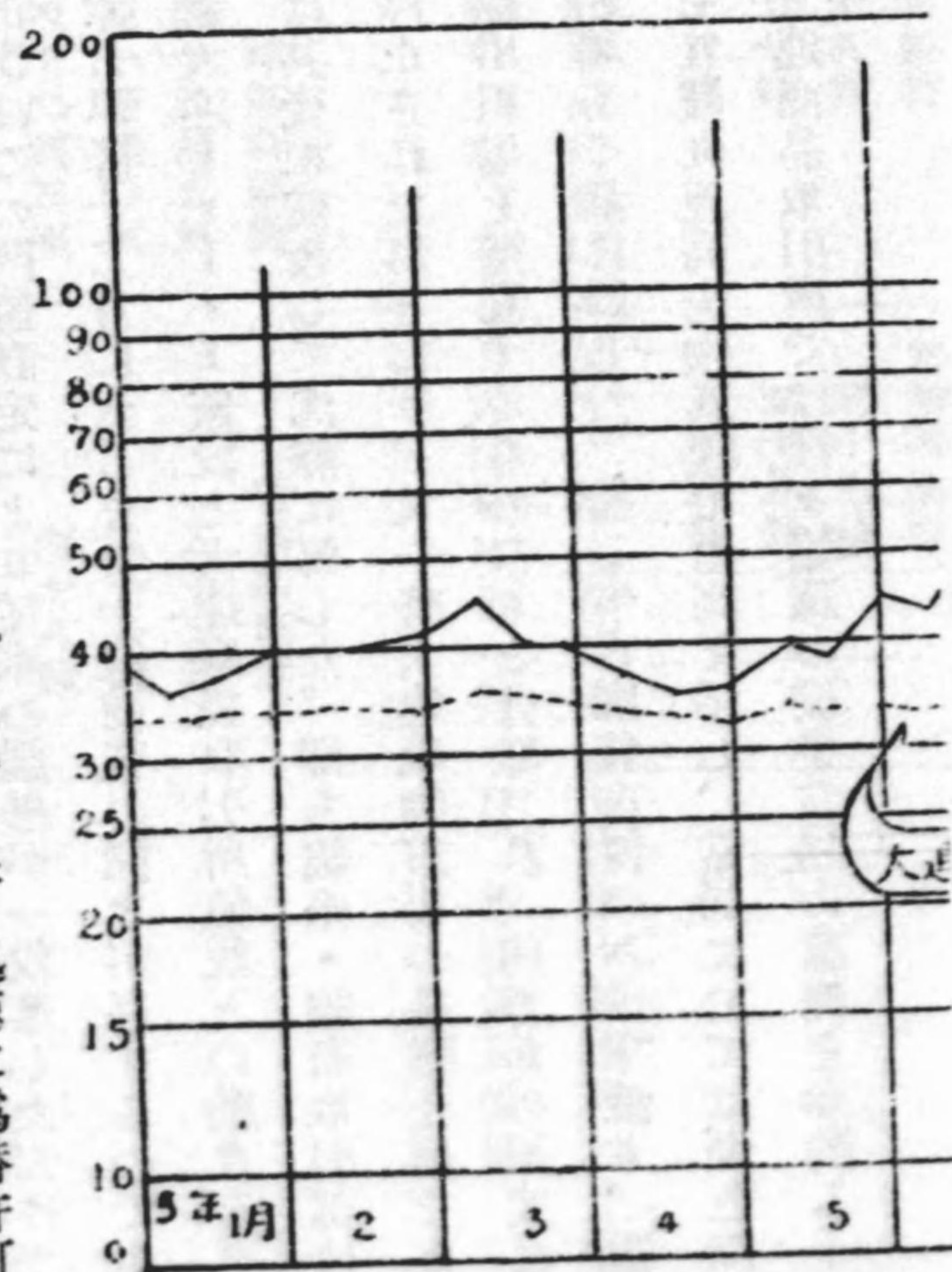
## 二、暴騰對策の轉換

袋輸入採算點と現物相場暴騰足取表



※(2) 12月以降現物値段相場ハ市中呼値

康徳五年大連鐵筋(新)麻



備考 (1) 輸入採算大連某村計算、

麻袋價格取締に對しては、當局は當初單に適當に、又出來得る限り迅速に爲替許可を行ふことに依り、低價格を維持することを期待してゐたと見られる。然し業者が希望する通りに許可を行ふことは諸種の手續から困難であり、その結果多少許可遅延を來した處、業者側はこの事實もをつて投機材料としたものである。此處に先づ今回の市場の波瀾を生む要因が醸成され、大連麻袋市價は前表に示せる如く大連C・I・F價格より十錢餘の高値を現出した。唯當時大連市場に於ては、換物人氣の爲め綿糸布・砂糖、其他諸雜貨が天井知らずの相場を見せ居り、麻袋市場も多少諸品一齊暴騰の波に乗じた傾向がない譯でもなかつた。斯くて麻袋市況は或る點に於ては最早や輸入許可問題を遊離して、單に市場動向は、「市場の保險性」と云ふ根本意義を没却したスベキユレタイプな方向にのみ終始する事態に立ち至つた。此處に至つて當局はこの市場の行成に多大の關心を拂ひ始め

常に市場に對しては投機抑制と自重とを慫慂したのであつた。取引所は、この思惑は正の指示に對應すべく、屢々證據金引上げをもつて高値を抑制せんとし、三月初二百圓（一萬枚に付）の證據金を數度引上げ、六月十九日には二千圓まで徴收することになつた。然し乍ら市場の高値は正には役立たぬばかりか、却つて昂騰氣配横溢し、單に證據金吊上げ策一本に依る昂騰抑制策には最早期待することが出来なくなつた。其處で取引所は六月二十二日現物五十四錢の門を入れた。即ち當時の事情からして、從來の輸入爲替許可の圓滑化に依る思惑撲滅、取引證據金の引上げに依る換物筋の排除等の消極的統制策は放棄せられ、次の統制段階へ進まねばならぬ必然的傾向が窺はれたのである。但し市況はこの門値設定により從來の騰勢が一段落しただけで其後も前表各月平均本年度分と前年とを比較すると、六月以降十二月に至るまで十錢前後の開きが存するのである。茲に参考の爲め大連某麻袋輸入商採算に依り鐵筋新大連C・I・F値段と大連麻袋取引所値段との動きをグラフに畫いて見た。

大連の其他の商品部取引は其後相前後して沈靜に歸した。即ち綿糸・綿布取引部は、日本内地及び朝鮮より輸出が禁止され事實上取引が停止された形となり、又一時大連現物市場の暴騰花形であつた砂糖は、内地糖業界から、大連砂糖相場昂騰は輸出相場を攪亂するものなりと非難され、何等かの形式に於て統制を要望する聲が高くなり、一時天井知らずの相場も平靜に歸した。然し乍ら麻袋市價のみは下溢り、需要期到来と共に十月の平均鐵筋現物相場は昨年度に比し五錢九厘高先物五錢七厘高を示し、當局に於ては憂色深く更に何等かの對策を講ずる必要に迫られた。其處で大連商品取引所では種々協議の結果當局の意嚮を參酌し十月六日次の如く大連麻袋最高價格を決定した。

	鐵筋新麻袋	青筋新麻袋
十月限	四十八錢	五十六錢
十一月限	四十七錢	五十五錢
十二月限	四十六錢	五十四錢

然し乍ら右の最高價格は前圖表に掲げた如く、輸入採算點より尙ほ十錢搦みの上値に在り、未だ割高のもので、早晚改正さるべき運命にあつた。そして夫は遂に十一月一日、各限最高價格、二錢搦みの引下げとなつて實現した。

	鐵筋新麻袋	青筋新麻袋
十一月限	四十五錢五厘	五十三錢
十二月限	四十四錢〇厘	五十一錢
一月限以降	四十二錢五厘	四十八錢

然し乍ら右の第二回最高價格も未だ大連採算より七錢乃至八錢搦みの上値にあり、十一月の平均相場は昨年同月に比し三錢餘高にあつた。さてこの最高價格は取引所に於ける取引を萎縮せしむると同時に、市中に於ける現物取引を盛んならしめる原因となり、市中價格は何等この最高價格の抑末を受くることなく相當高値を呼んでゐた。

この事態下に於て産業部は麻袋輸入配給統制につき諸々對策案を考究中の處、成案を得るに至り企畫委員會で麻袋統制要綱を決定し、十一月二十四日大連に於て關係業者の參集を求め具體案が發表された。即ち本案により

從來錯綜した斯業に、思惑的要素を含まず輸入より配給に至る一元的強力統制が實現され今後麻袋需給の圓滑、價格の適正は期して待つべきものがあらう。

### 三、麻袋統制要項の解説

前述の如く。麻袋價格の適正と需給の圓滑とを期するには最早消極對策では不可能視され、より高所より統制すべく今回の麻袋要項が決定されるに至つたのであるが、この統制要項を各項別に順次分析して、斯業統制大綱を説明することとする。

(一) 新麻袋の輸入配給を滿洲中央特産會及び關東州特産中央會をして獨占せしめることとした。但し舊麻袋及び麻絲、其他原料麻、麻製品は此の中に含まれてゐない。

(二) 滿洲(關東州を含む)麻袋輸入業者及び取扱高を一團として滿洲麻袋聯合會を結成し、特産中央會の輸入配給事務實行機關たらしめることとした。

勿論特産中央會は聯合會に對しては絶體的優位に立つものであり、この聯合會會員は、從來新麻袋の現物を取扱つた商人であれば入會することが出来るのであるが、先物ばかりの差額授受を本業とした業者は會員たることが出来ぬ。又現物を從來取扱つた業者と雖も、大體産業部に於て返去の實績に照して實績微少にして數ふるに足らずと認められるものは、會員の資格を遠慮せしめられる。

(三) 麻袋輸入計畫の確立と中央特産會の聯合會に對する監督權の所在とに關しては、輸入をなすに當り、聯合會は特産團體及び麻袋紡織會社と協議の上期別(二ヶ月一期)種別に麻袋需要數量を推算し新麻袋の輸入計畫を定むるものであり、輸入決定に對しては中央會に承認を求むることを要する。又前記の輸入計畫は毎月初めに更新するものと定められてゐる。

(四) 前述二ヶ月を一期として輸入せらるべき新麻袋は、如何にして輸入を行ふかと云ふに、その五〇%は過去三ヶ年間の實績に照し、各輸入高に割當る。これは輸入商の地位を保護するものであるが、全般的には輸入商の力を幾分抑制してゐる。

(五) 輸入商が前述の割當に基き、新麻袋を産地に於て買付けんとする時其の數量及び直積價格に關しては豫め聯合會に協議し其の承認を受けることを要する。これは輸入に際し價格の適正を重視する關係によるもので、従つて若し買付價格割當の嫌ある時は輸入商に對し新麻袋の買付時期を指定し得る。尙聯合會が上記の承認又は指定をなした時は遅滞なく中央會に届出を要し、其の届出ありたる時、中央會は買付數量及時期を變更せしめることが出来る。

(六) 新麻袋輸入に當つて、其の諸掛(船運賃、保険料、荷揚費、其他)の計算は、聯合會に於て豫め船會社、保險會社と協定した率に依つて行ふを要する。而して聯合會が船會社、及び保險會社との右の協定を行はんとする時は豫め承認を要することとし、中央會の監督權行使の強力性を示してゐる。

右は統制の強化の意味に於て頗る重大なるものである即ち從來各輸入商間に於ては輸入諸掛のうち就中保険料及び船運賃に就ては秘密を嚴守し外部ではこの費用が何程であるかは推知することは困難な問題であり輸入業者が不當に船賃及び保険料其の他諸掛りを變更せんとする虞がないわけではない。又當業者間に諸種の紛議を讓す原因ともなるので右規定によつて此の懸念を一切艾除したものである。

(七) 第四項の輸入商に對する五〇%の割當は過去の実績によつたものであるが、残りの五十%は輸入港CIF(利潤を含む)相場を基準とし會員の競争入札に附して輸入割當を実施する。これは過去の実績により輸入割當を受けた輸入業者と競争せしめることに依り産地相場に出来る丈接近し、且つ産地相場を積極的に叩かんとする處に重大なる意圖が存する。又過去に於て実績の少い業者に對して、幾分でも働く餘地を與へたものとして見るべきで、小輸入業者はこの場合何等か任意なる組合結成により從來の大手筋に對抗する氣運が濃厚である。

尙ほ右輸入落札者に對しては中央會の承認を要し、而して輸入相場には何等の制限を加へざるも輸入時期を制限し、原則として國內配給豫定期初め十日前より、該期半に至る間に於て新麻袋を輸入するを要する。

(八) 麻袋輸入の爲替許可に關しては、中央會に於て毎期二ヶ月前に輸入許可を受くる様これが申請をなすことゝ規定してゐる。即ち爲替許可に就ては或る程度計畫性が存する故、麻袋輸入の圓滑性を期する點から特に如斯規定したのである。

(九) 國內配給に關しても、その取扱商は過去に於ける現物取扱商に限定し先物扱商は一應除外されて居る。配給割當は過去三ヶ年の配給実績により行はれる。

(十) 國內の新麻袋需要者の注文は總て聯合會で一括引受け、會員たる取扱商が受註したのも會員を通じて聯合會に集中される。この結果は大連商品取引所に於ける取引は一切認めらず、又業者間に於ける思惑取引も一切排除されることとなり、輸入から配給への一元的統制が實現される。

(十一) 現物の配給に就ては、聯合會は注文を受けた時は、輸入商に對し右を取扱商に引渡することを命ずる。

(十二) 聯合會は取扱商をして指定價格で、所定數量を麻袋需要者に配給せしめ就中特産を第三國へ輸出せんとするものには優先的に配給して輸出振興の一助に資せんとしてゐる。この統制目的が結局特産輸出振興にあることを明示したものと見るべきである。

(十三) 麻袋配給價格は、一律の價格制度に據らず、産地相場にリンクする妥當なる價格を算出して決定する。即ち輸入港に於ける期別新麻袋價格は當該期間内に輸入せられたる新麻袋の平均陸揚價格(第四項の輸入割當に基き輸入商の輸入せる一枚につき六厘の輸入手数料を含む)を算出し之に配給に至る迄の諸掛(取扱商手数料新麻袋一枚につき四厘、入庫後需要者より代金の支拂を受くる迄の金利日歩一錢八厘、其他一切の諸掛)及び統制手数料(統制要項では最初一枚二錢と定めてあつたが麻袋組合定款で一枚に付二錢五厘)を加算し之を決定する。この配給價格に關し聯合會は中央會の承認を受くるを要する。

(十四) 麻袋の輸入、配給に當つては聯合會は註文、發送を獨占的に行ふものであるが、右に關し損失が惹起した場合には勿論全責任は聯合會が負擔する。但し會員が輸入、保管及配給に關し善良なる管理者の注意を怠つた場合に於ては右損失擔負の責任を負はねばならぬ。

(十五) 聯合會は新麻袋一枚につき統制手数料二錢五厘を徵收する(第十三項参照) 右を變更する際は中央會の承認を要する。

(十六) 前項の手数料(年約八十萬圓の收入豫定)の内先づ約十萬圓は聯合會及び中央會の關係經費として使用せられ、殘餘は損失發生又は產地相場昂騰に依る聯合會の負擔金に充當するか又は青麻、ケナフの増産獎勵金、紡織會社コスト低下資金其他に使用される見込で、聯合會、中央會經費以外の使途に付ては政府の指示に従ふを要する。

(十七) 中央會は聯合會に對して何時にても其の業務を分明ならしむるに足る書類を提出せしむるを得る。

(十八) 麻袋紡織株式會社は、當然全般の聯合會に入會すべきであるが、當面に於ては事務的に困難なる問題を包含してゐる關係上、將來然るべ時期に加盟せしむる。

以上が今回の麻袋輸入配給統制要項の解説である。さて本統制の特徴と見るべきは、麻袋が輸入品である關係上(1)價格を產地相場にリンクせしめんとしてゐること(2)輸入から配給に至るまでの諸掛並に手数料が明確にされ、且つ此等諸掛並手数料が一元的に規定せられ、思惑的要素が存在しないこと(3)特産中央會が麻袋價格を圓滑

に操作する關係上麻袋紡織會社の採算が安定する結果となり、延いては青麻、ケナフ五ヶ年増産策の遂行に當る農民の利潤の安定化を齎し同時に前述十六項の統制手数料積立金の運用により、麻袋紡織會社並原料耕作農民へ相當の補助金が交附される計畫があり、其の享受する利益は甚大なるものがある。(4)將來產地價格變動なき限り特産輸出價格に悪影響を與へる如きことなく、又麻袋輸入採算點昂騰の際統制積立金を放出することに依り麻袋價格の騰貴を喰止め特産物輸出振興に資し得ることとなる。(5)滿洲國關東州を通じた一元的統制たること。先づこの様な特徴を述べることが出来るであらう。

#### 四、統制實施と其後の業界

前述の麻袋統制要項は康徳六年一月十六日より實施されるのであるが、茲に實施後の業界の動きを打診して見ることとする。

第一に掲げらるべきは、大連商品取引所の自然解消である。即ち、大連商品取引所は、先般綿糸、綿布取引の事實上の消滅に加へ、今回の麻袋取引の解消に依り消滅に瀕して居ることである。次に本取引所に於て先物取引のみを行ひ來つた取引員の没落である。即ち、前述の統制要項によれば、先物取引員は今回の輸入割當又は配給割當を全々得て居らず、従つて彼等は一應麻袋業界から閉出しを喰つた結果となつたのである。

第二には輸入割當に依らざる競争入札に關しては、大輸入商社に對抗すべく、何等かの形式で小輸入商社群の

結合が行はれるであらうと見られてゐる。即ち、産地より麻袋輸入が行はれる場合、輸入諸掛、産地相場を叩くには大商社の方がより有利であることは明かである。就中競争入札に於ける場合は船運賃、保険料が大きな問題となるものであり、各商社間に於ける輸入採算を左右する重大なポイントである關係上、大商社は相當有利な地位に立つべく、従つて小輸入商社の結合は必然的の成行と見られてゐる。

第三の問題は、國內麻袋配給價格と製麻會社麻袋生産費との相關關係が如何なる展開をなすかと云ふことである。

即ち、麻袋紡績會社は從來、關稅保護を唯一の頼みとして操業して來たのである。然し乍ら前述の如く、今回の配給價格に依つてこの中を喰はれる危懼は存せず、却つて統制積立金の運用に依り相當の庇護を受けることとなるのである。然し乍ら國內價格が現在價格以下に下ることは明かである。一方現在國內麻袋紡績會社の使用する黄麻の輸入價格は、後述する如く日本の輸入爲替制限強化のため昨年來暴騰の一途を辿り、從來百斤當り十圓前後のものが昨今神戸驛着値段十八、九圓見當と傳へられて居り、大連値段も相當強調と推察される。目下の工場渡値段は不明であるが、今回の統制要綱中の入札方法に依る諸手数料其他を加算した輸入麻袋鐵筋新一枚の値段と、滿洲製麻會社の康徳元年度に於ける採算とを比較して見ると次の如くである。即ち輸入鐵筋新麻袋の奉天渡採算は

十二月二十日（印日爲替七八留比八分五）  
鐵筋二十四留比十六ノ一……三十一圓二十八錢（百枚）

大連C・I・F 値	三十九圓四十八錢（〃）
輸入關稅	八圓八十錢（〃）
統制手数料	二圓五十錢（〃）
輸入商手数料	六十錢（〃）
取扱商手数料	四十錢（〃）
大連埠頭一貨車積料	六十錢（〃）
大連一奉天鐵道運賃	一圓十錢（〃）
金利	一圓八十錢（〃）
倉敷料	五十錢（〃）
計	五十五圓七十八錢（〃）
一枚當り	五十五錢八厘

右の計算に依れば現在奉天市價五十八錢より二錢二厘安と云ふことになる。

一方奉天の滿洲製袋會社の鐵筋一枚の生産原價を見るに次表の如くである。

鐵筋麻袋生産原價表

費目	金額
原料費	三〇・九
職工賃銀	三・六五

然し乍ら本原價計算は康徳元年末のものであり、前述の如く日本内地の強調を移し、原料黄麻（滿洲製麻は黄麻のみ使用）が暴騰してゐるので、表中の二十四錢九厘を、神戸驛渡値段から推定して現在八割高（十九錢九厘高）と見て四十四錢と押へれば、一枚の原價は計五十二錢

技術員給料	〇・三〇
職員給料及雑費	〇・五〇
營繕費	〇・三六
電力及電燈代費	一・〇九
燃料費	〇・二三
消耗品費	二・八三
計	三・八九

(産業部調)

九厘前後となる。

然し乍ら、右は充分に高値見越に計算したもので、實際はこれより相當低いものと見て差支あるまい。今回統制手数料、其の他手数料が輸入麻袋に附加せられ、又従前通りの高關稅保護も存続し、而して統制積立金の交附を受くるとせば現在の暴騰した市價が、前述の輸入採算點まで引戻された曉に於ても、滿洲製麻會社は充分有利な採算が見られると思ふ。即ち將來斯る經濟機構の下に、製麻會社は生産力を擴充

するに容易なる位地に置かれるであらうことは、明かである。  
現在の國內生産状態は次表の如くである。

滿洲製麻會社麻袋累年生産高

(單位枚)

年次	大連工場	奉天工場	計
昭和六年	三、六九九、五四二	休業中	三、六九九、五四二
七年	四、七五六、五二三	〃	四、七五六、五二三
八年	四、六五一、二〇〇	〃	四、六五一、二〇〇

年次	大連工場	奉天工場	計
九年	四、七四八、三六五	〃	四、七四八、三六五
十年	四、八五六、〇八三	六、七〇九、六三三	一一、五六五、七〇六
十一年	四、九七九、四八三	六、七五五、五七七	一一、七三五、〇七九
十二年	四、四〇八、六〇三	六、九七七、〇〇〇	一一、三〇五、六〇三
平均	四、五八五、六八四	一	一

- 一、右麻袋は、鐵筋、青筋、A Twill. GOK. Bag セメント袋の合計なり。
- 二、然し乍ら A Twill. GOK. Bag は(昭和六年、生産高十餘萬枚)紙袋の進出に依り最近は生産されてゐない。
- 三、昭和九年生産高中青筋二一五、五六六枚、鐵筋四、一一五、四五六枚。

右表の如く滿洲製麻株式會社兩工場で毎年生産される數量は一千百萬枚前後のものである。其中鐵筋及び青筋麻袋の生産數量は不明であるが、昭和九年度全生産數量九百萬袋の中、鐵筋、青筋合計は四百三十萬袋であるから、昨今の鐵筋、青筋、麻袋生産數量は六百萬枚前後と推定して大體違算ないであらう。一方昭和十二年度輸入高は次表の如く、新麻袋四千二百萬枚、舊麻袋一千八百萬枚であるから、滿洲に生産される麻袋の新麻袋輸入高に對する比率は、全麻袋國內生産高は二九%、青麻、鐵筋、麻袋合計生産高は十四%であり、國內麻袋生産數量は微々たるもので、生産擴充の餘地が大いに存在することは言を俟たぬ。

然して、ケナフ増産五ヶ年計劃の進展に伴つて、國內ケナフ及青麻を原料とし康徳六年より操業を開始する邊

陽紡麻株式会社（資本金三百萬圓内拂込百五十萬圓）が出現し年産麻袋六百萬袋生産と傳へられてゐるので、滿洲製麻會社の六百萬袋と合計して年額一千二百萬枚前後の生産が期待される。

滿洲國麻袋需給推定表

（單位千枚）

年 度	輸入新麻袋	古 麻 袋	國內生産額	輸（再）出額	差引需要額
昭和 十年	二八、九七五	三〇、五〇〇	二、五六〇	五、五四九	五五、〇二二
// 十一年	二五、六五四	二二、六〇〇	二、七四五	五、六八八	五三、〇四一
// 十二年	四三、一四〇	一八、二六六	二、三六六	五、八二六	六五、九七八
三ヶ年平均	三三、二五六	三〇、〇九三	二、五五九	五、六四四	五八、一八〇

註一、輸出數字は貿易統計より換算したるもの但し十二年度再輸出數量不明に付き前二年の平均數量を掲ぐ。

二、輸入數量は滿洲國貿易年報の數字と、大連麻袋輸入商松本商店調の數字とを參照し推定せり。

第四の問題と見るべきは、毎二ヶ月を一期とする輸入數量の査定に際し一般業者の實需並に見越需要（假需）數量が圓滑に認められるや否やの問題である。若し業者の見越需要數量が許可の際チエツクされた場合、又は配給關係に於て圓滑を欠ぐ懸念が生ずる場合價格機構への致命的崩壊となつて現はれ易い統制經濟の危険性を知らねばならぬ。

### 五、特産輸出振興の立場から觀た麻袋問題

前述せる如く、價格、及び配給に關しては一應大綱が決定せられた。然し乍らそれは、單に價格暴騰需給不圓滑と云ふ病症を阻止したのみに止まり、何等價格が引下げられるのではない、否むしろ諸種の手數料の添加により會つて麻袋價格が平靜を保つてゐた當時に比較し却つて多少の高値となることは左の如くである。

統制前と統制後の奉天渡鐵筋新值段比較表

費 目	金 額		備 考
	康 德 五 年 一 月 物	康 德 六 年 一 月 物	
大連 C.i.F 一段	五元〇〇	四三・五	康德六年一月物は埠頭倉庫渡し
大連埠頭積奉費用	〇・六	〇・六	
大連積奉費用	一・一	一・一	
鐵道運費	一・〇	(一・八)	
金 利	〇・八	(〇・四)	康德五年取扱高手續料不明なるも八厘と推定
取扱商手数料	〇・八	(〇・四)	
輸 入 稅	八・八	八・八	
統 制 料	一	(二・五)	
倉 庫 料	〇・五	〇・五	



計

三・八

五・五

註一、康徳六年一月物値段は昨年十二月三十日滿洲麻袋組合發表のもの。

二、康徳五年一月奉天渡價格は、一月平均價格より、多少高値にある。

三、金利、統制手數量、取扱商手數料、輸入高手數料は康徳六年度分は大連埠頭倉庫渡配給價格に包含

右表の如く六年一月奉天渡價格は、五年の夫れに比し、二錢七厘高の計算になる。然し乍ら五年度一月物奉天渡價格計算は。註(二)に記したる如く、市價より約三錢餘の高値にあるから、六年度一月價格は大體五年一月の市價に比し五錢高見當と見て差支あるまいと思ふ。

其の高値の理由は(1)、産地高による大連埠頭價格の昂騰(約一錢二厘)(2)、統制手數料(二錢五厘)の添加(3)、運賃關係に於て、從來種々の名目で運賃割引が各輸入商に對し行はれてゐるたが、今回の滿洲麻袋組合採算は一般には公表されぬが多少高くはないかと推定されること(約八厘一錢高)等が其の主なるものであらう。即ち今回の統制は價格引下を齎らしてゐない。勿論先般の暴騰、當時の價格よりは非常に下値にはあるが、前述の如く統制關係の費用の加重に依り、五年一月に比し五錢見當の高値となつてゐる。今回の統制は先づ配給圓滑を期する建前であるから、價格の問題は第二の問題として考ふべきであるが、早晚必然的に、この價格引下の點を中心に研討せねばなるまい。然してこの價格引下の關鍵として世上論ぜられてゐるのは先づ輸入關稅の引下である。輸入稅は康徳四年末迄は新麻袋一擔當り、四圓四拾九錢、即ち一枚當り鐵筋七錢九厘、青筋約八錢八厘で

あつたが、康徳五年一月から

稅	六四八		
(甲) 新 麻 袋		每百疋	七圓八十錢
(乙) 古 麻 袋			
(一) 百疋の價格十八圓を超えるもの			一圓六十錢
(二) 其 の 他			二圓二十錢

と改正された。即ち鐵筋一枚當り八錢八厘、青筋九錢七厘であつて、業者は鐵筋を九錢青筋を十錢、と概算してゐる。古麻袋は其の品質の程度にも依るが、概ね新品の四分の一内外であつて、從來から見ると新麻袋に於て一錢内外の増稅、古麻袋は約二倍の課稅となつたわけである。

此の外、關東州内にある工場が滿洲國內に生産する原料を以つて製造したものを滿洲國內に輸入する場合は、特種轉口稅なる辦法に依り處理される規定が存し、豫め其の生産會社は該規定適用の指定認可を得て置くものであるが、現在稅關の指定を受けたもの十八會社あり、其の轉口稅は査定價格鐵筋麻袋三五錢、青筋同四〇錢とした査定價格の從價七・五%を課せられることになつてゐるから、普通輸入稅と比較して非常に有利な立場にあるわけである。又滿洲國から特産物包装用具として輸出した麻袋に就ては、其の使用後無稅輸入の便法が設けてあり、輸出數量に對しては申告に依り稅關から證明書が交付され、後日再輸入に就て免稅の取扱を受けることになつてゐる。

右が麻袋に關する關稅である。而して新鐵筋一枚當り關稅八錢八厘は、一月分大連配給價格鐵筋四十三錢五厘の二〇％に當り、實に高關稅である。併して本品が輸出品包裝として、大部分が再輸出され、國內純消費に向けられる數量は微々たるものであり、特産輸出價格はこの麻袋高關稅の増加に依り價格の上昇不可避となり、勿論微少な金額ではあるが輸出振興の大方針に矛盾することには違ひない。更に今回の統制に依る種々の手数料、其他關係で三錢餘の配給價格の昇騰は、結局八錢八厘の輸入關稅を約十二錢餘に引き上げたと同様の結果となり、輸出振興の原則に離反すること甚しい。今回の統制は先づ需給の圓滑を期する爲にこの矛盾を取てやつたのである。其處で統制に依り高くなつただけの金額の輸入關稅の引下が云々せられるのである。つまり、前述の八錢八厘の關稅（一月配給價格の二〇％）を半分に引き上げることに成り、大體統制前の麻袋市價を維持するか、若しくは、再輸出された麻袋に限り關稅に於て相當の範圍に於て關稅割戻をなさんとする *Relieve-System* の確立こそ、輸出振興の立場から最も合理的のものとして一般業者間に稱へられてゐる。

然し乍ら麻袋の問題は夫れ丈けではない。現在滿洲では麻袋に鐵筋青筋等の筋入りのものを使用してゐるが（滿鐵混保は鐵筋麻袋に限らる）、原產地印度では、此の爲め滿洲向を特に製造してゐるのである。此の特殊麻袋使用制度を廢止すれば、普通麻袋は年産五億萬枚と稱されるから、滿洲の需要増によつて特に相場の騰貴は起らず、而も生産費も四厘乃至五厘安となし得るとの論が唱へられてゐる。將來海外と需要先と圓滿なる協定を遂げその廢止を實現すべきものであらう。

## 六、結 論

以上縷説の如く、今回の統制は從來の消極的統制より、積極的統制に乗出したものであり、今後斯業の動向に對し期待するものがあり、就中輸出振興の立場から麻袋配給價格の引下げに寄與する政策が引續き採用せられる事など望ましきものである。

（康徳六年一月末暮秀雄）

## 四、事變下康徳五年の

### 滿洲物價の動向と今後の展望

- 一、概 言  
二、物價指數の推移  
三、今後の展望
- (イ) 卸賣物價指數  
(ロ) 生計費指數

本稿は滿洲の戦時物價解明の一資料として、事變第二年たる康徳五年度の滿洲物價の推移を本行調査の物價指數に就て検討分析したものであるが、主として物價指數に顯現したものを對象として考察した爲に概貌を把握した程度に止まつて居る。

#### 一、概 言

戦争が物資の巨大なる経済的需要であり、その戦争需要が一國經濟の再生産過程の埒外に於て消耗されるものである以上、戦時下の「生産力擴充」が強行されながらも結局は軍需的經濟外需要に對しては過少生産に陥り、更に再生産規模の縮少を通じて此の傾向は助長され戦時物價は一應無限に昂騰する性質を有する事は既に戦時經濟の常識であるが、殊に今次の事變が單なる長期戦闘行為に止るものでなく、東亞新秩序の長期建設を目標

とするものである爲、資材と資金とは軍需の擴張充實と、日滿支經濟力の根本を培ふ爲に集中される關係から國內消費物資は極度に制約されたものとなり、物價昂騰の勢の強まるのも亦當然である。

更に戦争の龐大な需要により事變費として、又長期建設の需要資金として、日滿政府が購買者として撒布する紙幣の増發は、通貨價值の下落となり物價の一般的騰貴を齎す役割をなし易いものである。

斯く戦争とは宿命的な不可分關係にある物價騰貴に對して、戦争遂行、長期建設の爲には、此の不可分關係を斷ち、物價騰貴を極力回避する對策が樹立されねばならず、物價安定は戦時經濟政策の重要課題とならざるを得ないものである。言ひ換へれば、日滿支經濟のアウトタルキーの確立の不十分なる現時の經濟段階に於ては、軍需充足及長期建設資材の調達を澁滞なく遂行させる爲には、貿易振興と物價安定との二大經濟政策が圓滑に行はねばならないのである。

事變第二年度たる康徳五年度の日滿物價は騰勢の顯著なるを免れず物價低落の世界的趨勢から游離して獨歩的騰勢を示したのも亦當然であるが、此の物價の自然的騰勢を是認する事なく、勿論物價の基調的騰勢移行は避け難いが、従来の自由經濟的法則を無視しても物價騰貴を抑制せんとする物價對策が戦時經濟政策の重要な一環として登場した事も此の年の物價の特質であつた。即ち物價統制は自然的な物價騰貴に對する一つの政策的な戦ひであるが、康徳五年の物價は需給の逆行より來たる不斷の騰貴傾向と統制政策の進展による之が抑壓に終始したと云ひ得るのである。

以下に中銀指數により、滿洲の卸賣物價指數と生計費指數の康徳五年一ヶ年の推移を顧み、康徳五年の滿洲物價の概説をなし、今後の物價趨勢に關し若干の展望を試みよう。

## 二、物價指數の推移

### (イ) 卸賣物價指數

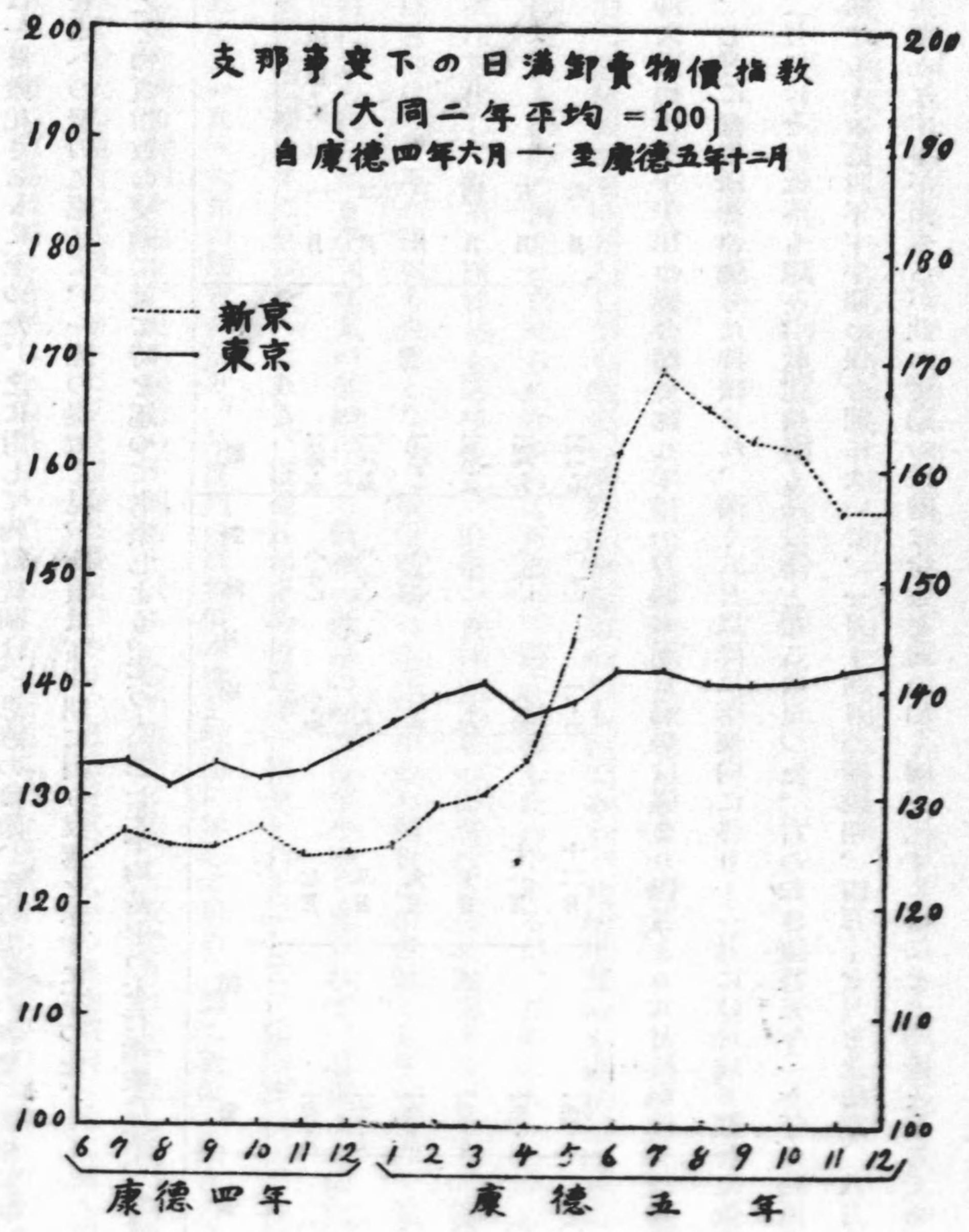
四年度に於ては、事變勃發前の上半期に思惑的輸入の著しきものがありストックの莫大な集積を見て居たので、事變經濟下に突入しても物資の需給は尙餘裕あるものであり、且輸出貿易も現在程の萎縮は見えて居らず、爲に物價も騰勢の潜在は察せられながらも可成り平靜に推移したのであるが、五年に入つてからは物資の不足は漸次深刻化し、對第三國貿易も進捗せず、原料、資材の不足の影響は直接に顯現するに至り、物價の昂騰歩調は一段と加はり、その様相も複雑となり、戰爭初期の生産財中心の騰貴は消費財にも及び纖維工業品其他一部の消費財に見られた如き平和産業の萎縮による價格の低落の如きは今や全く見られず、騰勢は全面化し戰時物價の本態を明瞭に顯はすに至つたのである。康徳五年平均指數は一四九・六を示して、前年度の年平均指數一二五・一に比して一九・六%の騰貴に當り、年度内の高物價水準を明確に示して居る。即ち物價の動きの基調は需給不均衡に基き騰貴傾向を辿り、更に輸送の不圓滑と云ふ一般的事情に依つて促進された。而も此の物資缺乏の深刻化と需要増大の逆行の基調に加へて見越需要の擡頭があり、思惑賣買、大衆の換物傾向（殊に滿人間の旺盛なる換物人氣）更に貿易統制に隨伴した輸出ビル、プレミアム問題に絡む思惑等の假需要の激増が加重された爲に物價騰

貴は一層激化さるゝに至つた。之に對して物價統制は、思惑の排除、物資需給の調整、價格統制に集中され、物價安定への努力に應じて、一應の奏效を見、物價は下半期に到り反落を示すに至つた。

之を物價指數の變動に就て時を逐つて考察しよう。先づ大同二年平均基準の本行指數は次の如き推移を示した。

康徳五年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
指數	二五・三	二六・九	二五・二	二三・五	一四・六	二六・七	一六・八	一六・七	一六・三	一六・九	一六・三	一六・三
對前月別	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
變動率	0.4%	2.9%	0.9%	2.6%	8.3%	2.8%	4.4%	1.9%	2.2%	0.3%	3.6%	0.1%

即ち康徳四年下半期の保合期を脱して、一月以來逐月騰勢は強まり四月より六月にかけては飛躍的な著騰を示し、七月にも尙ほその騰勢は持續され、漸く八月以降反落傾向に移り十一月には可成り顯著な低落を示したが、十二月にはその低落も想ひ、軟化趨勢も一段落となるに至つた。右の如き康徳五年一ヶ年の物價推移を段階的に區別すると康徳四年下半期の保合期に次いで、一月―四月の漸騰期、四月―七月を急騰期、八月―十二月を抑制低落期となす事が出来るが此の變動の段階は指數を前の如く圖表化する事により明瞭となるであらう。



第一期 一月—四月

四年末迄は平和産業の迫る一つの途として織維工業品の半恐慌状態が見られ、其他の消費財に於ても際立つた昂騰はなく、建築材料類も季節的關係により上伸の勢は抑へられる等の状態にあつたが、五年一月よりは織維工業品を中心に消費財の一般的品薄による騰貴と、建築材料類の土建事業開始による昂騰、其他に全般的な騰勢を反映する雜品類の著騰も見らるゝに至り、騰勢の一般化と共に五年度の騰勢の強化が窺はれるに至つた。

又前表にも見るが如く、事變後の滿洲の物價は日本の物價の動向と並行的であつたのは此の期間迄であり、此の期間の騰貴率は六・五%であつた。

第二期 四月—七月

三月末頃より諸物價は一齊に躍騰し、前期に於ては尙低迷を續けた特産類も輸出増を強行された結果、不當の高値に躍進し、殊に輸入制限の強化は輸入品價格の著騰を惹き起した。而も特産類特に大豆の輸出採算の不利も代替的に諸建設資材類の輸入の利益を以てカバーし得る事となり、此の輸出強行の傾向に伴ひ、實需、思惑の一齊買と手持筋の先高觀による賣惜みとが重複し、輸出品、輸入品價格共に異常の騰貴を示現するに至つた。更に圓ブロック圈内輸出制限が加はり、滿洲の物價は未曾有の暴騰を示すに至つた。即ち事變前に於ては、建國後滿洲物價指數の最低たる康徳元年三月より最高指數を示した康徳四年四月迄の二十六ヶ月間の騰貴率は、四七%であり、康徳元年末より事變前迄の二ヶ年半の騰貴率が二四%であつたに對して、此の五年四月より七月迄の

僅か三ヶ月間の騰貴率が二六・四%であつた事からしても此の期間の物價騰貴の鋭さが察知されるであらう。日本の物價が四月以降は騰勢を抑止されて保合にあるに拘らず滿洲のみ斯かる騰貴を示した事は、民間に時局下の物價問題の重要性が未だ十分に認識されず、又政府の措置に於ても敏速を欠く所があり、大勢は一般に先高思惑に趨き、闇取引が横行し、物價が極めて不自然な高位に吊上げられた爲で、かゝる思惑の根底は物資需給の一般的逼迫傾向ある爲にもよるが、又尙ほ未だ統制經濟の眞意義を理解し得ざる自由經濟思想に基く利益本位の思想が支配して居た爲と云はねばならない。即ち價格統制による國家意思の遂行に對して十分の認識が浸潤して居なかつた爲と云はねばならない。

第三期 八月—十二月

前期の暴騰に對しては強固な統制を必要とし且先づ何よりも思惑の排除を必要とする、故に七月には各金融機關の協力により思惑資金に充當される諸貸出の引締をなして金融方面よりの抑制を加へ更に臨時爲替局の創設と共に中銀による爲替の一元的統制が成り、物資の方面では八月には物資、物價委員會が成立して物價統制の積極的對策を審議立案して、從來の暴利取締令の活動を充分ならしめる事となり、斯く統制が具體化すると共に物價も漸く落付模様に移じ、見越の暴騰も沈靜に歸し、統制前期の過渡的混亂も収まるに至つた。物價指數も七月の一六八・八を最高として漸次低落を続け十一月には一五六・二迄下落した。此の物價指數の動きより見る限り、物價政策は效を奏し五年下半期には騰勢は漸次消へ、下降運動に移じた事が見られるが、然し物價低落と云つて

も決して之は全面的のものではなく、思惑高は訂正されたが、尙統制を受けず自由價格のまま放任されて急騰を示し、或は業者の自治的統制に止り未だ高位を持続するものも存して居る。

十二月に至り此の低落傾向も熄んだのであるが、此の數ヶ月間の低落は七・四%に止り十二月の指數の地位は一五六・三にて、急騰を示した五月の地位よりも尙高水準にあり、此の點より見て物價統制の效果は積極的物價引下ではなく騰貴の抑制の程度にあつたと云ひ得る。故に日本の物價指數が十二月は事變前に比し七%の騰貴なるに比し滿洲の物價指數は十二月は事變前に比し二六%の高位を依然示して居る事は、滿洲の物價を左右するものは輸入品價格及輸出品價格であり、國內生産品價格は之に追隨的であり價格統制の輸入原價及び輸出品の海外價格に及び得ない爲に、統制の不徹底を免れず、又その統制の方向が直接價格形成に關與するよりも先づ物資の需給調節に向けられた爲に、その效果も未だ十分には現れない爲にもよるのである。

尙ほ以上に概略説明を加へた各期間の類別指數の變化を見る爲に次表を附加して置かう。

新京卸賣物價類別指數

大同二年平均=100

特産雜穀	嗜好品及嗜好品	紡織品	金物	建築材料	燈火品及燃料	雜品
康徳四、七 二五・九	一五〇・三	一〇九・八	一〇九・一	一四・五	九六・八	一一・四
八 一九七・四	一一〇・三	一〇四・九	一七六・六	一九・六	九六・七	一一・六

九	一九三・三	一一三・三	一〇七・九	一六七・四	一〇八・六	九八・二	一一三・四
一〇	一九六・六	一一五・一	一〇八・一	一六七・六	一〇六・〇	九八・五	一一五・五
一一	一八八・七	一一三・三	一〇三・九	一六九・一	一〇五・〇	九八・八	一一四・八
一二	一九九・六	一一三・四	一〇三・三	一七八・三	一〇五・四	九八・四	一一四・一
一三	一七九・三	一一三・三	一〇四・三	一七五・〇	一〇七・六	九九・八	一一五・七
一四	一八〇・四	一一三・七	一〇九・二	一七七・一	一一三・三	九九・八	一一七・〇
一五	一七八・二	一一三・七	一一五・〇	一七二・二	一一六・八	九九・八	一一五・二
一六	一八六・五	一一六・一	一二一・〇	一七三・八	一二九・八	九九・八	一一三・一
一七	二二六・五	一二一・六	一四七・八	一八三・〇	二二五・五	一〇四・五	一一三・八
一八	二五五・三	一四七・八	一八七・九	二〇八・六	二二九・〇	一〇七・七	一一五・七
一九	二〇九・七	一五〇・七	一八三・五	二五六・二	二三四・七	一〇八・三	一一七・二
二〇	二二四・四	一五〇・七	二二四・六	二五三・七	二〇八・三	一〇九・三	一一七・二
二一	二〇九・七	一四六・四	一七三・七	二五三・八	二二七・六	一〇九・三	一一七・六
二二	二二〇・〇	一四三・三	一七二・二	二二九・七	二二七・八	一一〇・七	一一七・五
二三	二二一・〇	一四六・二	一七三・三	二二九・一	二二九・七	一一一・二	一一七・五
二四	一九二・〇	一三七・八	一六六・〇	一九八・八	二四〇・一	一一四・五	一一七・五
二五	二〇三・四	一三八・一	一六四・〇	一九三・〇	二四一・七	一一七・四	一一三・七

次に戦時物價の複雑なる様相の一端を別の觀點より考察をして見よう。

先にも述べた如く、八月以降は統制の効果により總平均指數は低落を示したのであるが、その内容を見れば統制商品と非統制商品との間に著しき跛行性が見出されるのであり、非統制商品の騰勢は何等抑制されず、殊にそれは消費材にその傾向が見られるのである。即ち康徳四年十二月に比し、五年十二月の指數は、統制品に於ては一〇・一%の騰貴であつたが、非統制品は同期間に三五%を示して居るのである。

更に又左表の如く

	四年 六月	四年十二月 對四年六月比	五年十二月 對四年十二月比
原料品	二八・三	一九・六	一四七・〇
消費財	一一〇・三	一〇・二	一五三・七
設備財	一四〇・七	一五〇・三	一七六・五
		一・三%	三・九%

五年度に於ける消費財の騰貴は著しく、原料品、設備財共に騰貴を示して居るものゝ、消費財の騰貴率の方が大であり、更に又此の原料品中に含まるゝ半加工原料品には粗綿布類の著騰を加へて居るものであるから、消費財の騰貴には注目すべきものがあるのである。

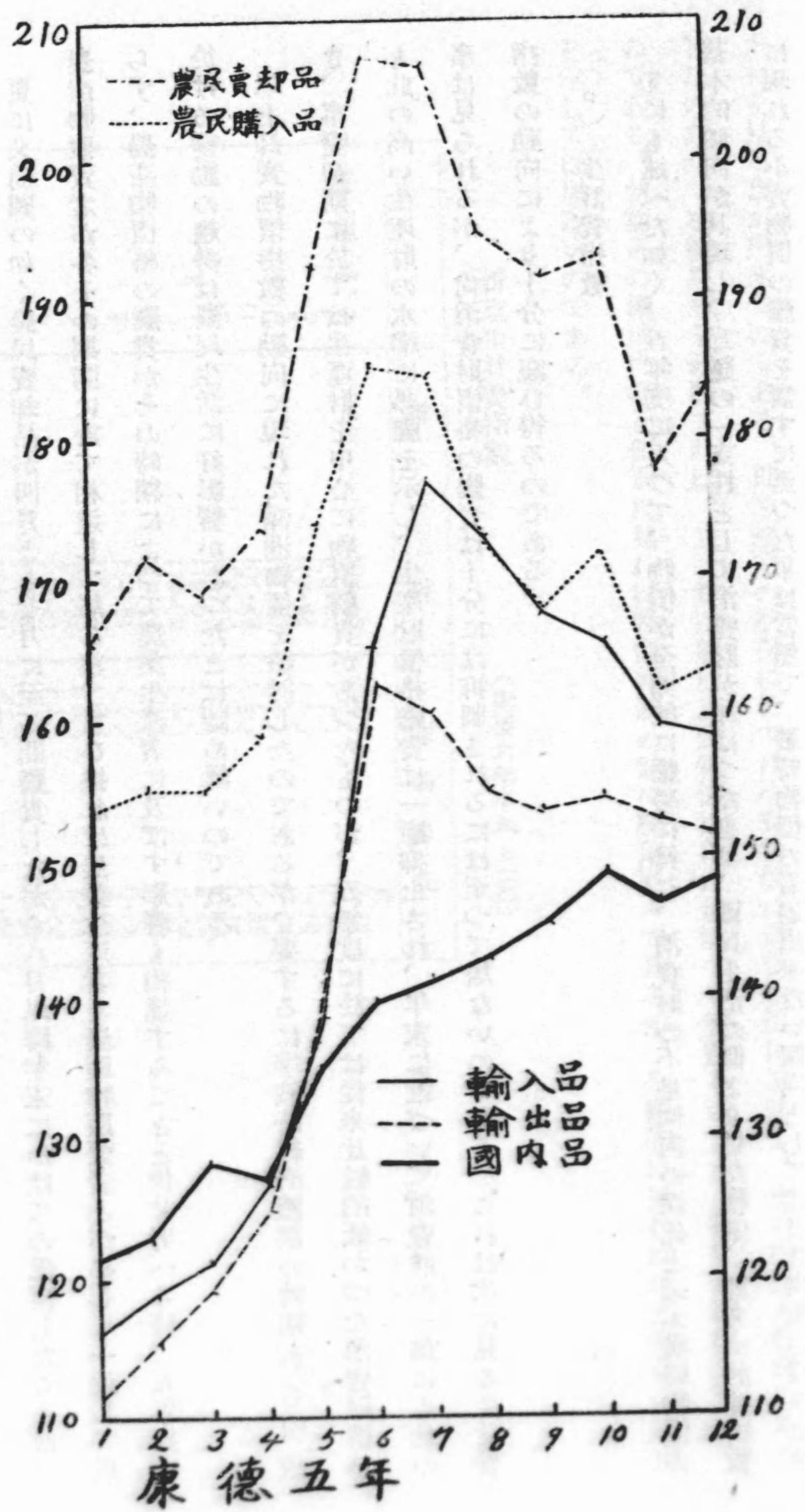
更に又滿洲の物價は國際的關係により支配さるゝ事が著しいのであるが、その爲に國際的商品價格即輸入品の價格の騰貴が大であれば、その影響は國內品以上に鋭くなり、更に輸出品價格の騰貴が輸入品價格の騰貴に及ば

なければ、國民經濟に對する影響は不均衡となり、その安定を動搖せしめるものである。次表及び次圖を見やう。

		康德五年十二月指數		四年十二月指數		騰貴率	
農 民 賣 却 品	農 民 購 入 品	輸 入 品	輸 出 品	國 内 品	輸 入 品	輸 出 品	騰 貴 率
二二・八	一五〇・八	一五・六	一六三・四	一四九・三	一五・四	一五三・四	三五・二%
一五・二	一〇九・七	二六・二	一五三・四	一四九・三	二六・五	一六・五	

(大同二年平均=100)

康德五年十二月の指數を四年十二月の指數に比較すると、輸入品は三六・五%の騰貴であるに對し、輸出品價格の騰貴は僅か六・五%に過ぎず、國內品の騰貴は二五・一%の騰貴となつて居り、滿洲の物價騰貴が輸入品の騰貴―即ち輸入品の大部分を占める日本の物價騰貴を受け入れ、更に輸入統制による其他輸入品の供給減を反映したに基く事の多大なるを示して居り、國內品も輸入品高に追隨すると共に事變後強行されつゝある國內生産消費品(高粱、粟、玉蜀黍等)の圓ブロック内への輸出による騰貴により可成り顯著な昂騰を示して居る。



之に對して輸出品は、現下の世界經濟の一つの根幹的特徴をなす農産物部門の一般的不況により、極めて暗い様相の下に伸び悩みを示し、輸出難を反映して騰貴は低度に止まつて居るのである。此の事は滿洲の農民の立場



より見る時には前表に見る如く、農民購入品の騰貴が三七・五%であるに對し農民賣却品の騰貴は一・一%であり、此の兩者間の缺状價格差は國民經濟を不安に導く事にもなる見逃すべからざる事象と云はねばならない。更に又前圖の如く農民賣却品が四月より七月に至る間騰貴しながら八月以降年末にかけての低落したことは、農産物販賣者が各その期間に於て相違して居る事、言ひ換れば農業生産者と農産物販賣者とが必しも一致して居らず、農産物價格の騰貴がその時期によつて農業生産者に及ぼす影響も相違することと併せ考へる時、五年度に於ける變動の趨勢は農民生活に好影響があつたとは認め難いのである。

以上卸賣物價指數の動向に現れた滿洲物價を検討したのであるが、要するに準戰時經濟體制の時期から引續き、事變初期に於ては生産財を中心に物價騰貴があつたものが、五年度に於ては從來比較的低かつた消費財價格も此の高い生産財の水準に昂騰を示し、生産財價格騰貴は一應抑止され、年末に近づいて消費財の一部にも此の事は見られるが、尙消費財價格の騰貴は十分には抑制されるには至つて居ないのである。これは次に見る生計費指數の動向により十分に窺ひ得るのである。

(ロ) 生計費指數

先にも述べた如く、五年度に入つて、物價が全面的に騰勢に轉じ、消費財の不足傾向の深化と云ふ戰時物價の基本的傾向が具現し、昂騰の支柱として消費財が加はつた事は、國民生活の側より見た物價、即ち生計費指數に現れる小賣物價の騰貴を齎すに至つた事は當然で、戰時物價の看過出来ない傾向として生計費指數の緩みなき

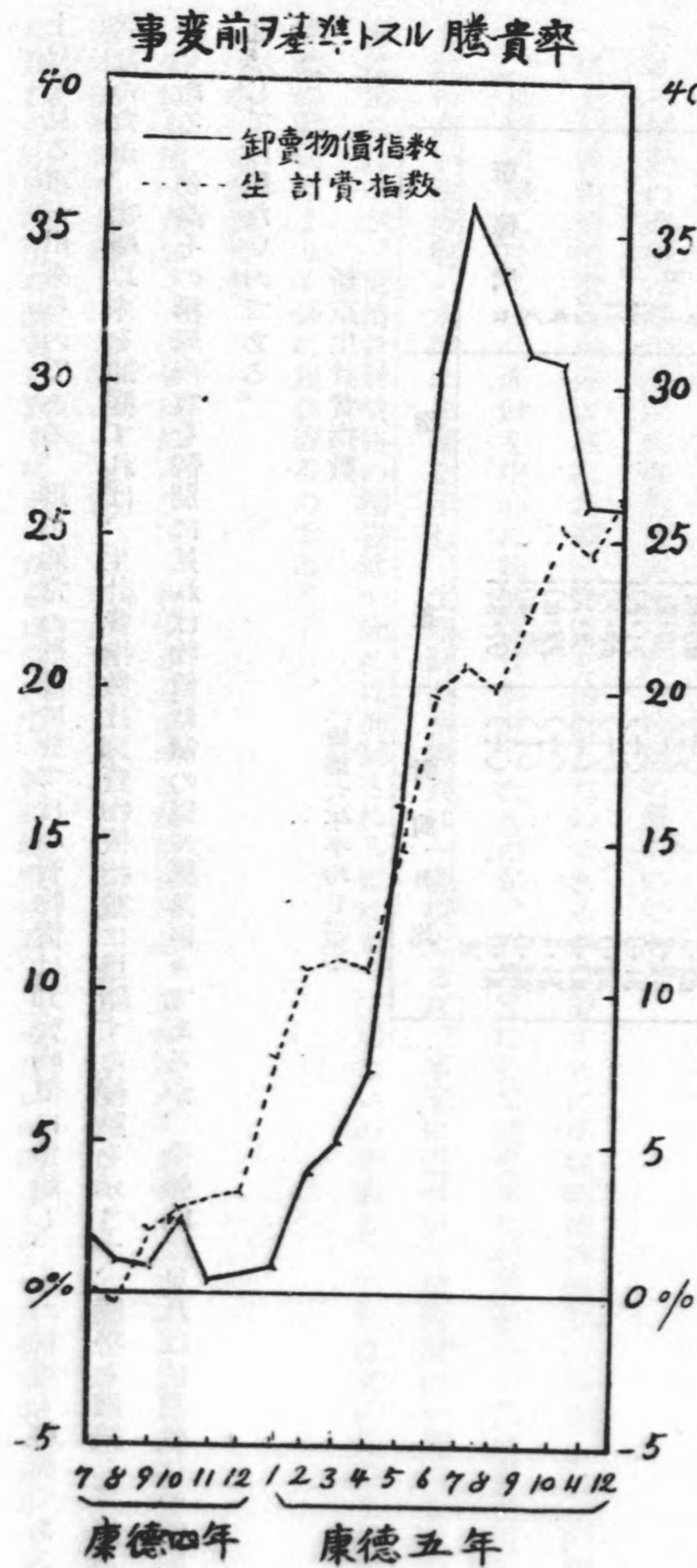
上昇を見る事が出来るのである。即ち通常の状態に於ては小賣物價は卸賣物價に追隨し、その程度も輕微である筈なのだが、事變以來を通觀すれば、生計費指數は卸賣物價指數に追隨する變動を示さず、騰勢を繼續して居るのである。勿論その構成内容を個別に見れば物價統制の爲に騰落區々であるが、全體的に見れば依然軟化の傾向を示しては居ないのである。

新京生計費指數

(康徳六年平均=100)

康徳	指 數	對 前 月 比
四、	105.80	11.1%
三、	105.30	11.1%
二、	107.90	11.1%
一、	108.50	11.1%
十、	109.00	11.1%
九、	118.70	11.1%
八、	118.70	11.1%
七、	119.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%
七、	117.00	11.1%
六、	117.00	11.1%
五、	117.00	11.1%
四、	117.00	11.1%
三、	117.00	11.1%
二、	117.00	11.1%
一、	117.00	11.1%
十、	117.00	11.1%
九、	117.00	11.1%
八、	117.00	11.1%

即ち卸賣物價指數の落付に反して、生計費指數は未だ騰勢熄むに至らず、卸賣物價指數の七月以降の反落には追隨せずして（事變以後に於て低落を示したのは、四年八月、五年四月、八月、十一月であり、その低落も輕微であり、その翌月には直に顯著なる騰貴が起つて居る）極めて力強い上昇の跡を示して居るのである。これは次圖に見る如く事變前を基準とする各月の卸賣物價指數と生計費指數との騰貴率が並行せずして、生計費指數の一途なる騰勢となつて現れて來て居るのである。



かゝる生計費指數上騰の一般的原因としては、民需に對する消費財の供給減及輸送の不圓滑を挙げ得るが、此の一般的原因に加へて、生活必需品の中には輸入品が多く國內に於ける一方的な需給調整の徹底し得ざる事、配給組織が日滿人間共に錯雜不統一である事、及び國內各地方の價格構成が不圓滑なる事等々の種々の事情に阻害されて物價統制が徹底し得ず、廣汎なる公定價格制施行が困難であり、爲に小賣物價の騰勢は十分に抑止し難かつた爲めである。卸賣物價は小賣物價に可成り先行して變動するものであり、從て現在の卸賣物價指數と生計費指數との間の乖離のみからして小賣物價の統制の效果の不十分を斷定する事は早計でもあらうし、卸賣物價に遅れて今後小賣物價の低落を見るかも知れないが、現在の錯雜なる配給組織の整備されざる限り、小賣物價に於ける商品の性質上、卸賣物價統制とは異なる小賣物價統制の效果の達成を期待する事は困難なのである。次に等しく生計費指數の著騰と云つてもその内容の如何によつて生活への影響を緩和し得る程度に相違があるであらう。即ち生計費の騰貴に對して収入の増加が伴はないとすれば、當然從來蓄積された貯蓄により補ふか、生計費の一部を縮減せしめるかしなければならぬが、此の縮減し得る弾力性のある費目と、無い費目とはその騰貴の影響の結果が相違して來るのである。故に生計費指數の所謂五大費目別にその騰貴振りを考察しよう。

(康徳三年平均基準)

飲食物費	五年十二月指數	對事變前比騰貴率
	一三・七	三・九%

事變下康徳五年の滿洲物價の動向と今後の展望

被服費	一六・九五	五二・二
住居費	二三・天	二〇・四
光熱費	二四・三六	三三・五
雜費	二九・七三	二四・〇

飲食品費は二二・九%の騰貴であるが飲食品費は生活費の基礎であり、生活水準を決定するものであるが、本費目の騰貴が嗜好品或は副食品の一部の騰貴に基因するならその弾力性は認められるであらうが、主食品の騰貴により齎らされるものであれば、その弾力性は期待し難くその影響も輕視を許さぬのである。所が飲食品費二二・九%の騰貴の内容は、主食品三九・七%の騰貴、副食品一七・九%の騰貴、嗜好品六・六%の騰貴を示して好ましからざる騰貴内容を現して居るのである。

被服費の騰貴は五一・二%の著騰にあるが、被服費は恒常的な支出でなく、その新調なり、再製なりはその價格騰貴により可成り容易に延期され得る。然し延期された事は將來に更新する被服品費用を増大せしめるだけの事である事を思へば現在の著騰に對して將來の積極的引下が講ぜられる要があるのである。尙被服費中、衣服費の騰貴は四九・〇%、身廻り品費の騰貴は五六・三%である。

住居費の騰貴は一〇・四%に止り、全費目中騰貴の最も少いものであるが、之は住居費の中心をなす家賃の安定の爲である。

家賃は事變に拘らず價格變動を起しては居らない。然しこれはその期間に住居を移轉しなかつた一般的な場合に該當するもので、他方に起て新しい住居に對して於される需要を充たす爲の家賃の騰貴は見逃し難き事であらう。

光熱費の騰貴は二三・五%を示して居るが、その内燈火費たる電燈料及石油費は殆ど不變であり、この騰貴は主として燃料費中の薪の騰貴に基いて居る。

雜費は二四・〇%の騰貴を示して居り、雜費は衣、食、住以外の諸費と云ふ意味に於て、最も弾力性ある費目と考へられ勝ちであるがその内容に於て文化費に該當するものも存するが、又同時に衣、食、住と同等の重要性あるものも存する即ち保健衛生費、教育費、交通費等である。又娯樂費交際費にしても全部的に他の費目に代替し得ない固定性の存する事も考慮されねばならないが故に、此の雜費の著騰の影響も看過し得ないものであらう。

新京生計費指數

(康徳三年平均=100)

	糧食品費	被服費	住居費	光熱費	雜費
康徳四、七	108・元	107・六	101・三	100・六	104・六
八	107・六	106・七	101・三	101・四	104・四
九	113・三	106・七	101・三	101・四	104・三

事變下康徳五年の滿洲物價の動向と今後の展望

三	二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	五、一	二	二	〇
一三三・二七	一三〇・二六	一三四・四五	一三七・八〇	一三三・九四	一三四・〇八	一三三・五六	一三一・〇九	一三〇・四三	一二七・三四	一二九・二二	二〇・八八	二四・九九	一五・〇五	二四・七九	二三・八九
一六二・九五	一五九・八六	一五九・五〇	一五九・八九	一五八・八八	一六四・二五	一五九・二九	一三〇・一一	一二〇・四五	一二〇・四三	一一五・五六	一〇九・八四	一〇七・九三	一〇八・〇三	一〇七・七二	一〇七・五六
一一三・五六	一一四・〇九	一一二・八一	一一〇・〇〇	一〇七・九〇	一〇七・一六	一〇五・〇三	一〇四・七三	一〇三・三三	一〇三・三三	一〇五・〇三	一〇四・一一	一〇四・一一	一〇四・一一	一〇三・八二	一〇三・〇五
一一四・三六	一一三・二一	一一三・一三	一一三・一三	一一〇・八〇	一〇九・四〇	一〇九・一八	一〇七・六三	一〇四・四七	一〇四・四七	一〇七・七八	一〇三・四五	一〇二・六五	一〇一・四	一〇一・四	一〇一・三
二二九・七三	二二八・四六	二二〇・二六	二二七・八七	二二六・三〇	二二六・三〇	二二八・三五	二二七・八七	二二五・五九	二二五・五九	二六・三三	二六・九八	二四・六五	二七・一八	二七・〇八	二六・七三

### 三、今後の展望

滿洲物價の動向を指數の推移に従て考察し、戦時物價の様相の一端を窺ひ得たのであるが、康徳五年下半期に

及んで現れた指數の軟化は果して今後の趨勢として持續するであらうか、康徳五年初頭來の騰貴は戦時物價の趨勢として基調的であつたには相違ないが、その中には思惑的行過ぎが多分に内在した事は既に認められた所であり、而してかゝる行過ぎが諸統制策により訂正されたのが年末にかけての物價に多大の影響を及ぼしたものである事も前述の如くであるとすれば、今後の物價に就ても樂觀は許されないのであらう。事實康徳六年一月の指數に就て見れば、卸賣物價指數は一六一・四にて十二月に比し三・三%の騰貴であり、生計費指數も一月は一三六・一九にて前月に比し二・二%の騰貴を示すに至つて居る。指數の動きより見れば、その軟化は十一月を以て一應底をつき十二月來再び反騰に移行して居る事が察せられるのである。

戦時經濟の統制強化は、需給關係を調整すべき市場價格の機能を喪失せしめ、物價の騰落は必ずしも需給關係を反映せざる状態に至つて居る爲、物資の需給關係よりして今後の物品の動向を推察する事は困難であると云はねばならないが、考へられる諸傾向を綜合して今後の展望をして見よう。

昂騰を齎す事情としては

(1) 事變の繼續、大陸經營（東亞新秩序の確立）の本格化、生産力擴充の強行による軍需、建設資材の需要増が續く事

(2) 消費財の蓄積物資の減少、即ち現在迄の物價統制の効果を援けて來た消費財のストックは消費者の手許には勿論、輸入制限の強化により工場、倉庫、商店に於ても減少を來し、本當の物資不足が現れて來る事。